讀書

現代教養文庫

37

社会思想研究会出版部刊

現代教養文庫

37

讀書と人生

河合栄治郎編

社会思想研究会出版部刊

はしがき

ここに刊行する読書と人生は、曽て河合栄治郎編「学生と読書」として、日本評論社から刊行されたものである。同書は当時学生教養社会に怒濤の如き歓迎を受けた。本文庫に収めるにあたり、紙数の都合で、二、三の論文を省略したが、手に取るように読書の仕方を教え、読書の醍醐味を語るものとして、現代の若き人々によき指針であることを信ずる。

戦前の本書には最初読書のしるべとして、文献のリストがついていた。それを発表したものが、現に本会から刊行して、好評を博している「教養文献解題」(上・下二冊)である。従って本書にはそれを省いたが、姉妹書として「教養文献解題」の利用をお勧めしたい。

読書の秋にあたり、この名著の普及を切に期待するものである。

昭和二十七年九月

社会思想研究会

目次

第三部　読書の回顧

第一部　読書の考察

読書の意義
——学問と読書——

河合栄治郎

一

燈火親しむべしという言葉に聯想されるのは、行燈の下かランプの下で、紺飛絣の着物の青年が食い入るように、「論語」か「孟子」に読み耽る姿であろう。だがテーブルのスタンドの下でアダム・スミスやリカアドの経済書を読んで資本主義経済の説明を辿って行くのもまた一つの読書の姿である。更に揺れる省線電車の中で、岩波文庫の「レ・ミゼラブル」に夢中になっているそこにもまた一つの読書がある。もし一双の眼が文字に注がれているのを読書とすれば、上に挙げた三つの場合の環境は異ろうとも、何れも読書たることにおいて同一である。しかし第一の場合の書物は修身治国を説くものであり、第二の場合は科学の書であり、第三の場合は芸術の書である。読む対象の異るに従って、読む人の心情もまた異るであろう、にもかかわらず、これをいずれも読書というがその目的において共通のものがあるのであろうか。第一の場合は修身治国の為の読書であり、第二は学問のための読書であり、第三は芸術のための読

書である。かくして読書の目的がそれぞれ異っているかのごとくである。もし読書の目的が共通だというならば、修身治国と学問と芸術とが、さらに根本的の目的において連繫しているということでなければならない。それではその根本目的とはなにか、読書とはなんのためにおこなわれるのであるか、これが読書の意義（ジン）と価値（ウエルト）の問題である。

二

私の説明は「学生と先哲」の冒頭にある拙稿「個人成長の問題」（註）に接続する。従って読者はあの一文を思い返して戴きたい。われわれの前に無限の世界が展開している、だがそれはわれわれに対立しているゆえに、これを外的世界と呼ぶ。ところがわれわれが外的世界を見るがごとくに、われわれがわれわれ自身を考察の対象とすることができる。今私がかく考えている、私がかく意志した等々、こうしてわれわれの内に彼の外的世界に優るとも劣らぬ広大無辺の世界が見出される、これを内的世界または自我の世界と呼ぶのである。内的世界におこなわれる活動は、わかれて知識的、道徳的、芸術的活動とすることができる、これらの活動が人類的に集積されたものが、学問、道徳、芸術である、かかる内的世界を実り豊に耕作（カルチュア）すること、これを構成（ビルデン）すること、これが教養である。従って教養とは、この本を読み彼の彫刻を漁ることではない、教養とは自我を構成することであり、自我を耕作することである。そしてその視野に於て汎く、その情操において豊に、その同胞への関心において深いもの、これがわれわれの

理想とする人格であり、かかる人格へと成長を努力すること、これがわれわれの人生の目的でなければならない。

（註）「学窓記」（社会思想研究会出版部発行）に収載。

かくして学問と道徳と芸術とは、ともにわれわれの人格を構成する要素をなすものである。従って人もし学問や道徳や芸術の意義はなにかと問うならば、これらはわれわれの成長に役立つものと答えられなければならない。学問、道徳、芸術が自我を構成するものであり、自我の成長に役立つことに意義があるにかかわらず、いかに多くの人においてこれらのものが自我から遊離して、自我に根ざすことなしにこれらのものが営まれ、自我の成長に与ることなしに放任されていることであろう。学問をするもの、道を説くもの、芸術を営むものは、その仕事をなしている時だけは、他の人と異るように見えるかも知れない。しかしその仕事を離れてその人を見る時に、その人は仕事からなんらの痕跡も影響も受けていないものが少くない。実験室で科学の実験をしているときには、独断を排し偏見を退けて、冷徹に原因結果を辿る人々が、実験室を出でて自己の定まった専門から離れて、一般人と同じ問題を取り上げて議論する時に、その人の冷徹な原因結果の追窮は忘れたかのごとくに、また独断と偏見を退けたのは他人の仕業であったかのごとくに、恰も学問なき人と異ることなく、独断と偏見とに囚われ、論理の飛躍をなして怪しまない。これは抑々何に原因するのであろうか。これ一に学問がその人にとって自我を構成するものだとの自覚が欠如しているために、自我から遊離しているために外なら

ないのである。学問の意義と価値とは直接自我の成長に役立つことだけではない。後に述べる別の一事がこれに附加されねばならない。だが学問の最も主要なる意義と価値とはここに在るのである。

学問、道徳、芸術を構成要素として、それぞれの理想である「真」と「善」と「美」とを調和したのが人格である。ところが人格は窮極の理想であって現実にわれわれ各個人が実現しているものではない、もし人格が今現に実現されているならば、すでにそれは理想ではなくて現実に化することとなる。なるほどわれわれ各個人は成長して人格となる可能性を与えられ、その萠芽は現に実在している、しかしその充全なる姿は遠く理想として未来に在らねばならない。ところで理想としてわれわれに考えられる人格が現に実在するものとして信仰されることがある。かく信仰されるものが「神」である。神は単に哲学的思索の結果として、われわれの概念として要請されるのではない、実在するものと信ずるものにとって、それは現に実在するものである。かかる信仰者にとって神は現に実現する人格である。神は人格として真善美を調和するものであるから、「聖」(das Heilige) なるものとしてわれわれは尊崇という特殊の感情を抱くこととなる。学問と道徳と芸術とは人格を構成する要素であり、宗教は人格の実現して神に関するものであるから、学問、道徳、芸術と宗教とは、同一の平面に並立するものではなく、立体的の関係に立つものである。

ここまで述べてくると、本文の冒頭に挙げた読書の種類が、学問であろうと道徳、芸術であ

ろうと、共に自我の成長を目的とする点において、全く共通であることがわかるであろう。だが私は読書を語る前に、今少しく学問についての説明を進めねばならない。

三

学問とは何であるか、学問を非学問と区別する特徴は何であるか、一言にしていうならば、学問とは知識の体系である。知識という言葉にもすでに色々の意味があるが、ここでは普遍妥当的な知識を指すものとする。体系とは単に断片的なものが機械的に集合しているのでなく、一定の中心をもって統一組織されていることを意味する。例えば山間の猟師や海辺の漁夫は多年の経験から、山や海の気象の変化について、適確にして誤りなき観測をするであろう、その限りにおいてはそれは知識である、だが単にある特定の事象に関する一つの断片的知識たるに止まって、体系ある知識ではない、猟師や漁夫を学問あるものといわないのはそのゆえである。学問はわかれて科学と哲学となる。二つを区別する標準は古来色々に語られたが、私の考えるところによれば、科学の対象は現実であり哲学の対象は価値である。価値とは「真」とか「善」とか「美」とかのごとき理想をいうのであり、現象とは時間空間の中に実在するものをいうのである。価値は絶対に科学の対象たりえない、なぜなれば、価値とは理想であり、やがて実現さるべきものであって未だ曽て実現されたものではない、すなわち現象ではないからである。現象は例えば自然界の現象のごとき、経済、政治、社会のごとき社会現象である。ところが言

葉としては理想といわれているものが、厳密にいえばわれわれのいう理想や価値でないことがある。例えば思想史上においてある時代の政治理想といわれたものがある。これらの理想とはわれわれのいう理想の、特定の時代における一表現であって、決してわれわれのいう理想そのものではない、理想とはこれらの上に超越して遠く彼方においてわれわれを指導するものであり、これらの特定の時代の政治理想とか社会理想とかは、時間空間の中に実在したものとして現象に属するのである。人はしばしば現象としての理想とわれわれのいう理想とを混同しやすいが、両者は厳格に弁別されねばならない、現象としての理想は現象であるがゆえに、科学の対象となるのであって、哲学の対象ではない。古来哲学をもって科学の綜合集成であるといったものがある、しかし綜合集成は分量の増大を意味するだけで、哲学と科学との差異は分量の大小にあるのではない。また古代希臘において世界は火であるとか水であるとかいうのが哲学といわれたが、これも科学に属することで哲学ではない、世界は広大であるにしても依然として現象であるからである。

価値は哲学特有の対象であって、決して科学の対象たりえないが、現象は必ずしも科学の独占的対象ではなくて、往々にして哲学の対象となることがある。例えば歴史哲学、社会哲学、法律哲学等の哲学が、対象とする歴史、社会、法律等は、「真」「善」「美」の価値とは違って、科学の対象たる現象であり、同じ対象に対して歴史学、社会学、法律学等の科学が成立しているのである。それではかかる対象について科学が成立するとともに哲学が成立するならば、

科学と哲学との区別は、必ずしも対象が価値か現象かの区別のみではつくされない、今一つ別な区別がなければならないが、それは何であろうか。私は同じ現象に関して科学と哲学とをわけるのは科学は現象相互の原因結果の関係を説明することを本質とし、哲学はその現象を価値的に考察するところにあると思う。これが普通に科学的見方と哲学的見方とが区別される要点である。もちろん数学とか論理学とかは、必ずしもこの区別で律せられない所があり、明白に科学に属する学の中でも動物学、植物学のごとくに必ずしも因果関係を説明するのでなく、単に分類記述するのみのものもある、しかし科学の本質が因果関係の説明にあるといっても過言ではあるまい。哲学は現象を価値的に考察するといったが、すでに価値的に見るとは終局の価値を予想し前提しなければならない、その終局の価値は哲学特有の対象たる価値であり、かかる価値を終局的のものとして、それとの関係から現象の価値付けが導きだされるのである。われわれが例えば「読書の意義と価値」(Sinn und Wert)という場合は、読書という現象の分析や記述の科学的見方を意味するのでなく、その終局の価値に照らしての哲学的見方を意味しているのである。

四

以上のごとくに対象と見方との両面から、科学と哲学との区別はなされるのであるが、科学、哲学の二つ併せて学問となる。ところが学問は道徳、芸術や宗教と根本的に異る特徴がある、

それは学問はこれらのものとあるいは立体的にあるいは平面的に相対するのみでなく、これらのものを対象とすることができることである。例えば学問の理想である「真」が「理論哲学」（すなわち「認識論」）の対象となるのみでなく、道徳の理想たる「善」が「道徳哲学」、芸術の理想たる「美」が「芸術哲学」「聖」が「宗教哲学」の対象となるがごとくである。さらにかつてある時代に現われた現象としての学問、道徳、芸術、宗教は、それらのものがいかにして発生し、またいかなる結果を生んだか、という因果の関係を考察する科学の対象ともなしうるであろう。さらに今一歩を進めると、学問それ自体をも含めて、学問、道徳、芸術等の全体の意義と価値とを探求する本文に取扱うような学問も考えられるであろう。これを単に道徳のみに限局された道徳哲学と異る「高次の道徳哲学」というもよく、また別に「人生観の哲学」といってもよいであろう。これもまた一つの哲学であり、従って一つの学問である。

ここにおいて一つの問題が起るであろう、自然現象にしろ社会現象にしろ、現象を対象とする科学は別として、人生観の哲学を始めとして、理論哲学、道徳哲学、芸術哲学、宗教哲学等の哲学は、人生とか学問とか道徳、芸術、宗教に関係した学問であるが、こうした学問と、その学問の中で取扱われる人生、学問、道徳、芸術、宗教とは、いかなる関係を持つものであろうか。学問は前に述べたように、知識の体系である、従って学問とは知識的活動の成果であって道徳とか芸術とかの活動とは異るものである。学問は知識の対象として学問、道徳、芸術、宗教、人生を問題としようとも、それは要するに知識的側面の産物たるに止まって、それらの

学問は学問、道徳、芸術、宗教、人生それ自体ではない。例えばいかに理論哲学で「真」を検討しようとも、そのことが直に全学問それ自体にはならないし、道徳哲学で「善」を研究しようともそれで直に道徳が成就される訳ではない。学問はその対象を知識的に把握するに止まるので、知識的に把握されることで完了するのは、単にその学問としてであって、これによって道徳、芸術、宗教、人生が完了することにはならない。これらのものは知識的に把握されること以外に、別にその根本存在の理由を有するのである。もちろんこれらを知識的に把握することが、その根本の本質へとわれわれを刺戟する契機としては役立つだろう、しかし依然としてそれは契機たるに止まって、その本質そのものではない。実に学問の中の哲学は、その対象とするものが価値自体であるか、あるいは価値的見方をするものである、しかして価値はわれわれの理想として、われわれの憧憬の目的であり、それへの近接を鼓舞し激励し鞭撻するものである。人もし道徳哲学を学修する場合に彼が自然現象を研究する自然科学におけるがごとくに、彼自身を埒外に置いて、道徳を観察しているならば、道徳哲学は、その趣旨を没却するであろう。もちろん道徳哲学も学問である限り、知識の体系として厳密なる論理が辿られねばならない、しかし科学ならばそれをもって終るが、哲学はそれをもってつくされない。実践的情熱をもって自己が前面に現われ、自己との聯関が常に努力されねばならない、これがテオリアとフィロソフィアとの区別されたる重要なる核心である。しかるに哲学に対するに科学に対すると異ることなく、単に知識するをもって満足するものの、いかに数多いことであろう。要するに

学問たる限り、自我の成長に役立つ点において、科学と哲学とは異らないが、哲学はあるいは自我の成長それ自体を説き、あるいは自我の要素たる学問、道徳、芸術を説き、さらにあるいは神を説く点において、科学よりもさらに一層自我の成長に直接的に役立つものであり、自我との関係は直接的だといわねばならない。

五

以上において私は学問の意義と価値とを述べた。学問はそれが何らの実際的の結果を生まなくても、体系的に知識を収得することそれだけで、すでに人格構成の要素として意義と価値とがある、これが根本的な意義と価値ではあるが、しかし必ずしもこれをもってつきてはいない、これから派生する第二義的の意義と価値がある。

学問と並んで道徳がある、道徳的活動とは現象の世界において未だ実在を獲得せざる概念に、その実在を附与する活動をいう。例えば私がある人に好意を果そうとする、これは一の概念であって未だ現象界に実現されてはいない、この概念に実在を与えんがために、現象界に何らかの活動となる時、そこに道徳的活動があることとなる。人格の実現とは「私が何であらねばならないか」（What should I be?）に対する解答であったが、「あらねばならない」私は道徳的活動をその一要素として「何をなすべきか」（What should I do?）を問題とするに至る。「あらねばならない」ことが人格の実現だとすれば、それは単に私にとって「あらねばならな

い」のみならず、また私の同胞にとってもまた「あらねばならない」ことである。単に私がそれに努力すべきのみでなく、また私の同胞に対しても私が努力すべきことでなければならない。そのために同胞の「あらねばならぬ」ことに対して、われわれは何かをなさねばならない、かくして道徳的活動に駆られるのである。ところが私の人格の実現は私のみのなしうることであって、第三者の代替しえないことであると同じく、われわれの同胞の人格の実現もまたわれわれが代替しうることではない。われわれのなしうるのは、ただ同胞の人格のために必要なる条件を提供することのみである。かかる条件を供与することが、道徳的活動の目的である。ではいかなる条件を供与すべきか、これが「何をなすべきか」の問題である。窮極の目的は同胞の人格の実現である、それがための条件はこの目的に適合するものでなければならない、かかる条件の選択に際して、われわれの指針となるのが科学と哲学とである。例えばこれこれの原因はこれこれの結果を生ずると科学は教える。この結果が望ましいか厭うべきかによって、この結果を生ずる原因が望ましいか厭わしいかとなるだろう。結果が望ましいか厭わしいかは、目的であるところの人格の実現に適合するか否かで決定されるので、これは価値的見方をする哲学に俟たねばならない、ところである結果が望ましいか厭わしいか、が決定されたならば、それによってその結果を生ずる原因が採られるか捨てられねばならないこととなる、かかる因果関係を教えるのは、これを科学に俟たねばならない。かくして科学と哲学とは条件の選択を指導する任務を果すことにより、われわれの道徳的活動を可能ならしめるのである。固よりかく

して実現される条件は、価値ではなく、価値たる人格実現のための効用を有するものたるに過ぎないが、しかしなおこれにより価値を実現する手段として価値付けられうるものである。しかして他人の人格実現のための条件を供与する道徳的活動は結局は、われわれ自身の人格の構成要素をなすのであるから、科学と哲学とは直接にはわれわれの道徳的活動を可能ならしめる効用を持ち、間接にはわれわれ自身の人格実現に役立つこととなる。前に述べた科学、哲学の意義と価値は学問としてであるが、この場合は道徳の領域においてである。世に学問の意義を福利厚生に置くもののあるのは後者の意味においてである、なぜなれば福利といい厚生というは、私のいう人格実現のための条件に当るからである。学問の意義の一つがここに在ることは忘却してはならないが、しかしたとえこうした結果を伴わなくとも、学問は単に知識の体系として、第一義的価値を有することは、さらに一層注意されねばならない、いわんや前の場合にも終局にまで追窮すれば、矢張り第一義的価値から派出するのである。

六

私は学問の意義を以上二点に置くのであるが、世にはこれと別な意義を考えるものもある、これを批判することが、反面に私の立場の補充的説明として役立つであろう。

まず生活の手段として学問の意義を認めるものがある。学問の発生した径路を顧みると、生活の便益のためとして、数学も天文学も物理学も発生したことは疑うことはできない。しかし

発生の理由は何であろうとも、それが現今における学問の意義だということにはならない。現に歴史的に見ても、学問はやがて生活の方便としての地位を脱して、学問それ自体のために学問が営まれるに至ったのである。もし今でもなお学問を生活の手段として意義付けようとするならば、われわれはいかにこれを批判すべきであるか。ここに生活とは何を意味するかが、まず問われねばならないが、もし生活という概念を「正しく生きること」あるいは「真に生きること」と規定すれば、「正しく生きる」「真に生きる」とは、何を意味するかがさらに問われねばならない。そしてこの場合に「正しく」あるいは「真に生きる」とは、私の述べたごとくに人格の実現だというならば、生活の手段として学問を意義付けるとは、私が採る立場に近いものといいうるだろう。ところが生活の手段という場合の生活とは、「正しく」とか「真に」生きることではなしに、飲み食い眠るという物質的生活を意味することが多い、かく解すれば私の立場とは正に対立することになろう。ところが仮りに物質的の生活を意味するとしても、もしこれらの物質的生活が単に条件であって、条件として奉仕すべき価値が別に存在し、それが例えば私のいう人格の実現というものだとすれば、条件の手段として学問を意義付けることは、私が前に述べた第二義的の意義に近いこととなろう。ところが実際は物質的生活を条件として考えるのではなくて、物質的生活それ自体を価値として、それへの手段条件として学問を意義付けることが多い、それならば私の立場と正に対立するであろう。かくして物質的生活の手段として学問を意義付けるものがあるとすれば、われわれはまず第一に、物質的生活が価値

与えられているが、さらにこれに対する批判は理想主義者によりつくされている。詳細は拙著「グリーンの思想体系」の中の「グリーンの功利主義批判」を参照されたい。次にもし学問が物質的生活の手段だとすれば、手段たる学問は目的たる物質的生活により左右されねばならない。ところがある目的により左右されるならば、いかなる場合にも妥当するものとならなくなる。しかるに学問とは普遍妥当的な知識の体系である、ここにおいて物質的生活の手段たる学問はすでに学問ではなくなるのである。私の立場において学問は直接には理想たる「真」により指導されるのであり、「真」を通して人格の実現に参与するのであるから、学問を指導する「真」は、決して学問の内容を左右するものではなく、かえって学問をして学問たらしめる要件である、これに反して物質的生活が目的となる場合は、学問の内容をその時その時の便益に応じて左右するのであり、学問をして学問たらしめる本質を剝奪することとなる、ここにこの立場の欠陥が存するのである。

生活のための手段として学問を見る一つの変形は、試験のための学問である。我が国のごとき受験国民は、下は幼稚園の入学から上は国家試験に至るまで、常に試験に追われるがために、学問を愛し楽しむ機会に恵まれず、常に受験のための手段として学問を見るに至った、これが我が教育の一大弊害である。この場合当事者は必ずしも主義として、学問を試験の手段と看做すのではあるまい、ただ止むを得ずしてここに至ったのであろうけれども、受験のための学問

は依然として生活のための学問の変形であり、心あるものはこれから脱却することを努力せねばならない。

学問は生活の手段としての地位を脱して後、やがて学問は学問「それ自体のために」(For its own sake) 存するという立場を生ずるに至った。それ自体のためとは、換言すれば学問が目的であり価値であるとすることである。この立場は学問を生活その他のあるべからざる目的から解放して、独自の目的を樹立した消極的の功績のあることは否定できないが、これに対して問われねばならないことは、学問が価値自体であって、なぜにさらに高次の価値を認めることができないかということである。もし学問を価値だとするならば、道徳、芸術等の価値は否定されるのであるか、もしこれらの価値をも認めるとすれば、学問の価値とこれらの価値とは、多元的に並列して何らの関係も統一もなしに放任されるのであるか、かくのごときことは実際生活において、論者自身が果して矛盾なしに実践しうることであるかどうか。凡そこれらの一聯の問いが発せられねばならない、しかしてこの立場は解答に窮せざるをえなくなるであろう。

学問のための学問という立場は、実際は道徳や芸術や宗教等の価値を承認しないので、学問の価値が唯一にして最高だとすることが多い、しかしてこの立場が所謂主知主義 (Intellectualism) と称せられるものである。主知主義を全般的に批判することは、興味あることではあるが、ここでは割愛せねばならない。ただ学問のみが唯一至上の価値だとすることは、

道徳、芸術、宗教等の諸価値に対するわれわれの厳たる要求を看過していることを指摘すれば足るであろう。主知主義はソクラテス、プラトー、アリストートル等の偉大なる学者の唱えたところであるが、啻にそれが不充分であるのみでなく、それからの結果は決して軽視することはできない。例えば主知主義によるも、学問は単に科学のみでなく哲学をも包含するのであるから、道徳、芸術、宗教等に対する哲学が存在する筈である。しかるに主知主義は知識を過重視するために、そうして知識は科学的知識においては単に知識を持つことのみをもって足るために、主知主義の後年の産物として自然主義の哲学を生み、現象の因果関係の学問すなわち科学のみを認めて、道徳、芸術、宗教等の存在を否定しやがては哲学をも否定するに至ったことである。ここに至って主知主義は科学唯一主義にまで発展したのである。次に主知主義の立場に立つ限り、仮りに道徳、芸術、宗教等に関する哲学を承認するとしても、単に知識を所有することをもって満足し、知識を契機として道徳、芸術、宗教の本質に味達することを忘却しやすい。前に述べたように、学問の特徴は、学問自体を取扱うのみでなく、道徳、芸術、宗教をも取扱うことにある、だが学問がこれらを取扱う場合は、単に知識としてであって、知識はこれらの本質に味達する契機たるに止まる。もし契機を捕捉することのみに甘んずるならば、これらの本質は没却されるであろう。しかるに現代においてもこれらを取扱う場合に、恰も自然現象や社会現象を扱う場合と同じく、自己を埒外に置く観察者の態度を採ることが多い、これが主知主義から結果した弊害の他の一つである。要するに主知主義は、学問以外の価値を無

視するのみならず、学問それ自体をも科学に偏局し、さらに学問と学問する者彼自身との聯関を忘却させるものであり、われわれはこれに対して厳たる警戒を怠ってはならないと思う。

七

私はここで漸く読書について語る時にきた。もし人類に記憶と云う能力が与えられなかったならば、われわれの思惟はその瞬間瞬間に発生すると共に消滅したであろう。幸にして記憶力が与えられるために、われわれの思惟を保存することができる。所が記憶力にも限度があるから、もし自分の思惟を単に記憶に頼るのでなしに、永久に保存しようと思うならば、別の方法を必要とする。また自分の思惟を他に伝達するためには、当然にある方法を借りなければならない、かかる方法として創造されたのが、言語と文字とである。まことに言語と文字との出現こそ、人類文化の発達のために、最も重要なる役割を果したものであろう。文字をもって記録することが始まった時に、そこに書物が生れる。文字も各自の手記である場合に、書物の数量は限定されていたのが、やがて印刷術の発明されるや、書物の普及力は無限に増大するに至ったのである。

自分の思想（ここでは多少組織化された思惟を意味することとして置こう）を他に伝えるに舌をもってすると筆をもってすると、換言すれば語ることと書くこととがあるように、他人の思想を享受するにも、聴くことと読むこととがある。聴くことと読むこととの得失は、仮に論

断することは許されない。聴く場合には、語る人に面接することができるから、その人の語調から語られる内容に凹凸の差別が現われる、これと反対に読む場合には平板な文字に変化がなくして印象は読者自身の感ずることの外は少い、また聴く場合には語る者の自我が躍動しているから、自ら聴く者の自我も誘出される、これが道徳や芸術や学問の中でも哲学のごとく、自我との聯関が直接的であるべき場合に、聴くことが読むことに勝る点であろう。さらに語る場合には聴衆を前にしているから、聴衆の理解力の水準や興味関心の傾向を、意識的にか無意識的にか計算の中に入れることとなる、かくして語るものは、誰でもを相手とするのでなく、多少なりとも聴衆の性格に適合した内容と表現とを採るであろう。こうした傾向は聴者が少人数である時に、一層強められる、例えば小さな教室に於ける講義や演習における討論などがそれである。もし聴く者が単一人である場合、例えば個人教育方法（チュートリアル・システム）においては、聴く者の個性が最もよく考慮されることになる。聴くことの特徴は、読むことの欠点である。しかし読むものは、読まれる作者を無限に選択することができる。聴く場合には語る人がその時代のその地方に限られるが、読む場合には、時間的にも空間的にも限局されず、遠く古代にも異国にも人を求めることができるから、読むものの前には無尽蔵の宝庫が開かれる訳である。また書物は読者の何人であるかを予想して書かれるのでないために、読む者は自分の個性に適合した内容と表現とに出会うとは限らない、しかし同時に読む場合は聴く場合と違って、作者からの刺戟に囚われずに、自己の自由に感銘を受けることができる。この点で読書は書を読むよりも多分に自己

を読むことである。啻に感銘が読者の主観の動きに依るばかりではない、いかなる時間にいかなる速度で読むかも、また読むものの自由である。ある部分は急いで読むこともあると同時に、他の部分に数時間を費して味わい尽すこともある。否抑々いかなる書物を読むかということさえ、自分の選択に係るのである。かくして読むことは聴くことよりも、多く自己の現に有する水準に決定せられる、読書は自己を高めるとともに、読書は自己により高められるのである。自己なるものが前面に躍動することから、読むことは自己と書物とが対立しているにかかわらず、多分に孤独的色彩を帯びて、恰も自己が自己と対面しているがごとくである。日常匆忙の俗事に追われている人が、独り机に向って書に対する時、その書が人生や道徳を語るのでない場合でも、恰も僧院において独坐していると似た清純な気を起させるのは、以上のような意味が読書にあるからであろう。書物の内容と劣らずに読書することそのこと自体が、すでに一つの貴重なるものを与えるのである。

八

読書はすでに読者の成長を前提しているから、厳格な意味の読書（すなわち趣味や娯楽は別として）は、その以前において一定の準備がなされねばならない。これが普通学校教育の使命である。学校では教師が「語る」ことを主眼として学生は「聴く」ことに重点を置く、たとえ学校で書物を使用するとしても、それは所謂教科書であって、教師は教科書を「読ま」せるた

めに「語る」のである。私は後に述べるように、厳格な意味の読書にのみ、凡そ読書に値する重要性を与えるのではあるが、しかしわれわれは読書の予備としての学校教育の重要性を軽視してはならない。学校で教えられる数学、地理、歴史、植物、動物、鉱物、地質、公民等の学問は、やがて後の高度の学問に入る階梯として必要であり、さらに国語、漢文、英独仏等の外国語は、思想を享受するための言語文字の理解として、これなくしては真の読書の門に入ることはできない。学校では思索よりも暗記が、批判よりも謙虚が必要である。早熟な青年が学校の教育に堪えられないで、夙に読書に走るものがあるが、これこそ一定の踏むべき階段を飛躍することであって、どこかその人の思想に権衡のとれないという欠点を生ずるに違いない。学校教育の段階では、教師は徒に自由とか自発とかに重きを置き過ぎてはならない、必要なる準備をなすという自信の下に、相当の強制を加えて差支えないと思う。人間成長の初期に徒なる自由を与えて、真に自由の与えらるべき後期に、却て強制圧迫を加えようとする学校や家庭の方針は、弊害の恐るべきものがあると思う。

学校教育も高級学校に昇るに従って、強制よりも自由に、外から刺戟することよりも自発の心の動くことに、重点を置かねばならない。しかし学校の教育は要するに準備であって、それ自体をもって充全なるものではない。高級学校に昇るとともに、学校教育と並んですでに自己教育が始まらねばならない、否学校教育すらが自己教育の一の手段であるとの自覚が起らねばならない。だが学校教育をもって凡そ教育の一切が完了すると思うものの、いかに学ぶものの

中に多いことであろう。ここに「生活のための学問」という立場が現われているのである。
教育とは何であるかを厳密に定義することは、教育学者の手に俟たねばならないが、素人である私の考によれば、教育とは人を人たらしめることであり、すなわち自我をしてあるべき自我たらしめることである、これが私のいう人格への成長に外ならない。しかして人は人たらんとする欲求をすでに先天的に与えられている、もしこの欲求が与えられていないならば、人を人たらしめることは、いかに努力するも結局徒労に終るの外はなかろう。すでに与えられている欲求を覚醒せしめ、人たらしむべく引出すことが教育である、これが英語の educate も独逸語の erziehen も、教育という文字が「引き出す」ことを意味する所以であろう。古代希臘においてソクラテスが街頭で討論を試みた時に、彼は与えられているものを引き出すことを努めたのであった。彼が自己の任務を「助産婦的」と称したのは、胎児を引き出すに手を貸すことであって、胎児にすでに与えられていることを意味したのである。
教育における教師の任務は、ソクラテスの助産婦的なるところにあるが、いかに教育の意味が理解され、教師の技倆が優秀であろうとも、与えられているものが依然としてその儘に埋蔵されて、ただ外部より附加物が添附されるに過ぎない危険がある。外よりくるものを、すでに与えられているものに接触させる任務が、ここに是非とも必要となる、これを果すのは思索である。しかして、思索の主体はただ彼自身であって、第三者の代替しうることではない。かくして学校教育はそれを補充するために、教育される者の側に、自己の育成への欲求と努力とを

俟たねばならない。だがすでに自己の育成に目覚めたものは、単に教師の手を借りて育成することだけで満足せず、自己の育成に向うであろう、ここに自己教育が出立を開始する。自己教育においては、育成の活動的主体が自己であり、育成されるものは現実の自己であり、育成への理想はあるべき自己すなわち人格である。ここに自己を繞る三重奏がある。育成の方法は思索、内観、反省、意識等と呼ばれるが、思索は自己のみにより行われるのであるから、外部からの刺戟がない、内面の世界に行われるので、感覚しうる成果を生まないから、成果を認めた場合の喜悦がない、かくして思索は一所を回転して空廻りをする危険がある。ここに思索に堪えないものの実践に走る誘惑が伏在するのである。実践の早急に走らずに、しかも一所に佇立する緩慢を避けるがために、自己教育は教師ならぬ教師、人ならぬ人の、刺戟と指導とを必要とする、この要求に副うものが書物である。

九

娯楽や趣味の書物、教科書的の書物は別として、書物はその内容から見れば、学問の書、道徳の書、芸術の書、宗教の書と分類することができる。学問の書はさらにわかれて、科学の書と哲学の書となる。哲学の書も理論哲学、道徳哲学、芸術哲学、宗教哲学の外、さらに社会哲学、歴史哲学、国家哲学、法律哲学等々を数えることができるが、ここに忘れてならないのは、人生観の哲学である、これこそ人生の意義と価値とを説き、一切の価値の順位を決定するもの

でなければならない。
教育の意味を理解し、教育における自己教育の地位、自己教育における契機としての読書を辿ってきたわれわれには、以上に挙げた書物の中で、何が最も書物の名に値するものであるかは、自ら明白であろう。哲学の中の人生観の哲学が首位に立ち、その他の哲学がこれに次ぎ、やがて科学、道徳、芸術、宗教の書が置かれる。蓋し何のために読書するか、何のために学問、道徳、芸術、宗教が存するか、凡そ一切の意義と価値とを語るものは哲学であり、意義と価値とを把握することなくして、何かをなすことは無意味だからである。もしここに何かをなしつつあるものがあるならば、彼は必ずやそのなしつつあることの意義と価値とを把握しての結果に違いない。ただその把握は伝統と因襲とに決定されているだけである。しからばさらに伝統と因襲との意義と価値とが検討されねばなるまい。
読書の以前に学校教育が準備として必要であったように、読書に際しても予備的の読書と本格的の読書とがある。前者は書物の中でも、比較的に教科書に類似するものである、かかる書物から、われわれは自己の問題を探求せねばならない。私はここに自己の問題という、それはわれわれの問題とするものの内、真の自己の問題は少くて、周囲により世人により流行により与えられた問題が多いからである。読書に際して興味のありそうな章を拾い、索引で必要な部分だけを漁るがごときは、自己の問題を探求する方法ではない、そして何が自己の問題であるか、またあるべきかを語る書物として、私は伝記と思想史とが恰当であると思う。先人が問題

を抱いてこれを解決しようとした径路は、解決の方法に暗示を与えるよりも、その人の問題と対比させることにより、自己の問題を捕捉させるだろう。ここに私が自己の問題とは、問題の内容が自己独特であることを意味するのではない、真の自己の問題は、何人にも普遍的な問題である。私のいわんとするのは、内容が、自己の独占的たることではなくて、問題が彼の問題として、彼と問題とが融合していることを意味するのである。すでに自己の問題が求められたならば、やがて問題に対する解答が求められなければならない。ここに本格的の読書が始まるのである。思想史や伝記がここでも解答に役立つではあろうが、さらにくわしくは先人が自己の問題に対して与えた解答の書を繙かねばならない、ここに前に挙げた学問、道徳、芸術、宗教の書が、すべて門扉を開いてわれわれの敲くのを待っている。固より解答は自己の問題に対する解答であるが、自己のならぬ問題に対する他人の解答であろうとも、その解答への径路、その解答への資料、その解答への苦悩は、直に自己の問題に対する手掛りとなり指針となるに違いない。解答は自己の解答でなければならないが、この場合にも自己のとは自己のみに特有な天外奇想を意味するのでなくして、他人からの借物を平然として受取ることなく、自己と矛盾することなき、自己と融合したものを意味する。解答の内容からいえば、自己の問題が人間に普遍的であるように、自己の解答もまた万人に妥当する普遍的のものでなければならない。

かくして読書に対すべき態度が導きだされる。書物に対する時、われわれは常に自己から出立し、常に自己に復帰せねばならない。このことは道徳の書であろうと芸術、宗教の書であろ

うと、また学問の書であろうと異るところがない。しかるに世に自己を埒外に置いて読書するものが少くない、これが彼の生活のための学問、受験のための学問、学問のための学問と似た生活のための読書、受験のための読書、読書のための読書である。殊に彼の主知主義からの影響は、読書についても警戒されなければならない。道徳や芸術や宗教の書を読む場合にも、単にそれらについての知識を集積して能事了れりとするならば、道徳、芸術、宗教の骨子は没却されることとなる、否知識ですらも単に知識を持つことは、すでに真の知識ではない、知識もまた自己から出発して、自己へと復帰しなければならない。書を読むことといよいよ多くして、読む人のいよいよ賢ならざるは、ここに原因が求められねばならない。

十

最後に問われるであろう、本文の冒頭に約束された読書の意義と価値は何かと。私は特に読書の意義と価値とを題目として、これに解答を与えはしなかったが、本文の全体がこの問いに対する解答に当るであろう。自己教育とは自己をあるべき自己たらしめることである。しからばあるべき自己とは何かというならば、学問と道徳と芸術とによって構成された自己である。一言にしていえば人格である。自己教育に対する契機となるのが読書である。かくして「何であるべきか」とあるべき自己の内容が読書により与えられる、ここに読書の第一の意義と価値とがある。次に「何をなすべきか」という道徳の問題に対して、科学と哲学の読書から解答が

与えられる、かくして読書は、経国済民、福利厚生の契機となる、これが読書の第二の意義と価値である。要するに読書の意義と価値は、すなわち学問の意義と価値である。

購書と蔵書

山田珠樹

（脛を嚙っている身なら、国許から金を送ってきたとか、父親からお小遣を貰ったとか、少し感心な方なら、先輩の飜訳のお手伝をしたとか、入学試験の勉強を見てやったとか、とにかくなにかの幸運によって財布が膨んだ時、カフエーだとか一杯屋に飛び込まないで、本屋にでかけたとしたら、この学生生活を味うことができる感心な男だと見てよろしい。）

学生であるからには、読書の趣味を解さなければ嘘である。スポーツなんぞは学生の本領を維持し発揮して行く上に必要な刺戟物であって、その本領である勉学の核心は講義と実習と読書である。この読書を仕事としてしないで、趣味として、衷心からの欲求として、離すことができないものとして仕舞わなければ嘘である。読書生活という学生時代の最も大きな特長に涵ることができない学生は憐むべきものである。

読書と購書ということは別なことのようである。この図書館の発達した時代に本を買わなければ読めないという話はない。これは一応の理窟だが、実際図書館に行って見ると、この理窟が完全なものでないことがわかる。限られた本の数、限られた時間、限られた座席というよう

な避けることのできない矛盾がでてきて、我々の読書欲を充分満足させてくれないばかりでなく、満員の食堂で人の食べてるのを横から見てるような不愉快な感を与えられることすら珍らしくない。

かって聴いた美術史の講義に、美術観賞にまず避けなければならないものは所有欲であると講師がいった。これは欲しいなアと思ったらそのものの真の観賞はできなくなるというのである。どうもこれは少し見当違いの訓のようで、観賞に邪魔になるのは所有欲でなく商売気であろう。これを欲しいと思う心でなく、之で儲けてやろうという心であろう。（あながち金ばかりに限らない、これを使って博士論文を書いてやろうというような俗っぽい考も矢張り観賞には毒な商売気である。）美術史のことは措て置いて、少くも読書ということと所有欲とは立派に並存する。それのみか所有欲が起るに及んで、初めて読書の真髄に近づくことができるのである。

読書の趣味というものは、本の内容を自分の心に吸収していくところに大切なところがあるが、その外に物を食べる時と同じように、食べる動作、読書なれば読書の動作から起る快感というものが、案外大切な部分を占めている。読書の心を静かに内省してみると、誰もこの感覚的部分の大きいのに驚く。読書のこの二大目的、そのいずれにしてもこれを充分満足させるには、自分の本を読む時でなければならない。

（読んで感激したら鉛筆で筋をひいてもよい、癪に触ったら拳骨を固めて頁を擲りつけても

よい、ただし本を放りだすことは止めにして貰いたい、糟に触る本を読むことも時に必要があるので、本を投げると二度と読むことができないほど傷む虞がある。感想を書きつけて置いてもよい。余り大部な本なら重要なところに印をつけておいてもよい、こういう風に自分の思いのままのことができないならば、ほんとの読書の趣味は味えない。寝ころんで読みたい時もあるだろう、半分にぐっと折って鷲摑みにして読みたい時もあるだろう、読みながら煙草を喫う癖の人もあり、キャラメルを舐ぶる人もあり、仁丹をなめる人もあり、頭をギリギリ搔いて雲脂を落す癖の人もあり、指先で髪の毛を引張ったり丸めたりする人もある。）こういう人はこの自由を許されないなら、本の内容を完全に自分のものにすることはできないだろう。こんなことは自堕落な近代の弊風かも知れないけれども、さりとて今更昔流に靜座して聖人に対するような気持で本に向えといったところで、到底実行される気遣はない。そうすればどうしても自分の本でなければほんとの読書はできないということになるではないか。

金を抱いて本を買いに行く時の気持は学生時代に享楽しうる最も大きな愉快の一つに違いない。そこでいそいそとでかけて行く先の店だが、若し買いたい本がきまっていないなら、大きな店へ行かなければならない。小さい店では品薄だからつい詰らない物を買ってきて仕舞う。古典などは種々の版があるから、大きな店なら比較して自分の好きな、又最もよい版を手に入れることができる。自分の愛読の本にするのだから、装幀なり、大きさなどに好みをいっていいだろう。印刷とか紙質とかを問題にしだすと限がないから、これは大体で我慢しておくこと

にする。古典なら註釈付のものを買うことを是非すすめる。古典は註釈なぞあっては目障りで鑑賞し憎いという人もあるが、これは誤である。経験によるに註釈なしのものは大底読み通すことができず、途中で放りだす。その註釈も程度に各種あることを忘れてはいけない。所謂受験用のもの、鑑賞用のもの、学研的のものなどいろいろとある。これをよく識別して買うことが必要である。よく本屋で本の選択について、本屋の店員に相談している向を見つける。残念乍らこれは失敗に終ることが多いだろう。本屋の店員は商売人であることを忘れてはいけない。鑑賞に商売気をだしてはいけないという誡を思いだすのはこの時である。

一体本屋に行く時に買う本を予め決めて置かないのはよいことではない。ほんとをいえば信用できる親切な相談役を置いてある本屋ができるか、それが難しいなら図書館に読書相談の設備が完全になっているといいのだが、何分そんなことは夢に過ぎない現状だから、自分で工夫して選択をしなければならない。

本を決めないで本屋に行くと、目移りがして終には何を買っていいか判らなくなってしまう。結局本屋切角の意気込を挫かれて、空しく本屋を出ようとすると、そこに雑誌が並んでいる。結局本屋に雑誌を買いにきたことになって帰ってしまう。この雑誌は読書の獅子身中の虫である。（日本の雑誌ほど学生の貴重な時間を無駄に費やさせるものはあるまい。どれもこれも御座なり記事以外のものはない。雑誌やの態度も執筆者の態度も永年の弊習で所謂雑誌向記事以外のものは載せようともせず書こうとしない。しかもどの雑誌も余りに厚く、雑誌の数は余りに多い。）

本を買う時の誡の一つとして、雑誌を買う数はできるだけ減らせよ、ということを覚えていて損はない。

買う本を予め自分で決めておくことは大事なことだが、これがなかなか容易でない。信頼するに足りる新刊紹介や良書推薦がないからである。外国にはこの二つの事業はかなりよく行われているようである。ただし洋書の場合は学生にはその機関を手に入れ難いし、幸にしてその機関に目を通すことができても、今度はその本が容易くは手に入らない。だから学生についていえば、日本の本の事が主になる。本屋の新刊紹介が公平を欠くのは当然だろう。新聞の新刊紹介は著者の友人に筆をとらせるから、完全な批判にはならない。第一紹介する本の選択が無方針である。図書館協会とか、文部省の良書推薦というものも、推薦対象が広汎すぎるし、関係者の穏便主義が禍いして、学生のよい指針にはなりかねる。よくはないが、しかし外にないから、之等を参考にしなければならない。ただこれは参考に過ぎないもので、これに拠りかかることは避けなければならないことを忘れてはならない。まず、これを参考にして、図書館に行って自分で更に取捨することを奨めたい。本屋の店先で周章てて取捨を決めることは、なるべくしないようにしたいものである。

（自分で決めろとは無理な註文だ。自分の専門外の方面のものなら殆んど不可能に近いという人もあるだろう。実際若し先輩などで親切な人があって、快く相談に乗ってくれれば問題がないのだが、なかなかそんな先輩などはいないものだ。だから自分でするより外に手段はない

のだ。それも同じ不完全な選択なら、人に奨められて誤った買物をするよりも、自分の判断に誤があったために誤まったものを買った方が、後で気持がいいと思って諦めるより外はない。)

前言の如く外国の本なら選択のよい手引はかなりあるのだが、図書館でこの手引になる書目を借りて見る人は殆んどないものだ。これはもっと大胆に利用しなければ嘘である。

本を買う時に全集ものを矢鱈に買いたがる人がある。之は考えものだ。全集のなかに入れられているものは、個々に出版された時の方が版もよく装幀製本もよいのが常である。自分の愛読書には全集物でない方がいいと思う。

古本を買うことは大切なことである。しかし残念乍ら、まだ古本は掛値があるものという習慣がとれていないから、面倒もある。古本は縁日の植木屋見たいなもので、いい値通り買って来るなら、まずお坊ちゃんと思われるのを忍ぶ覚悟がいる。これを適当な値で買いとるということはなかなかテクニックの要る問題らしい。押し、粘り、愛想なぞという種々の戦術があるらしいが、更に古本屋の主人のむら気まで観察利用しなければならなくなっては容易のことではない。最もよい方法は古本屋に友人を作って、この友人に欲しい本のリストでも渡しておいて、古本の市でもあった時に買って来て貰うのだ。そしていくらか手数料を払えば、これが一番気持がいいだろう。しかしこれは一寸難かしい。しかたがなければ、気の弱い人は、新本の定価よりも廉いということだけで満足して引きさがるより外はない。

大きな古本屋は目録を出しているから郵便を利用して買えばよい。可笑しなもので、大きな

新本屋には平気で買物に入れるが、大きな古本屋では一寸買物がし憎いものだ。実際大きな古本屋は大家対手に慣れているために、通りかかりの客なぞは大事にしない。店番をしている男はまず本を盗まれるのを監視している看守見たいなもので、買物に真面目な相談相手なぞにはなってくれない。相手にして呉れないから、つい行きにくくなる。そこで小さな店に行くのだが、小さな店を片端から窺いて行くことは愉快には違いないが疲も甚しい。妙な気疲れは愉快を消してしまう。幸なことに此頃小さな古本屋が聯合で目録を出しているようである。これなどは成るべく利用したい。図書館なぞにはこんな目録が皆集まっている筈である。しかし大抵すぐ閲覧できるようにはなっていない。少し心臓強く閲覧を要求すべきである。

この頃百貨店などで古本の市があるが、これに二種類あることを忘れてはいけない。一つは古本屋が一寸売れない高い本を売るためにするものである。今一つは古本の交換会のようなもので安物が多い。後者を利用すべきである。

本を選ぶには充分心に慾りを持ちたい。すぐ実行に移されるもの、買って帰ったらすぐ読めるものといったようなものばかりを選ぶ実利主義はとりたくない。読んですぐ実を結ばなくとも、見て眼を楽しまし、心の凝をとって呉れるような本を選ぶことはよいことである。すぐ読めずとも机の上に載せて置いて、それを読む暇のできるのを、又読みこなす力のできるのを、楽しく期待できるような本を買う位の余裕はあって欲しい。ドイツ語を習い初めた時にファウストを買って来て置くのは笑うべきことではない。その心は褒めてよい。

買って来た本は読んで読んで読み通して、本は揉みくちゃにしてしまう、これがほんとの本の読み方で、読んだ本を立派に藏って置くなどということは、ほんとに本を読まないもののいうことだ。ほんとに本を読み通さば内容は自分の頭のなかに入ってしまうから、読後の本は捨ててしまってもよい。こんな言葉が、賢い言葉として、昔から尤もらしく毎時も繰り返される。この言葉こそ実際に遠い虚しい言葉であり、狭い量見の謬った考えである。自分のものを愛護したい本能は否定できない。否定すれば謬であるし、余計なことである。（本の内容を頭のなかに納れてしまうというのは、この本の洪水のなかに読むに足りる本は十指をまぐるに足りないという考えを前提としている。くだらない本の多いことは事実である。しかし世界に残っている本の数は莫大なものである。このうちから何人も傑作と認めるものだけをとって来ても、それを読むだけに一生はかかるだろう。更にそのうちから自分の愛読するものだけを選んでも、その人が余程偏屈な片寄った人でない限り、その全部は一寸頭のなかに入れ切れないだろう。更に例を文学にとって見ると、ロシアのトルストイの或る小説、ドストイエフスキーの或る小説、フランスのバルザックの或る小説は文学愛好者の座右から離せないものだろう。これを読んで読んで読み通して、すっかり暗記した人があるとしたら、それは暗記の名人として驚くに価いする。しかし読書模範には少しもならない。）まず常識的に考えて読書ということと藏書ということは離れ難いことである。

（藏書家にも種類がある、書庫が必要な人も藏書家であり、机の上に積んでおく人も藏書家

である。書庫を持っている人は、文部省の図書館講習所の卒業生にでも整理に来て貰うことをお奨めして置いて、ここには自分の部屋に置きうる位の本を持っいてる人を目標として話をする。)

本を整理して行くことにはいろいろ理想もあるが、この場合やはり先立つものは金で、金がなければなにもできない。本の取扱を丁寧にするという金のかからない精神的方法もあるのだが、本を愛読することと、本を丁重に取扱うことは兎角並び難いことになるので、困難が起る。人の本を借りて来て読む時に遠慮から起る色々の束縛、これから遁れて自由に楽に、本を取扱える点に自分の本の味はある。自分の読んだ痕跡が本に残ってこそ、その本に益々愛着を覚えるのではなかろうか。(銀杏の葉が入って居たり――これは虫よけにもなるらしい――クローバーの四葉が入っていたりするのは、自分の読んだ痕跡ばかりでなく、一寸甘い思出の所縁になる。図書館の本の手垢は気持の悪いものだが、自分の本の間から髪の毛が落ちたり、蚊の潰れたのが出たりしても、厭な気持はしないで、却って懐しいものである。汚れるのはまず仕方がないとしよう。ただ鼻から出る塊と口から出る液体とには充分要愼をして貰いたい。本を開けて煙草の香のするのは悪いものではない。ただ新しい本を買って来て頁の間から印刷インクの香を嗅ぐ楽しみにはかなわない。煙草が残念乍らバットであったり、チェリイであつたりするからだ。)

本を愛読玩読味読したが故に本の汚れるのは我慢するとしても、このために本が痛むのには

困る。綴がバラバラになって、一冊の本が幾つかの紙の集団に分れたりした時は、実に惨めである。それほどにならなくても、表紙と内容とが分離したりすることがよくあるが、これは困る。表紙なんか余計なもので内容さえあればよいという理窟は立つが、二十冊三十冊の表紙のない本が集まっては、全く仕末に困る。そこで買って来た本に適当な、補強術が必要になって来る。

最も簡単な方法は本屋で包んで呉れた紙で本の表紙を包むことだ。これは本の表紙の汚れを防ぐ一方法であるが、補強には大して役に立たないし、表紙を楽しまずに、広告紙で目を汚すのは愚な為業である。

矢張り製本の必要が起る。ところが製本というものは妙に高く感じるものである。まず新本の定価位は製本費にかかるものとなっている。これでは一寸手が出せない。ところがこれは製本屋に製本させるからである。製本は自分でできないか？　できる。少し器用な人なら簡単にできる。印刷所から廻って来る紙を製本するなら大仕事であるが、一旦製本してあるものを改装したり、補強することは割に簡単だと思う。この頃小学校では手工の時間がかなりあるし、中学校ですら作業という時間がある。かなり手の込んだものを作らせて居るが、筆立とか本立を作ったり、塵取を作ったりすることもいいが、同時に製本の手ほどき位教えたらよさそうなものだと思う。小学校及中学校は大抵図書館を持っているのだから、これを修理させればよいのだ。こんなことは実行されていないだろうから、仕方がない。今は時々催される簡易製本の

講習会に出るか、それとも近所の製本屋さんにでも教えて貰うのだ。面倒がらずにこの位のことはしてもよかろう。下着を洗濯に出すように、この仕事を簡単にやって呉れる女手があれば一番便利だと思う。お母さん姉さんさては愛人などが、この仕事を引受けるようになる日が来るまでは、自分で洗濯をするつもりで、製本をやらなければならない。

この簡単な製本の仕事は背と表紙とを丈夫にすることである。背には布を使うことをすすめる。背に使うように加工した製本用の布を図書館用具を売っている店で売っている。これを利用すべきだ。表紙にはボール紙を使うべし。このボール紙は買ってくる必要はない。菓子箱なりシャツの箱なり、古箱を利用すればよろしい。このボール紙の上に本の表紙を切ってきて貼りつければよろしい。その前に適当な色の紙を表の端と裏に貼っておく方がよい。凡て貼る時に使う糊にはバラ脳の粉を入れることを忘れないで。これは虫よけになる。

虫は洋綴の本には余りつかない。日本紙が好きだから、和綴の本は気をつけないといけない。(紙魚という虫は銀色をした一寸綺麗な虫だ。綺麗だと思ってだまされてはいけない。)見つけ次第容赦なく殺して仕舞わなければならない、しかし成虫を殺すだけでは、卵が残る。卵の退治はなかなか難かしい。ホルマリン或は硫黄消毒というのを病人のいた部屋などでするが、あれは黴菌は殺せても、この虫の卵は殺せない。熱気消毒というのをしなくては駄目である。これは本を蒸すのだ。直接蒸しては本が傷むから、パラフィン紙にでも包んで蒸すがよい。ただし洋綴には禁物である。これができない場合は、丹念に卵を拾いだして置くより外はない。

この虫退治は古本屋から手に入れたものには必らず実行しなければならない。一度自分の蔵書にこの虫の侵入を許したら、後で退治をすることは困難だ。買った時にすぐ実行すべきだ。同時に和本なら虫食の補修は買った時にすぐすべきである。薄手の紙を買っておいて、虫食を一々裏打をする労位はとって欲しい。同時に綵のからげが緩んだものも締め直して置きたい。さてこの本を藏って置くのにどうしたらよいか。机の上から床の間、さては疊の上と本を積みかさねておくのも決して悪い方法ではない。（或る伊太利の藏書家は本の上に寝て、寒い時は本をかけて寢たといわれているが、これなども決して悪くない。）だが埃だらけになることを覚悟しなければならない。この頃の本の包箱は不愉快なものだが、埃防ぎにはよいだろう。（ただし郊外の家なんかだと、夏にこの箱と本の間に大豆位の土の塊を発見することがあるだろう。これを毀すと蜘蛛がでてくる。之は蜂の悪戯で詳くはファーブルの昆虫記を見るとよい。）ことに日本建の家の階下などだと疊の上にじかに置くと濕気を呼ぶ懼が充分にある。殊に壁の側は要愼しないといけない。

どうせ疊の上に氾濫するのは戸棚がまず一杯になつていることを前提とするが、この戸棚については濕気と根太について充分な注意が必要である。本の重さは案外なものである。この位と思っている時に根太を折ってしまうことはよくある。損害は家や下宿の親父だけではない。根太の抜けた戸棚は濕気が早くくる。

本箱も悪くない。硝子戸のある本箱なら申し分がない。ビール箱を利用している人もよくあ

るが、一寸の手間だから、箱の板を削るか、紙でも貼っておいて貰いたい。（エビスの箱に源氏物語が入っていては面白くない。エビスというのは露西亜語では恐ろしく下品な言葉だ。）戸棚や本箱にはホドジンかバラ脳を入れておくと、虫避けと濕気避けになる。樟脳は濕気を呼び易く、ナフタリンは効果が薄い。

自分の藏書に藏書印を捺すこともよくやることだが、これも、いつまでも残ることを忘れずに、してほしい。簡単なものは最後の頁に認印を捺すがよい。前の方に捺してはいけない。「借りた人はすぐ返して下さい」という判を捺す人もある。その心情は察するに難くないが、なんだかさもしい。「死んだら売ってもよい」という判を捺した人もある。一寸面白い。とにかく藏書印及び藏書票には古今いろいろの例があるから、よく研究してから捺すべきである。

学生と図書館

吹田順助

一

この表題は委しく書けば、大学生と大学附属図書館で、従って以下の考察も主としてその両つのものの関係に向けられる訳である。ところで、私は専門のライブラリアンではないからして、この問題に関しても、余り精細な、立ち入った観察を施すことはできない。ただ学校と図書館とにある参与と関心とを持つものの一人として、それについての二三の所感を申し述べてみるに過ぎないのである。

学生の教育を受くる場所は、まず第一に教室講堂とされているが、その外にも図書館・研究室・演習室・実験室等があり、学校の外にもまた彼等の教養に資すべき施設がないことはない。しかしその中でも図書館が学生の自修・研究にとって最も重要な場所であることは、敢えてここに事々しくいうまでのこともなかろう。特に法文系の学生にとっては、図書館は、場合によっては、即ちその利用方法の如何によっては、教室よりもより多くの重要性を持っているとも

いえる。元より図書館は学生の必ず行かねばならぬ場所ではない——講堂とても或る学生にとっては、必ず出入しなければならない場所ではないように、例えば自分の家に大きな書庫でも持っている学生は、必ずしも図書館に行く必要がないかも知れない。更に図書館ではどうも落着いて勉強できない、というような学生もないことはあるまい。しかしそういうのは全体からみると極めて少数の場合であって、図書館は一般の学生にとっては、むろん必要にして不可欠な施設でなければならない。

そういう訳で学生が図書館をいかに利用しているかを観察することは、当該学校の学生の気風と傾向とを知る上に大いなる参考になることであり、更にそこに何らかの改良と指導とを施すべき必要があるならば、それについて何等かの考慮を払うべきは、けだし当然の帰結となるであろう。

二

以下の考察の土台をなしているものは、主として東京大学と一橋大学との図書館に於ける諸般の事象であるが、ただそれは土台となり、参考となったというだけで、私の論述はなるべく一般的な意味でこの問題を取扱う心算である。それに閲覧統計のような数字的報告は、単にそのままでは一般的妥当性を持ちえないと考えるので必要のない限り、それは持ちださないことにする。

この問題を考究するに際して、独り学生側にのみ即し、例えば学生の閲覧統計や貸出書統計やだけを調べてみるだけでは、それは片手落ちな見方といわねばなるまい。なぜなら学生と教授と図書館の施設とは互に依存関係に立っているからして、それらのものはどうしても関聯的に考えられねばならないからである。例えば学生がいかに熱心に図書館を利用しようと思っても、図書館そのものの設備一般が不充分であるならば、彼等が図書館を振り向かなくなるのは、当然である。更に大学図書館に関して往々にして耳にする学生の不平の一つは、必要な参考書を閲覧しようと思っても、それはいつも、時には永久に教授に貸出しとなっているので、何の役にも立たないということである。それは図書館に関しての、教授と学生との依存関係の一例である。

ところで図書館の設備であるが、それは各大学によってそれぞれ違っている。それはその大学が綜合大学であるか、単科大学であるかによって、更に各大学の歴史・学風・財政状態等々によって、色々の特色があり、また色々の欠陥もある。例えば東京大学は中央図書館の外に、各科の各研究室がそれぞれの書庫を持っており、中央には比較的に一般的な参考書が集められているだけで、専門書は各研究室の方に分散せしめられている。中央図書館の中には前述の截別から生ずる欠陥を補うかのように、指定書閲覧室があり、各学科の教授の指定せる図書を、自由に閲覧することができるようになっている。京都大学の図書館は文学部のそれを訪れただけであるが、恐らく各学部が独立の書庫と閲覧室とを持っているのであろう。一橋大学の図書

館は単科大学のせいでもあるが、中央中心主義であり、中央の図書は大体において各研究室に分散せしめられていない。東京大学では前述の如く専門書は各研究室の書庫に納められているので、そういう方面のものを読みたい学生は、大抵その方に集注するので、中央の方は主として、法・経済・政治・文・各学部の学生によって利用されているようである。

新聞雑誌自由閲覧室は東京大学では相当に完備した設備を以て、一橋大学では暫定的な設備を以て開かれている。（序でにいうならば、こういう設備は私たちの学生時代にはなかった。或る雑誌を読みたいと思っても、図書館にはあまり備えつけてないので、結局買って読まねばならなかった。とにかくそういう設備のできるようになったのは、いつ頃からか知らないが、学生にとっては大いなる便利といわねばならない。）

以上、二三大学図書館の設備の大体を述べたが、その内の何れが学生にとって最も好都合であるかは、俄には断じ難い。東京・京都大学の各学部独立の図書室は綜合大学としては可なり適切なやり方のように考えられるが、それにも或る欠陥はあるべく、兎に角何れの方法もそれぞれ得失あるものと看做すべきである。更にそれらの事柄は当該大学の性質・歴史等々によって規定されている訳ゆえ、その長短は俄かに軒軽し難く、それらの設備にもし欠陥ある時は、各大学がそれぞれの範囲において改良を施して行くことを考えるより外はなかろう。

私達の学生時代には、東大図書館では、卒業前一年の間は、自由に書庫に出入できることになっていた。少し薄暗い、広い書庫の中をあちこちと歩き廻り乍ら、高い書架に積まれた大き

な古書のあつまりなどを仰いでいると、その辺に、故ケーベル博士や自分達の先生のフローレンツ博士なども本を探しているのに出っくわしたりしたものだ。そうすると自分も何だかひと角の学者にでもなったような気がして、あの自由入庫は学生時代のなつかしい記憶の一つである。今でもそういう規定があれば、学生の好学心を刺戟する上に、かなり役立つように思う。しかし学生の数が非常に多くなり、更にそれに伴って図書紛失というような、あまり芳しくないことが依然として跡を絶たない以上、そういう規定を再び設けることも、当分六カしいとみなければなるまい。米国の図書館では多くは自由閲覧制を取っているが、図書が殆んど紛失しないということを聞いた。これなどは実に羨ましい話で、日本の学生の一部に対して上述のような非難のあることは、学生一般、学校全体の恥辱であるからして、公徳向上の精神が今後はより強く学生自身の問題として考えられねばならないのであろう。

尚一言大学図書館の設備について希望したいことは、高級な相談役をせめて一人位おいて、図書利用、参考書についての学生の質問に応ぜしめては、どうかということである。その人はつまり謂わゆる相談係（Consultation Division）を一身で兼ねているような役割を持っている訳である。尤も大学図書館においては、特に指導教授のあるような場合には、そういう係はあまり必要でないかもしれない。しかし図書館は図書館として、書誌学者であると共にライブラリアンであり、諸学一般の知識に通じ、官僚的に形式ばらない親切な人を置いてその人をして各学部の教授と聯絡せしめ、図書館利用についての、学生の指導をなさしめたなら、学生と

しては図書館というものに、一種の親しみをもつようにもなろうし、図書利用の上にも大いなる便益を与えられるに違いない。しかしそういう資格を兼備した、ある意味においては教授よりもえらい人物を求めることは、元より非常に困難であるには違いないが、このことは不急の問題として、もう少し考慮されても宜しいように、私などは平常から考えているのである。

三

次に図書館に関して、大学教授に対して要求を少しく提出するとすれば、教授としては図書館をば自分達の討究（Forschung）のために存するものと考えると共に、一般学生のことを常に念頭に置かねばならぬということである。大学の教授たる者は講義に際して、重要なる参考書を教示するに留まらず、それに関する各学生の質問に対しても常に親切であらねばならないであろう。そういうことは寧ろ常識的に当然なことと考えるが、時にはその例外が存するので、殊更こんなこともいって置きたいのである。というのは、こと少しくコミカルな部類に属するが、次のような場合がかつてあったということを耳にしているからである。というのは、或る大学の或る教授が或る事項について講義をしたが、その講義は或る国の或る教授の学説だか論文だかをそのままに講述したのだそうである。それでその教授はその事項についての殆どあらゆる主要参考書を学生に書き示したが、自分の利用した論文及びその著書については一言も述べなかった、而もその論文たるやその事項についての最も重要なる参考文献であった、という

ことである。これは、尤も日本の大学において起ったことか、中国あたりの大学において起ったことかは、筆者はつい聴き洩らした。

なお教授・学生・図書館の関係についていって置きたいことは、教授は——図書選定委員のある場合には、それらの委員——は図書の選定購入に際して、自分達の討究のためを考えると共に、学生一般のことも常に念頭に置くべし、ということである。というのは、以下のことは一例に過ぎないが、教授は自分達に是非必要な参考書は自分達で買い求めるが、——尤も場合によると、それさえもしない人もいるということである——それほどではないが、なくては困るというような種類のものをよく図書館のために選定する傾向があるからである。尤もこんなことは一般的にある筈のものではないと考えるが、兎に角教授たるものは、図書選定委員に限らず全体として、図書館と学生との関係交渉に対して、不断の注意と考慮とを怠らないように努むべきは、いうまでもないことであろう。

四

これから学生の図書館利用の状況を調べるわけであるが、その前にいって置きたいことは、或る大学図書館の調査によると、学生総数の約五分が閲覧票を所持していないということである。いろいろの大学を調べたら、そこに各種の事情——例えば研究室の図書のみを利用して、中央の方には一向足を向けない学生がいることなど——もあろうが、とにかくそういう学生が

学生総数の或る割合をなしているのが常態とすると、これだけの学生は、在学中一度も図書館の図書を利用しないのであると、推論しても差支えなかろう。講義にすら一度も顔をだささず、試験はプリントと一、二の参考書ですまして置くというような傾向も相当に強い大学もあり、特に私立大学の野球選手などの多くは講義には殆ど顔をださないのが多いとか聞いているから、そういう学生が図書館などに足を向けないのは、むしろ当然の事柄といえよう（たまには講義には一向出ないが、図書館にはよく出入するというような学生もいるかも知れないが、そういうのは蓋し暁天の星の如く稀れなものであろう。）

なぜに学生が講義を聴講しないか、なぜに彼等が図書館に殆ど足を踏みいれないか、ということはこれはまた特別な詮議だてを必要とし、場合によって大学の講義そのものの性能の問題等に帰着するというようなことになるかもしれない。それは兎に角、総数の約五分なり、何分なりが閲覧票を持っていない、請求もしないということは、大体において、彼等が少しも本を読まない、本を読む意志すら持っていないと結論してもまず差支えないことと思う。そしてたとえ少数にせよ、そういう学生のいることは、決して正常の状態とは考えられないのである。

この事に関して私の日頃から感じていることを附加えても宜しいなら、一つにはかの選手制度のためもあろう。運動・競技と修学との間の調和が学生の間においてよく取れていないということである。というのは、一般の大学（特に私立大学）を通じて、学生は大体において運動家型と非運動家型との両型に区別されることができるように思う。そして運動家型は例外もあ

るが大抵運動にばかり熱中し、非運動家型というものの中には、勉強家と勉強もせず運動もしないという学生との二種類が含まれていると考えるのであるが、こういう両型の存することは、教育上大いに考慮されねばならないと思う。少くとも第一の型、その極端なのは講義も図書館も少しも顧みない型がもしありとすれば、大学としては結局どうすることもできないにしろ、そういう学生自身として大いに反省しなければならないのではなかろうか。

五

東大図書館をまず例にとって考えると、中央図書館は前述の如く法・経・文の学生によって主として利用されている状態ゆえ、そこにおける閲覧状況のみを調べ、それによって学生の修学の傾向を推論することは、或は失当の処置となるかもしれない。というのは、各研究室の方面の状況などがそこでは勘定の外に置かれるからである。しかし中央図書館における状況は少くとも法・経・政・文の学生の傾向を知るにはまず十分であろうし、そしてそれからして他学部学生の傾向も大凡類推しても差支えないことと考えるのである。

それでその調査の結果と一橋大学の方の調査の結果とを比較し、大体その両者に共通な現象を、統計表に挙げることなしに、箇条がきにしてみると、(一)試験期(学校の試験と国家試験との二つをふくめて)に近づくと、閲覧室は満員もしくは超満員になること、(二)洋書の閲覧は和書の閲覧に比して、(学術の種類によって幾分の差がそこにあるとしても)非常に少

数なること、（三）閲覧される図書は大柢、講義もしくは受験にとって必要なる参考書であること、――まず以上の三箇条に綜括されることができるようである。そして或る特別な研究をやるとか、或る調査を相当の日数を通じてやっているというような学生が非常に少数であるということも、消極的な場合として附言される訳である。私は或るライブラリアンにそういう特種の学生がいるか、そして学生の図書利用の傾向は、これを一言にして尽すと、どういうことになるかと尋ねたら、「そういう学生は殆どいませんね。これを要するに巧利的の一言にして尽せるでしょう」という答えであった。

巧利的な傾向、あくせくとして余裕のない傾向、根抵的にものを研究する精神の欠乏――こういうことは独り図書館のみに関してのみならず現代の学生（だけではないが）に共通の現象とみることができるであろう。こういう傾向は一国文化の全体から考えても悦ぶべき事柄ではなく、寧ろ憂慮すべきことと考えられるが、これはよってくるところ遠く、独り学生のみの責に帰せられないのは、言うまでもない。修学年齢に達するや否や、入学試験、更に入学試験の難関で攻めつけられ、未来には就職の問題――就職難は特に事変以来、大体なくなったようであるが――が控えているし、常に多数者との競争をなすべく、殆ど無意識的に強いられたる青年が、どうして巧利的にならずにいられよう。しかしそういう傾向はこの儘に放置してはどういう結果をきたすであろうか。兎に角それは将来において何等かの方法によって、例えば教育当局者、教育家からの発言によって、或は学生中の少数者の覚醒によって、匡正されねばなら

ないことと考えるのである。

尤も研究室の方面を調査したら、或は特種の問題を調査し、研究している、というような学生がいないこともなかろう。特に文学部の学生は法学部の学生に比すれば、より多くの余暇もあろうし、特に自分の選んだ問題を中心として、研究をすすめているものもあろう。更に一橋大学において行われているような演習指導、即ちゼミナール制度――各大学の或る学部にもそれはあるようであるが――によって、学生の研究精神はかなりの程度において促進されるであろう。ゼミナール制度は指導教授の指導如何によって、かつ参加学生の熱心の程度によって、その効果はいろいろになるであろうが、とにかくそれが善く運用される場合には、教授と学生との個人的な接触の上からも、学生の研究精神を刺戟する上にも、重要視されて宜しい制度といえるであろう。

六

図書館利用に関して学生の傾向をいかに指導すべきかということは、教育そのものの問題と同じように困難な事柄であり、更にここに或る意見を提出したところで、それの実現がむしろ不可能な場合には、結局机上の空論として終るに過ぎなかろう。しかし私は次に図書館当事者と共に、かつ学生諸君と共に一緒に考えたい問題として、二三の意見を書きつけてみよう。

まず学生としては書物を愛し、従って図書館に親み、余暇あるときは、或は一定の日時にお

いて、図書館を訪れ、そこで落着いて読書する習慣をつけることが、肝要であろう。それには図書館当事者としても、常に学生の要求に注意を払い、実行しうべき施設はなるべくそれを実行し、かつ館員をして学生に対して親切なる態度を以て接するの風を養わしめねばならないであろう。学生としては自律的に、次には習慣的に図書館に親しむようにならねばならない。先日の「帝大新聞」に掲載された牧野英一博士の「回顧四十年」を読むと、その中に学生時代には図書館を訪れぬ日とては一日もなかったという条があったが、たとえ毎日でなくとも、なるべくそういう習慣をつけることは、自然と学問に親しむ気分を養うことになるであろう。尤も講義をさぼって慢然と図書館に逃塞したり、ノートの穴埋めなどに汲々たるは、場ふさげになるのみならず、あまり賞められた傾向とはいえない。

次に試験問題も結構であり、寧ろ止むをえまいが、平常からもう少し研究的精神を以て基本的な書籍を翻読し、参照する風習をつけるべきであろう。多くの学生はそんな余裕がないというかしれないが、それが果して実状かどうかは、少くとも疑問である。そしてそういう遣方の方が試験前の急拵えや詰込み主義よりも、学問それ自身に対してはむろんのこと試験に対してすらより有効であると考えるのであるが、この提議は多くの学生によって果して認容されるであろうか、或は机上の空論として一笑に附せられるであろうか、私としてはむろんいずれとも断言できない。

終りに附加えたいことは、これは寧ろ読書一般の問題に関係することであるが、原書を読破

する風習がもう少し強化されても宜いのではないか、ということである。これは外国語不必要論等が飛出す時代にあっては、その事にも依存する事柄であるが、それは今暫く不問に附し、よい飜訳さえあれば、何も六カしい原書を苦しんで読む必要がないとはいうものの、とにかく原書がその伝えんとする意味を最もよく伝えていることは、まず議論を要しないところである。六カしい原書を辞書を引ッぱりながら読むことは、無駄といえば無駄であるが、それがその原書を理解する最善の方法たることは争われざる事実であろう。むかし一高の寄宿舎にいたとき一人の級友（それは柳原卯三郎君といって、法学士になってから不幸にも夭折したが）は放課後は必ず図書館に行って、レクラム版のカントの「批判」を読んでいたので、私は当時ひそかにその級友に対して或る敬意を感じていた。それがどうだという訳ではないが、私は今の学生にもそういう古典・名著――要するに思想の根柢を築きあげるような本を、西洋のものならなるべく原書にて、ゆっくり読むことを希望したい。そういう遣方こそ直接の効果は別として、将来の大をなすべき、最も力強き養分となるであろうからである。茲に同じような才能を持った幾人かの人間があると仮定して、それが同じ軌道を進むとき、彼等のいずれが終局の勝利を占めうるであろうかは、誰がより根柢的な鍛錬を経たかによって決定されるであろうからである。

読書の生理

杉田直樹

秋も今ようやく深くなろうとして読書の好季節といわれるが、読書に好季節と不好季節とあるのは一体何に因るのか。万人共に読書の実際的効果を挙げ得るような特殊の季節的気候的条件というものが果して存するものならば、その条件をよく取り調べて、読書不好季節の読書環境をその条件にかなうように調整するようにしたら、年中平等な読書能率を挙げ得ることができるようになるだろう。一概に読書という中にも娯楽に雑誌を読み、事務や実用のために年鑑や辞典の頁をくるという如きことならば、季節も晝夜も関う必要もあるまいけれど、修養や学問のため、読んだ事柄をよく理解し記憶しかつ必要に応じて之を迅速に憶起して直ちに流用応用のできるように、一度読んで体得した観念を脳裡に整理しておくのには、単に漫然と読過するというだけではその目的には適わない。終日書物に眼を曝していても、その読んだものを少しも消化し体得して己れのものとすることができなかったとしたならば、それは所謂死学問となってしまう。そこで有効に能率的に本当に読書の目的に適する効果を挙げるがためには、まず読書の生理をよく心得て、なるべく之にかなうような読書方法をとることを努めなければな

らない。

上記のような有効な読書をするのには、読書時の心理的条件として第一に頭脳の明快即ち意識の清明と注意の集注とを必要とし、知識上の条件としては予めその内容に対する興味を有し且それを理解するに緊要なだけの素養を持っていなければならぬことが第二に必要であるし、又第三には疲労による倦怠と理解不能に基く興味喪失とによく打ち克つために相当の努力を払う覚悟がなければならないことという迄もない。而して之等の心理的の条件を充すためには、その前提としての種々な生理的条件を整えて行かねばならない。

そこでまず頭脳明快の生理的条件から始めて逐条的に述べて行くことにするが、意識を常に清明に保つためには、何よりも脳髄内の血行状態を適度に保持せねばならぬ。通常の場合に脳髄の内部にはかなり多量の血液量が循環していて大略全身血量の五分の一以上の血量が頭部にあると謂われているのであるが、此の脳髄内に存する毛細血管は種々な感動、熱中、注意集注、思索考慮等の心理作用によっても或は暑熱寒冷その他の身体的影響によっても、瞬間的に直ちにその全部又は一部が開拡又は収縮して脳内の血行量に重大な変化を惹起せしめるものなのである。従って些細な刺戟的原因からのぼせるとか脳貧血を来すとかして、忽ちに頭脳の明快性を失って了う如きことが稀でない。例えば脳の異常充血状態を起すのは気候の暑熱、室内暖房の過熱、精神的感動、特に愉快溢るるが如き情緒、伝染病等による発熱の時、心動強盛の時、飲酒酩酊の時などがそれであり、こうした脳充血状態を常習的に有している人（神経質、神経

衰弱症者等）は散歩運動をして器械的に脳の充血を散らし、又は適度の温浴（冷水浴ではいけない）をして脳の血行を身体外周部へ牽制して、脳の充血を一時的に散らして了うと一時は気持がよくなる。神経質の学生などが書物を片手に散策し乍ら気任せに読書すると、読んだものがよく頭へ入るなどというのはこの理によるのである。之に反して寒冷の候や睡魔に襲われて、我しらず居眠りのでる時や、又心身の疲労の劇しい時などはつまり生理的に脳髄の貧血を来している時なのであって、こういう折に意識を明快にしようとするには、酒、煙草、茶、珈琲等の脳血管開張の効ある嗜好物をとるか、又はカフェイン剤の如き薬剤をとることが必要である。

しかし正常の健康人に於ては一日中の時刻の推移によって生理的に脳髄の血行量に動揺のあることは誰しも気付くことである。しかしこれは一面に習慣的な睡眠の時刻にも関係し、又日出日没時刻にも関係し、又各人の日常習慣にもよるのである。自律神経系は日光の影響によってその緊張度を増し、日没と共に漸次弛緩して生理的睡眠に導くものであるから、多くの人は朝眼がさめて、丁度太陽の東天に輝きだす頃が一日中で一番意識が清明で気分のすがすがしい時刻に当り、読書その他の精神作業の効果の最もよく挙がる時なのである。しかし文芸学問の士の如く平生神経質でしかも睡眠を愉快且深熟にとることができないで、いつも軽度脳充血の状態にある如き人では、却って夜間に入ってから或は深夜になってから頭脳が明快になってくるように感ずることがある。こういう傾向は又日常生活の習慣からでも、勝手に自分だけに適

応した習慣的の読書時刻を努めて作りだすこともできる。現に私の如きも公務や俗用の都合から早朝又は深夜ででもなければゆっくり読書又は執筆の暇を得難いので、おのずと長年の習慣で、就眠前の深夜に読書して立派に効果を挙げることができるように習慣を作った。文士などの中には深夜でなくては頭脳が冴えてこないので晝間は読書も執筆もできないという習慣の人が少なくない。私もまたその一人なのであるが、電燈の下でなくてはどうしても読書に身がいらないという人が世間に少なくない。これも習慣によるものであろう。

読書と体位との関係も閑却することはできない。脳充血性の人は横臥すると余計に脳髄へ血液が流れるようになるせいか、読書思索に到底堪えられなくなる。そういう人はよく事務室などで立ったまま高い卓子へ倚りかかって書を読むとか、少くも姿勢よく机に向って読書三昧に入るものである。しかるに脳貧血性の人では横臥したり、腹這って肘をついて畳の上で読書するのが多い。これをライプニッツの読書臥位と名づける。西洋では珍しいのだろうが、我国には坐臥は日常生活上決して少いことではない。又欧米人には神経質者が多いためか汽車電車内などで快よさそうに新聞雑誌などを読み耽っている人が殆どすべてであるように見受けられるが我が国の人々のような健康者では平生脳充血がないため、たまに汽車中で雑誌でも読もうとして持ち込むと、始め数分間はよいが、その間に振動で脳貧血が起り、心持よく睡気がきて、雑誌を顔にかぶって眠って了う人の方が寧ろ多い。私には安楽椅子に倚って両足を前の別の椅子の上にもたせて読書するのが一番よろしい。しかしそのためには手に持つ書物は軽い紙質の

ものか小形のものでないと手が疲れる。独逸語の参考書や百科辞典の如き重いものはどうしても机上でなくては扱いにくい。身体が疲労すれば当然精神が疲労した時と同じく注意の集注並に精神緊張の持続ができなくなり、読書をしても上辷りして少しも実がいらない。一般に晝間労働して疲れた者が夜学へ通って苦学をしても案外能率の挙がらないものが多いといわれるのは、この疲労の故であろうし、充実した労働勤務生活をしている人に夜間の修養や読書をしいることの却って健康上面白くないのも、この無理な過労によって余計に神経機能を害するのに因るのであろう。しかし古来秋季は燈火親しむべしとして夜間の読書に特別の慰楽を感ぜられるようにいわれるのは、夜の明けるが遅く日の暮れるのが早く、従って晝間の労作の疲れが少くて、しかも夜食を終えてから就寝までに、俗にいう夜が長くなったように感ぜられるから、宵のうちに晝間の筋肉疲労の一旦恢復された時刻を選んで読書をなすのに、四辺も物静かで特に慰楽を強く覚えるのであろうと察せられる。私共のように晝も夜もなく、年中書を読む職務にあるものにとっては、秋の夜も春の朝も特別に読書に対する好適な条件とはならない。

読書のために疲労を起すと、つまりは注意の散乱を来して読書の能率も効果も挙がらなくなって了う。この疲労は何時間後に起ってくるかは、読書の際の注意の緊張度によるので、気が張っていればどうしても早く疲れる（難解、思索的、努力）こと当然であるが、読書内容が軽易で且興味が強く存すれば、疲れが少い（面白い文芸作品、軽い解説書等）。一方に活字の大きさ、光線の適否、体位の自由不自由等からくる視官並びに全身の疲労等も読書を倦怠せしめ

る要因となる。之等の条件は常識的なことではあるが、後文に再び述べる。よく読書思索に対し頭寒足熱を尙ぶのは、つまり神経質の人がとかくのぼせ勝ちで、平生脳内充血のための注意散乱を起す所から、足袋、足炬燵等で下方の部を暖め血行を身体外周部へ誘導し、頭部の充血を去るようにして注意集注を得させようという意味なのであるが、一般貧血性の人はむしろ頭脳へ充分の血液を送るために足部を冷やしてのぼせを起させる必要のあることがある。例えばシルレルは述作の時に往々両足を机の下で氷水に浸していたといい、又ルーソーは炎天下に無帽で庭を散歩し乍ら文案を練ったといわれる。いずれも頭熱を求めた方法なのであろう。

緊張しない長時間に亙る読書などのために疲労して弛緩性の注意集注困難を来し、眠たくなった時に、その即時恢復法は喫煙、葡萄酒、茶、珈琲、ココア、甲状線剤、トニクム、ビクラ、レナー等をのむことである。即ち之等によって薬理的に脳血管の開拡を図るのである。しかしあまり注意を緊張した読書によって却って脳に過度充血を来し、特殊の興奮性の注意散乱のために眠れなくなつたという如き場合の療法としては、前記と反対に脳の充血を去る方法、即ち短時間の濕浴、戸外散歩、室内の体操運動、軽い間食等をとるのがよろしい。読書に幾分疲れはしたが業務その他の必要上読書を中止することはできず尙暫らくは持続しなければならない必要のある如き時には、一旦書をさしおいてラジオ体操式の軽い体操をなし（私は単に両手を強く数回振るだけで足りる）、又は一時音読又は吟声等をなし、又は単に体位姿勢を変えるという如き方法のみによっても、脳の血行を調整することができ、再び元気を恢復して仕事がつ

洗眼又は簡単な売薬の点眼薬などでも治ろうし、又硫酸ストリキニーネ丸（一丸〇・〇〇一瓦以下）等の内服によって眼精疲労の療法を図るのも一法である。或人は壁に丁度海の地平の遠望図のように藍色の水平の平行線を多数に描いた三尺平方位の図面を貼っておいて、読書に眼が疲れるとそれを数分間じっと眺めていると治るという。又或人は読書に疲れると白紙へ毛筆で長さ一寸位の横直線を引き、その下へ一分か二分位の間隔で同様の平行線をいくらでも書き重ねて行き、紙がつかえたら又右か左の隣り行へ同様にかきつづけて行く、四五分もこういうことをしていると読書による眼の疲労は治ると体験の話をしている。

読書の際の手許の光線は強過ぎてもいけず、弱すぎてもいけないことという迄もない。直接日光が強過ぎると早く眼を疲らせることは誰しも承知のことだが、又文字通り螢の光、窓の雪の明りでは、実際昔の一寸平方大の漢字の本ならばいざしらず、今日の一般の活字本が読み得よう筈はない。夜間書卓によって続書する人の電気スタンドの光度は私は二十燭乃至三十燭（三十ワット程度）の電球が適当だと思う。時には卓上に六十ワット、百ワットという如き強い光を用いている人があるが、これでは直射日光より甚しく眼の網膜を刺戟するわけである。又電燈ならば手許許りを照らして、直接に光で眼網膜を刺戟しないように、眼庇を使うか又はスタンドの笠を深くし且その笠には青色暗色又は全く光を透さない質のものを用いる。又スタンドや吊し電燈の位置は書きものの時は右手利きの人々は左方上部からとるのが、手くらがりにな

らないで便利であるが、高い天井からとる燈火ならば、どうせ視界へ光源が直接に入らないのだから、どの方向からとつても同じことである。ただ光沢紙へ印刷したもの（写真グラフ類、図版の多い独逸学術書）は、恐らく写真銅板の印刷面の精巧を期するために光った滑らかな紙を用うるのであろうが、これは夜間電燈下にみると電燈の光が紙面に反射して余計に網膜を刺戟する失があるから、この場合には光線を予め散らす方がよい。つまりすり硝子の電球か又は一旦すり硝子又は紙の笠を透してきた鈍い光でみると眼が楽であって疲れが少ない。

活字の大きさは大いに考えなければならない。鷗外先生はそれを読まれる母上の視力を損ねぬよう、その著述はすべて四号活字で印刷されたが、流石その没後の全集は遥かに小さい字のベタ組みで出版された。現代の書籍の活字が九ポイント、八ポイントという如き小さいものになってきたのは、一つには電光が明るくなったことと、一つには紙の節約、つまりは書物代を安くせんがためとによるのであろう。しかし欧文の九ポイントも漢字の九ポイントも同じく活字の大きさの寸法はその径が一吋の八分の一であっても、漢字の方は字劃が遥かに多いから、一劃一劃の間隔が視軸で結ぶ角度は、漢字の方が遥かに細かいことという迄もない。殊に六号ゴシック活字をザラ紙の上に印刷された安雑誌のゴシップ欄の如きは、私共にも字劃の判別のつかないことさえ稀でない。これは文選工をなやます許りでなく読書子の眼にも重大な負担である。それも用紙が上白の肌理の細かいものならばまだしもであるが、新聞紙安雑誌のザラ紙の上に暴色の薄いインキで印刷された六七号程度の蠅目活字、且それを車上で読み夕方の薄暗が

りで読むというのでは、実用の範囲を超えた不衛生的のものといわねばならない。大きな百科辞書などは卓上の明るい電燈の下で静止してみるのだからまだ宜しい。ゆられるバスの中で小形の文庫本に読み耽ける青少年が、近視にならないのは、寧ろ不思議のことである。我国中学生の七割近くが近視眼者であり、我国が世界一の近視国であるというのは、必ずしも漢字そのものの罪ではない。九ポイント以下の小活字による漢字の罪なのである。徳川時代の漢学の本には一寸大の活字が使われているが、これでは近視になることもあるまい。少くも一般の書籍が明治時代のように四号か五号で、しかも四分一アキにカラリと組まれていたならば、いくら漢字を使っても眼は疲れまい。現に今でもパンフレット類は、紙はザラ紙乍ら、四号や十二ポイントの大形活字が普通に使われているのだから、せめて普及用、青少年用の本だけでも、今後はなるべく大形活字を使うようにしてほしい。今では普及版ほど、値段を安くする建前から却って活字が小さいというような大矛盾があるのは、いたましい。特に気取ったつもりか、白紙の上へ本文を赤色又は青刷りにした書物を、しかも幼少年者用のものに往々みかけるのであるが、これほど眼の網膜に迷惑のものはない。私にとっては学校でザラ紙に鉛筆で走り書きした試験答案をみるほど眼の疲れを覚えるものはない。答案は必ず黒色の濃いインキで上質の白紙の上に認めて貰うことにしている。なにか特殊の眼鏡を用いて視力の疲労を防ぐ方法がないかというに、光線の強すぎる場合に鼠色褐色等の着色眼鏡を用いて網膜の過度の刺戟を避けるのはよろしいけれど、これは同時に紙の地色をも暗色ならしめ、文字の黒いのと紙の白いのと

の対照を殺いで了って不明瞭ならしめ、却って視力を余計に疲れさせる。光度を光源において減ずるように計らうに如くはない。

次に考えて貰わなければならないことは書物の紙質である。夜間手近い電気スタンドの下で光沢紙刷の書籍の読みづらいということは前に述べたが、ラフなコットン紙の如きはどの方向から光線がきても散らして了うので甚だ読みよいし、又軽いので手に持って立読しても手が疲れないし、洵に便利ではあるが、漢字のような劃の多い文字を、しかも九ポイント以下の小活字でベタ組などにされたのでは、紙質が粗いために印刷面が鮮明を欠くことになる。よって書物の内容によりこれを携行して出先で閑つぶしに読む如き本以外は、特に軽量なるべき必要はない。此頃月刊雑誌で四六倍判以上の大型のものや厚さ一糎以上の尨大なるものが甚だ多いが、これは私共のように寸陰を偸んで雑誌を漁ろうとするものにとっては携帯に不便、かつ片手にもって読むことができず、その上活字が小さく紙が黝色(くろずみ)ときているので車中繙読にも適せず、誠に迷惑な存在であって、従って読み度いと思いながら読めず了いになって了うことが少くない。寝床の中でも、部厚な雑誌はとても不便で読みえない。雑誌は二つに折って洋服のポケットに入る程度の大きさでありたい。

縦書横書の問題は別に論ずる人があろう。私自身は書物は次に述べる如く一字一字拾って読むよりも全体のカンで読んでゆくことの方が多い所から、眼慣れた植字方を望んでいる。従って明朝活字縦組平仮名が一番早く読める。横書なら字間を十分にあけて組まれたい。片仮名な

らまだしもよいが、明朝ベタで、平仮名で横組のしかも頁の左端から右端まで一行の通し組で、その上行間が狭いもの（半学術の雑誌に多い）ときたら、頁面をみただけで私はうんざりして読む勇気を失ってしまう。沈思黙読又熟読を要する学術書、哲学書などは必らず漢字縦書、字間アキ、大型活字であって欲しい。読書効果はこういう印刷技術によって影響せられること非常に大きく、販価の多少高くなるのはどうにか辛抱できることと思う。欧米の書物の印刷面は紙質、字の大きさ、行間等、こういう点に（値段にかまわず）よく注意が届いているように思われる。所謂廉価版がただ廉価というのみで、却って著しい不衛生版になっているのは、必ずしも国民の視力神経力を益々悪くさせようという意味からではないであろう。精神修養的の内容の書物は尚一層尊厳な印刷面にしなければ、効果は挙がらない。

次に読書技術のことについて一二述べよう。読書の中、暗記誦記その他研究の目的で分析的に読むが如き場合には迅速に読むということはできないが、文章を味うでもなくただ内容の要領を知ろうとするだけの目的で、なるべく早く読了しようという場合にはいろいろの技術がある。私共のような新らしい文献類にも目を通し、又新刊書は何くれとなく一度は内容を知っておきたいという者にとっては、まず最初にその書物を速読しておいて要所々々には鉛筆でマークをつけておき、後日参照の必要生じた時にそのマークを探るか、又読過した書物の要点を「カード」に記入して別に保存しておくのもよい一法であろう。速読する方法は大意を掴むのにあるのだから、第一には各頁をずっと眼を通して黙読一過する。新渡戸先生は和書なら右上

隅から左下隅へ、洋書なら左上隅から右下隅へ対角線に添うて視線を一過して緩やかに動かすとその頁の内容が読みとれる。こうすると一時間に二百頁近くのものは大意が分ると語られたことがある。私は縦書の和書を左方へ四十五度斜にし又は全く九十度横にして、つまり横書のものを読むような位置にして視線をゆっくり頁の上を左上から右下の方へ動かしてゆく。洋書ならばそのまま新渡戸先生式に視線一過する。これに慣れると少なくも通常の読み方の三四倍以上の分量は読める。しかしこれは内容の大体を看て取るという方法なのであるから、所々精読を要し又特に興味を覚える箇所には暫らく停滞して読み耽けるのが、却って楽しみになる。必らず鉛筆を傍に備えて適宜のマークを夫々の目的と必要に応じてつけて行く用意がないと後に至って困ることがある。こうして一度でも迅速に読過しておくと後日不思議に必要を感じた時に、その書物を想起して、参照する機会を持ち得るものである。又読書の進行中に来客、電話、その他不時の用事が起ってその方へ気をとられると、それ迄に読んだことが不知不識裡に忘れられてしまい易い。つまりとっくりと腹に落ちつかない。そこで読書には妨碍や中断のないような時刻を選ばなければならぬ。他人の低い話声や子供の騒ぎ声などは大分注意集注の邪魔になるが、雑音でも単調な騒音（工場の音・車馬の通る音）や階調音（音楽）などは慣れれば大して邪魔にならない。ラジオでも西洋音楽の如きは読書の妨げにはあまりならないが、講演や講談の如き意味のある言葉の話し声は往々妨碍となるものである。しかし書斎とは元来来客や雑音を遮断して専ら読書をするという目的の室ではなく、私はこれを読書子の作業室と解

したい。即ち研究調査の便に資する書籍文具その他の雑品を手順よく完備しておく室とし、必ずしも書庫と混同すべきではない。単に読書するためのみなら特別の書斎を要しない。庭先でも疊の上に寝そべってでも、どこでも本は読める。
ヒルティーは新刊書は Einteilung（目次）と Einleitung（緒言）とだけ読めば大体その内容は分る。古典は耽読すべし、新刊書は発刊後一年以上経って世評の定まったものの外は深く読むは却って悔ありとまでいっている。私もなるべく新刊書も古本屋の店先から比較的安く買ってきて読むこととしている。いろいろな意味での経済となる。

読書と環境

岸田日出刀

一

「春のくれつかた、のどやかに艶なる空に、いやしからぬ家のおくふかく、木立ものふりて、庭に散りしをれたる花、見過しがたきを、さし入りてみれば、南面の格子皆おろして、さびしげなるに、東にむきて、妻戸のよきほどにあきたる、御簾のやぶれよりみれば、かたち清げなる男の、とし廿ばかりにて、うちとけたれど、心にくくのどやかなるさまして、机の上に文をくりひろげて見ゐたり、いかなる人なりけん、たづね聞かまほし」

これは従然草第四十三段の記文である。読書の環境としては、蓋しこうした境地が理想であるのかもしれない。兼好の行文至極のどかで、現代学生の読書層を叙するには、あまりぴったりとこない憾みがあるかもしれぬが、端然と書を読むこの場の雰囲気は昔も今も変らぬ靜かなものであろう。

私はどう考えても読書人という部類には属しない。「凡て、いともしらぬ道の物語したる、

かたはらいたく、聞きにくし」と兼好あたりから叱られそうである。しかも敢て玆に「読書と環境」に就いて小文を綴る所以は、身建築を天職として家を造り、部屋を整える道を一途に精進しようという私だからである。若き学生諸君にして将来実社会の人となり、書を読むための部屋を整えようというような時の何かの参考にでもなり得たら、読書人ならぬ私の幸これに過ぎるものはない。

読書の環境は、時と場合によって融通自在であって差支えないと思う。一口に読書といっても、読むべき書物の種類内容は千差万別である。一字一句も忽がせにしないで熟読記憶しなければならぬようなものもあれば、唯漫然と読んでよい書もあろう。時にはほんの時間つぶしのために、網膜が単に活字の刺戟を受けていればよいというような呑気な場合もあろう。こうした読書の種類と内容との差に応じて、その環境もちがって少しも差支えないし、また同じ読書の種類内容でも、各個人々々によってその環境に特異性を求めるのだということも認められよう。

読書の環境に対する個人的特異性は勿論あろうが、万人に共通する快適の条件としては、靜けさということであろう。騒音裡の読書は普通万人の苦手とするところ、外界がいかに騒音に充満しようとも、心頭を滅却して不動の靜を心中に保ち、いついかなる時と場所でも、自由に快心の読書をなしうるということは、普通人には到底望むことはできない。読書に靜けさということは、まず必須の条件とみてよく、晴耕雨読というも、雨ふれば四囲おのずから靜かで読

書に適する環境と心境とになり易いからであろう。

天高く馬肥え、燈火まさに親しむべしというのも、虫声かすかにして靜粛の気天地に満つる秋夜の読書に好適なるが故の語であることというまでもない。

靜穏ということが読書に欠くべからざる条件であることは、単に気分の上からだけのことではなしに、生理上からも騒音がいかに人体に悪い影響を与えるものであるかは、既に数多くの医学的実験によって実証されている。騒音は人体の諸神経や諸機能に幾多の悪影響を与える他に、過度の騒音は心的平静状態を破り、焦躁の感を起させて、靜かに読書をたのしむの境地にひたることを妨げ勝ちであることは、我々の常日頃経験するところである。

騒音というものの専門研究家のいろいろな実験によれば、騒音が私どもの運動神経に及ぼす影響の程度も明らかにされ、また騒音の存在が人の読書の速度にどの位影響するのか細かなパーセンテージも報告されている。更に心臓の脈管作用や消化機能、新陳代謝機能や聴覚等も騒音によりかなりの程度に影響されることも詳しく研究されている。総じて靜かなところほど読書の環境として好ましいことは更めてここに記すまでもない。だが読書の心構えとしては、外界がいかように騒々しかろうとも、明鏡止水の靜けさを心に保ちうるの態度をもつことであろう。だから、電車の中汽車の中でも自由に快よく読書できる修練も必要だということにもなろう。

書物にもいろいろの種類があり、電車汽車の中で読むに恰好のものも尠くない。私の友人の

F博士は月々贈られる諸雑誌はみんな電車やバスの中で読了することにして極めて能率よいとのこと、私の電車利用の時間は一日十分たらずという短かさであるから、車中読書の経験はそう多くない。電車や汽車の中での読書は何時間でも平気でできるのに、どういうわけだか自動車中の読書は僅か四五分でも頭部に異常を感ずるという妙な癖を私は持っている。医学上から車中の読書は健康衛生上いけないのかもしれぬ。それかといって何の変哲もない対座の人の顔をぽかんと眺めているのも芸のない話、勉強のための読書を車中でするのは一寸考えものだが、雑誌とか軽い性質の書物なら車中も一つの読書環境として価値あるものとなることができよう。

二

書を読むための部屋、それが書斎であるが、書斎は単に読書のためのみならず、人によってはそこがその人の仕事部屋ともなるであろう。私は今貸家に住まっているから、特別に書斎というべき性質の部屋をば持っていない。極くせまい二階建の和風住宅で、六畳敷位の大きさの洋間が一つくっついているので、その部屋を客間兼書斎に流用している。洋服の客に疊の上の坐式応対は気の毒であるし、私自身十分以上正坐するとしびれがきれて立ち上れないから、客間だけは何としても椅子卓子の腰掛式が必要である。また小さい時からの習慣で、長時間読書をしたり原稿を書いたりするのに、疊の上の坐式では三十分と続かないから、書斎も腰掛式に

したい。著名の文士達の書斎生活を紹介した写真に、疊の上に座蒲団を敷いて正坐し、日本風机に向ったところなどをみるが、ああいう姿勢でよく長時間執筆できるものだと感心もし、また不審に思うことがよくある。私には到底そうしたことはできない。日本人である以上疊の部屋に正坐して端然と机に向って読書するのが本筋とは思うが、私位の年配から以後の若い人達には、腰掛式の書斎の方が一般的なものだと思う。

東京に住まう学生の数がどの位でそのうち何割位が下宿住いしているのか確かな数字はしらないが、その大部分は腰掛式の生活をしているのではあるまいか。尠くも勉強や読書に際しては椅子卓子を使用しているものと思う。医学上からみても腰掛式の方が姿勢その他の点で健康上よいであろう。

室町時代から次第に発達して桃山時代に大成した一つの住居形式に書院造りというのがあるが、この書院造りの特徴は、書院の間を持つことで、書院の間には書院窓をつけるのを原則とした。書院窓の起源は鎌倉時代以後の僧家からであるが、床脇に少し突きでた窓をとり、その窓の甲板の上に文具を飾ったり、またそこで書を読んだ様子は法然上人絵伝などの中にも表わされている。書院窓は謂わば造り付けの机であり、書院の間は今日謂う書斎だったと考えてもよい。床の間に画幅を懸け花を活け、時には香をたきながらその直ぐ前の書院窓で書を読んだ当時の人の読書環境というものは、今日の私共の読書環境からみると、至って浮世離れのした静寂そのものの世界であったであろう。そうした読書環境も今日これを強いて造ろうと思え

ば造れぬこともあるまいが、それはあまりの古代趣味で一般には通用しない。

静かなことと落着いたこととは、書斎の持つべき必須の条件と考えてよいが、騒音に充ちた都市の中では、それもなかなか求め難い。私自身の学生生活時代をかえりみても、その読書の環境というものは、至って雑ぱくとしたものであったような気がする。今の学生諸君がどんな環境の家や部屋で読書しているか勿論区々であろうが、所謂下宿住いではその読書環境なるものも、決してそう気持のよいものではないであろう。学生時代に快よい読書環境を持ち得るということは大変幸福なことだ。青年時代の快適な読書の雰囲気は、その後の社会人としての自己の教養に資する点が極めて多いとさえ思われる。青年時代にそうした経験のない者が、後に社会人となって急に読書に精進しようとしても、それは無理であろう。

一般社会人になれば、その読書に費される時間というものは時と共に減少するのが常である。このことは学生時代に快適な読書の環境になれた者にとっては堪えられぬ苦痛であろう。社会人となってもいつまでも心ゆくまでに読書したいものである。それには青年、学生の頃から、よい読書の環境を持ちつづけるということが是非とも必要である。書は読みさえすればよい、その環境のごときを云々するのは贅沢だというのは当らない。せっかく書を読む上からは、気持ちのよい雰囲気の裡で読書したいものだ。私は人に吹聴するに足る快適の書斎というものを持っていない。だが将来快心の書斎をば自分の思い通りに計劃するとしたとき、建築家であば持っていない。だが将来快心の書斎をば自分の思い通りに計劃するとしたとき、建築家である私の理想の書斎はどんなものとなるであろうか。建築家としての立場から書斎というものを

少しく考えてみよう。

三

部屋でまず大切なことは、部屋の方位である。方位といっても家相でいう方位とはちがう。或部屋が東向か西向きか、即ち部屋が家の東側にあるか西側にあるかというような方向の問題である。この機会に一寸いい添えて置きたいことは、学生諸君は今家相というようなことを聞くと呵々大笑されるであろう。一笑に附するというのは、今日巷間に流布されている家相なるものが何等の科学的根拠を持たぬ迷信に過ぎぬことをよく悉知するからであろう。ここで家相のことを論ずる余裕はないが、諸君が将来家を新たに建てようというような場合に、たとえ老人がやかましいとはいえ、鬼門だとか裏鬼門だとかいう妙なことを消極的ではあれこれを肯定するような態度をとって、建築家をこまらせたり子供に笑われたりすることのないよう注意して頂きたい。二十五の諸君もあと三十年すれば五十五となる。便所の鬼門だけはよけたいなどという人がないとは保証できないような気がする。

書斎の方位は北向がよいとは一般の通説である。私はこの通説には肯定しがたい。北向がよいというのは、北からの光線は一日中その性質があまり変化せず、太陽光線の直射も受けないから、朝から晩まで落ちついた同じ気分で読書ができるという理窟から生まれた説であろう。だが私からいえば書斎は何としても南向きとしたい。通説では太陽光線を嫌うのに、私の書斎

では太陽光線を大いに歓迎したいというわけである。書斎が北向きがよいか南向きがよいかは、その人の好みで一概に何れがよいと断定することはできぬであろう。人に陰性と陽性とがある。陰性の人には北向きの書斎が好まれ、陽性のものは南向きの書斎を好むのではなかろうか。南向きの書斎を好む私は陽性らしい。朝から天気晴朗の冬の日、南面の部屋は太陽を部屋一ぱいに受けてみるからに暖かそうであるのに、それをみすてて無理やりに陽光の影だにささぬ北面の書斎に入る勇気はでそうもない。朝から晩まで書斎に閉じこもるということは、特殊の人を除いてそう一般的なことではない。書斎もやはり東から南に面する方位がよいと思う。書齋を専ら夜分に使う人にとっては部屋の経済という上から北面の部屋をこれに当てるのが得策の場合もあろうが、これは全く別問題である。

部屋の落ちつきは部屋の大いさに関聯する場合が多い。通則的にいえば部屋が大きいほど書斎などとしては落ちつきが得がたいものである。だがこれも個人的の好尙によりかなり左右されることで、私の趣味からすれば書斎もできるだけ大きくしたい。相当大きな家でも、その書斎に六疊敷程度の小さなものを配した例をよく見受けるが、卓子椅子式の家具配置をすると六疊間大では狭きに失しよう。思い切り大きな部屋に思い切り大きな卓子を配して悠然と書を読み文を綴ってみたいというのが、私の今の希望である。私の希望がいつ実現するかとんと予想もできぬが、せめて十二疊敷大位にはしたいものだ。今の私の書斎は六疊大の洋間であるが、周囲の壁がひしひしと身にせまってどうもゆっくりできない。大きな部屋のまん中あたりに卓

子を据えた書斎で好きな書物を読んでみたい。六疊大の部屋では卓子は窓面に密着してゆとりがなくいやなものだ。

部屋の大きさと関聯して考えられるべきものに部屋の明るさがある。一般に部屋は暗いほど落ちつくとされ、落ちつきを求める書斎にあっては、あまり明るくない方がよいとも言われるが、これも私からすれば首肯できないことだ。家の部屋という部屋、みな明るいに越したことはない。暗くてよいのは暗室だけだ。暗い部屋はこれを明るくすることはできない。明る過ぎたらこれを暗くする方法はいくらでもある。カーテンや窓かけの類で光線量を調節加減することは極めて容易であり、且つ自然である。部屋の通風換気という上からも部屋の開口部（窓や出入口）はできるだけ大きくしておくに越したことはない。西洋風の壁のところどころに窓をぽつりぽつりと開けたものは、みるからに部屋にとじ込められた感じで不快なものだ。日本風に床のところまで開け放つ必要はないかもしれぬが、窓は一連のつながりをもって広く開け放たれる形式のものでありたい。

窓面積がいくら大きくても、障子やカーテン窓かけの類を工夫すれば、部屋の落ちつきは自在にコントロールできるものだ。たとえば、普通の洋風窓には硝子障子がはまっているだけだが、硝子だけを通して部屋にさし込む光線は落ちつかぬものである。日本住宅にみる紙張障子を通して入る光線はなごやかに落ちついた感じを与える。洋風の部屋の窓には必ず硝子障子だけを建てこむものと決ったものでは更にない。自由に紙張障子を建て込んだらよろしい。

四

窓を硝子障子と紙張障子の二重とすれば、冬の防寒保溫の上からも極めて好都合であるし、部屋の中での気分も殊の外落ちついてよいものだ。硝子窓では鳥影も樹影も映らず、たとえすり硝子にうつしても風情がない。部屋の窓を硝子障子一重だけにするのは、ほんとに考えの足らぬことだ。書斎に限らずどの部屋も窓の障子は硝子と紙張りの二重にしたい。夜の締まりを考えて板戸を建てるようにすれば猶更よい。一見極めて原始的手法とみられる紙張障子や板戸の類も、よく考えてみると数々のすぐれた特徴を持っていることが判る。溫古知新は窓の障子にもある次第、頭からこれは古いと捨て去ることの誤りをお互にしないようにしたい。

書斎は書を読むところ、書棚が要るが、始めから書斎として計画する場合は書棚は造り付けとし、家具として壁面に据えるのではなく、部屋の一部として構成すべきである。家具として据えるのでは部屋と書棚との調和は求め難く、また天井近くまで棚とすることにも不便を感ずるが、始めから部屋の一部として計画すれば、空間の利用も完全にできるし、見た眼にも秩序整然として快適である。藏書多き場合には書斎にともなって書庫を配するのは当然だが、書庫だけを鉄筋コンクリート造として防火扉をつけ、火災時の安全を考えるのがよい場合もあろう。鉄筋コンクリート造の建物は濕っけるとよくいわれるが、実験上からはそれの誤りであることが立証される。だが書庫のごときは窓も小さく通風換気も不充分になり勝ちであるから、

内壁面をすべて板張りまたはテックス（人造繊維板）張りとすれば濕気の心配は更にない。

壁面天井等の色彩は部屋の気分や落ちつきに影響することが大きいから、充分注意を要する。和風の部屋は材料のもつ自然色が基調となっているから、部屋全体の色彩計画というものは至極落ちついたものであるが、洋風の部屋では塗りものが多いので、色が自由になるだけ時に不調和な結果となることもある。色が自由になるとしてどんな色がよいかは一概にはいえぬが、薄いクリーム系統の色から極く薄い鉄色乃至灰色程度が無難であろう。部屋を落ちつかせようとするのはよいが、あまり暗い色にしないことが肝腎である。要は明るい感じの中に、而も落ちつきと静けさを盛る深みのある色彩計画でありたい。このことは家具や窓かけ敷物の類に渉ってもいいうることだ。

夜の気分は照明が支配する。長時間読書をする場合には眼の衛生という上からも照明の形式や照度をどうするかは重要な課題である。医学上から書斎の照度は幾何ルックス位がよいとの数字もでようが、これも個人的の趣味なり好尚で或程度までの融通性は当然許さるべきであろう。晝間明るい書斎を好む者は夜間の照明もまた明るいのを好むであろう。

照明形式には元来三つの種類がある。直接照明・半間接照明・間接照明の三つである。普通一般に書斎の照明法として応用されているのは半間接といって、電球が露出せず乳白色のグローヴの中に隠されたもので、電球を露出した所謂直接照明のように眼を疲らせたり、ぎらぎらした不快感を伴わないでよい。間接照明というのは、光源を壁面上部等に隠して、反射光線だ

けによる照明法で、部屋全体としてぼーっとした感じになり落ちつくことは落ちつくが一寸精気に乏しい感がある。だが部屋全体をまず間接照明とし、卓子の上その他要所を局部照明にすれば、使用上もまた気分の上からも至極妙趣に富むものとなろう。

以上「読書と環境」の題下に小文を綴ったが、稿終るに近づいて題意を充たすことのいよいよ難かしいことを痛感する次第である。今私が筆を執っている卓子の前の窓際には、黄に色づいた葉をつけた山吹の枝が秋の深いのを思い顔に、見守れば辛うじてわかる位にかすかに揺れている。どこからともなくこおろぎの声がきれぎれに聞える。前の家のラジオが風雲急な欧洲のニュースを低く伝えている。その向うにある下宿屋の二階の窓が明るく輝いているのがみえる。その部屋で学生が読んでいるのは何の書であろう。秋冷の夜燈火に親しむはまことに好ましい情景である。読書に精根を打込む時、下宿の四疊半も万全の書斎に相通ずるの境地となろう。方位がどうの部屋の大いさがどうのと千言を費したのは、あまりに迂遠であったような気もする。読書の環境をつくるものは、書を読むその人の中にありとも思う。書斎兼客間六疊大の私の書斎に不平はいうまい。書を読んで忘我の境地に達すれば、六疊大の書斎も無限の大いさをもつと感得することができようから。

第二部　讀書の仕方

如何に読書すべきか

出　隆

一

読み方にも色々ある。

まず誰でも、本なら開けて読み、新聞なら拡げて読む。或は頁をめくって読み或は手頃に疊んで読む。眼をあけて読む、字をみながら読む、尤も盲人なら指先で読む。更に声をだして読み或は默って読む。頭で読む、感じで読む、心眼で読む。机前に端坐して読む、左光線で読む、鉢巻をして読む。ねそべって読む、寝床で読む、便所で読む。静かな書斎で独坐して読む、同志相集って輪読する、一家団欒して読む。店頭で盗み読みする、というのは店番をしながら主人の眼を盗んで読書する殊勝な小僧さんのことだが、本屋の店頭で雑誌の立ち読みするのも盗み読みである、或は歩き乍ら読み、電車の中で読み、職場で読む。持ち歩いてどこでもひまをみて読む、自分の書斎で読む、図書館にいって読む。購って読む、借りだして読む。更に又、急いで読む、ゆっくり読む。かみしめて読む、うわの空で読む。一字一句念を入れて読む。字

引と首引で読む、書き込みをし乍ら読む、覚え書をとり乍ら読む。熱狂的に読む。冷静に読む、批評家風に読む、研究的に読む。能率的に読む、事務的に読む、娯楽気分で読む。頭から尻までのべつに読む、繰り返して読む、読書百遍する。飛ばして読む、開(あ)いたところから読む、頭をはねて腹から読む、或は逆に序文と結論とだけ煙管(きせる)式に読む。読み流す、読み破る。精読する、多読する、通読する。熟読する、味読する、愛読する、耽読する、乱読する。その他、更にいつかは読もうと購入したきりで積読(つんどく)というに至るまで、数え挙げれば幾らでも違った読み方がある。

これに応じて、「いかに読書すべきか」に対する答えも、千差万別である。いかに読書すべきかというは、今挙げたような色々の読み方のうちでどれが良いかというのであるが、実はどれも場合によりけりで、場合によっては良いし、場合によっては良くない。「これこれの人がこれこれの事情の下で、この本を、この目的で読むにはいかに読書すべきか」という風に場合がちゃんと定まっていれば、この人にはこの読み方が良いとかあの本を読むにはあの読み方はよくないとかいって忠告もできようけれど、そうでないといずれの読書法が良いとも悪いとも一概に断言し得ない。

例えばこの私の場合に就いて考えてみても、読み物の種類の如何やこれを読む目的の相違やその時の事情によって、私は色々の読み方をしている。盲人でないから指先で読んだことはない、また店頭の小僧さんとして盗み読みをしたこともない、しかしその他の読み方は多かれ少

なかれ総て私に覚えがある。そしてそのいずれもが、夫々その場合の如何によって、良いと思える読み方であったこともあるし又これは良くない読み方だとはしり乍らもあの場合あれで間に合わすより外なかったというようなこともある。私の読書法というようなものをいえとなれば、それは平凡である。即ち、どんな読み方でもその場合に丁度よいと思う通りをするにある。精読するを必要と認めるものはこれを精読するし、煙管式で十分と思えばそれで済ますことである。すべきだと思う通りをした時はよくしたのであり、思い通りの読み方をしなかったり或はしようにもできなかったときは、よく読まなかったのである。しかし実をいうと、この本がこの場合の私にとって果して煙管的で十分か否か或はそれさえ不用な本であるか否か、或は逆に入念に精読する必要のある本ではないかどうか、これが読まない先から一見して正しく認定し得るようになれば、いかに読書すべきかなどという問題は問題でなくなる。即ち、そうなれば、ただ正になすべきをなしさえすれば良いのであり、そして若しなすべき読み方をなさないのなら、いかに読書すべきかを問題にしたところで何の役にも立たないからである。だが実際には意志の薄弱のためにといおうか、幾ら正しいと認定してもその通りの読み方を実行し通さないことが多い。のみならず認定の誤っていることが屢々ある。これは精読に価すると認めてその通り精読して仕舞って遂に「読んで馬鹿をみた」と自分で後悔する場合も多いし、又逆に、これは煙管式で十分だと思って飛ばして読んだため今度は「読まないで馬鹿をみた」と他人からいわれる場合もある。

こうなると、読み方のうまい人というのは、一々の場合に即いてこれをいかに読むのが最も良いかを前以て直感的に認定して誤ることなく、かつ実際にその認定した通りの仕方で読み上げる人のことであるといえよう。しかし、この認定を誤まらないということは容易なことではなく、結局それは手をかえ品をかえて色々と読書しているうちに自ら悟ってくる心術という外ない。そして、若し真の読書法というようなものがあるとすれば、それはこの誤りなき直感的認定力を得させるための方法であろうが、要するに今いう通り自分で色々の本を色々の仕方で読んでみるというのが落ちであろう。「いかに読書すべきか」と問う学生に対して、私は結局、「読書せよ」と答える。

私は通学途上の電車の中では、新たに学び初めた外国語の文法書を読むことに定めていたことがある。動詞の変化などを覚えるのにはそれが良かった。当時の私にはそれが良かったし又そういう必要に迫まられていたからである。後には軽いものを読むことにした。しかし今では眼が疲れるから電車の中では本を読まない。それよりか色々な人間の顔や姿に世間を読む方が学問になると思っている。だからといって若い学生にどちらを強要しようとも思わない。私は又便所では朝刊を読むことに定めていたことがある。朝刊を手にすると便所を聯想する、そうすると毎朝きまって用をたすことになってまず健康によい、のみならず、どうせ人間というものが毎朝自然灌腸のあることを生理的に良しとし必要とする動物であってみれば、朝刊はいやでもこの用をたす五分か十分の間に読み終ったことにするのが時間的経済になって能率的で

もあると考えたからである。だがこの方法も他人に推薦しようとは思わない。しかし特に多くの新聞を入念に読む必要のある人間は別として、普通には、新聞を読むのに念を入れすぎて時を潰し、そのために他の雑誌や単行本を読む時間をなくするのは愚ではなかろうか。新聞を電車か便所の中で片附けて仕舞えとはいわないが、朝は朝刊、夜は夕刊とただそれだけでは仕方がないと思う。とにかく一般に、どこでは新聞、どこでは単行本と読む処を定めて置くとか、或は毎晩何時間だけはこれを読み休日の午前はあれを読むという風に定めて、できるだけこれを実行するは、良い心掛けである。尤もこれも機械的になり過ぎては考えものである。要は読む人自らにとって丁度よい本を見出し、読むに丁度よい時を、ところを、仕方を見出して、実際に読むにある。

中学校風の教科書だけでは満足されないで何か別の本を読み度いという学生は、この丁度よい本を見出すことが六カしいのだというかもしれない。またこの丁度よい読み方がわからないというかも知れない。しかしそれだからといって、「何を読むべきか」とか「いかに読書すべきか」ということの書いてある本やその他そのような本だけを読んでいたのでは、実は本当のことはわからない。水泳の講釈を幾ら聴いても自分で水に這って泳がねば泳ぎは会得されない。そのように、何でもいいから本らしい本にぶつかって行かねば、本当の読み方はわからない。本当に読むというのは、いわばそこに求むる自己を見出すことである。本らしい本というのはそこに真に自分の求めている今一つの自己、より大きい自己が見出されるような本であ

る。そこに自らの探していた未知の自己が発見され、依て自らが培われ養われ深化され拡大されるような本である。読書というは、少くも学生にとっては、一種の自己発見であり自己深化であり自己拡大であると思う。

初めには、何か本らしい本を読み度いが、しかしどの本が丁度この本らしい本であるかわからず、どれが丁度この求めを充して呉れる本かわからないかも知れない。その時には、教師か誰かから教わってもよかろう、或は一人が一般に良いといい自分にもそこに自分の求めるものがありそうな気のする本でよい。できれば大きなどっしりした本がいい。それは『古事記』でもいい『ファウスト』でもいい、『種の起源』でもいい。まずこれらにぶつかってゆきこれと取組み合うのである。一般に書物というものは、名士の講演やラヂオの講座などのように跡方のなくなるものとちがって、何回でもこれと仕切り直し、何度でもこれに飛びついてゆくことのできるものである。繰り返して読み直すことができる、あとに引返して腑に落ちるまで読んでいい。それが大きなどっしりした大きな本だと、こちらが強くぶつかってゆけばゆくだけ強くはね返してくる。打てば打つだけ強く響き掘れば掘るだけ深みがみえてくる。こうして自己は訓練され拡大され深化される。勿論、ただ一つの本で直ちに自分の求めるところを悉く全面的に満して呉れるような本はない。若し君にそのような本があったとすれば、恐らくそれは偶偶君の求めが余りに謙遜であるか弱小であるがためである。そこで、この本は読みづらいとか面白くないとかいう不満や倦怠が起るであろうが、辛抱してそこから何かをかち得ようと戦わ

ねばならない。それでも尙人のすすめる程よい本と思えないなら、好きになりそうな箇所があるかないかめくって彼方此方を読んでみるとよい。それでも駄目なら一まずこれを棄てて別の本をとり、これと取組み合うのである。こうして色々の本を色々な手をつかって精読し多読するのである。そうしていると、そのうちには読書の味がわかり、おのずから読み方も上手になり、これは熟読に価するとか、あれはどの程度に読めばよい本だとかいう見当もつくようになるであろう。

このように自らで読む学生に対してのみ、いかに読書すべきかの話も多少の参考になろう。それはあの本といかに取組み合うべきかを話すことである。更に又、この取組み合いをどの辺まで辛抱して押通すべきか、どこで水を入れ、どこで取組み直すか、或はどの辺でこの取組をやめて別の本と取組むべきか等々について語ることである。しかし、さきにもいつた通り、その学生の性格・素質・力量のいかにより又その読む本の或はその読書に求むるところの異なるによって、いかに読書すべきかを語るにも匙加減を必要とする。ただ一般的に「念を入れて読め」というと、そうでなくても念を入れ過ぎる神経質の学生が愈々念入に一字一句もゆるがせにせず、遂に何日かかっても一頁も進まないことになったり、だからと思って「大意を摑むことに注意せよ」というと、今度は神経の粗大な学生が益々大ざっぱに乱読して、結局は三百頁の書物を一晩で読み上げたという記録だけが記憶に残っているといったようなことになる。要するに、或馬にはより多く鞭を加える必要があり、或る馬にはより多く手綱を牽く必要がある。

しかし、正にそれ故に、相手の一々を知らないで誰にでも通じるような一般的な話をする時には、聴き手の方が加減して呉れねばならない。私のこの話に限らず一般に多数者を相手にする本を読む時にもこの心掛けが大切である。それ故、読者諸君は、次に私が或は鞭を加え或は手綱を牽くに当っても、――鞭と手綱では進むべきか止るべきかわからないなどいわないで――自からがこの鞭を必要とする者であるか或はあの手綱を必要とするものであるかを各自で弁別して読んでいただき度い。これもよく読書しようとする者の心得の一つであるから。

二

『せっかく本を買ったからには、読むのが当然である。しかし、必ず読まねばならないというのではない。』

買った以上は何でもかでも読まねばならないというのは小々けちな考えである。買ってみても難解で読みこなし得ないような本であったら無理に読むよりか時をまつがいいし、又若し読み度くない本であったならこれも強いて読むには及ばない。更に読むに価しないとならば読むに価しないこと勿論である。だからといって、読み得ないか読むに価しないかを認定するだけにでも、多小は頁をめくって読んでみる必要があろうのに、碌々目も通さないで積んでおくのは――学者や蔵書家の積読（つんどく）は別としても――余り良くない癖である。大体において、親がかりの学生の場合には、読むに価するといわれ認められている本を或は読み度いと思う本を買うの

であるから、買った以上は読むのが当然とすべきであろう。他から貸りて読む場合も同様である。

『予定の方針に従って規則正しく読むべきである。併し、自分の立てた予定に囚われるのは愚である。』

専門家がその研究のために何年間にこれだけの書物を読破せねばならないというような場合には、今年一杯には甲書を読み終り、次の年までには乙書何巻と丙書の第何章とを読んで抜萃しよう云々と予定し、着々その研究に向けて予定通りに進むということも必要であろう。しかし謂わば一般的教養のために科外に読書する学生の場合にはそれほど強制的な予定表を以て自らを束縛する必要はないが、この場合にも予めいかに読むかの見当をつけて置く方がよいと思う。殊に比較的大きい本を読もうという場合には予定を立てて読む方がいい。まず本をめくって大体を見渡していかに読むか幾日かかって読むか心に予め方針を立て、この予定の方針に従って読むべきである。ばらばらと頁をめくってその本の性質の大体を推察し、その難易や分量を自分の事情や能力や慾求と照し合せて、読むとすればいかに読むかを予定する。序文や目次のある本だとこれでほぼの見当はつくが、しかし序文や目次を見ただけでは内容の不明瞭な場合もあり又見かけ通りでないことも多いから更に随意に二三箇所本文をめくって読んでみる。こうして、読むに価するか否か、価するが今急に読まないでもよい本か或は他の仕事は多少犠牲にしても読み度い程の本か、読み易いか、否かこれらのいかによって、あと廻しにするか今

直ぐに読むか、精読するか或はざっと通読するだけでいいか、電車内で読むか机の前で読むべきか一晩で読むか或は幾日かかって読むべきか等々のいずれかに定める。勿論、この予定方針の決定に長い時間をかけることは無用である。或は又、予定するまでもなく直ぐに読んでしまえる本もあろう。そこで、仮りに電車内で読むことにしたとすれば電車内で読めばいい。読んでいてこれは本式に書斎で読む方がいいと感じたならば机に向って読むことにすればいい。逆に、電車内で読むにも価しない本だと知ったら読まないでいい。次に、どこで読むにしてもそれをそこでいかに読みどの程度に読むかが予定されねばならぬ。二三日で読み上げようとか或はこれは読みごたえのある本だから毎日何頁ずつ読んで一箇月で読了しようとか或は他の部分だけはざっと通読してこの章だけは何日かかってもいいから、念を入れて読もうとか、その他等々の予定をする。そして、予定した以上はできるだけ予定通りに読むべきである。勿論これも暫定的の予定であるが、自分の定めたものだからといって無闇に予定を破るのは宜しくない。しかし、解っても解らなくてもただ機械的に予定の分量だけは予定の時間に読むという類の読み方もよくない。読み終ることは愉快なことであるが、読書の真の終り或は目的は、単に読み終ることには存しない。とはいうものの、予定も何もなく解るまで頁をめくらないと頑張って、いつまでも同じ頁に停滞しているのも愚直というものである。要するに、予定をして読書の適度の推進力たらしむべきである。『読むからには読了すべきである、巻頭から巻尾まで読み通すべきである。しかし中程（なかほど）から読み始めるもよく又中味だけですましても宜しい。』

厭だとか面白くないとか長くて退屈するとか或は難解だとかいって、あの本を少しこの本を少しと、どの本も碌々読みもしないで投げだすのは最も悪い癖である。大部の本でも辛抱して読み、読み破り読み破って読書の味を知ること、読み終って、終りの喜びを味わわねばいけない。何でもかでも頭から尻尾まで隅から隅までとが最良の読書法だともいえよう。同時にしかし、序文と結論だけを読んで読んだ振りをするのは宜しくない一本調子に読むのも考えものである。序文と結論だけで中味を見すかれるような本もある。しかし、この見通いにきまっているが、序文と結論だけで中味を見すかれるような本もある。或は又、巻頭から読しがきくようになるのは念入に読み上げる稽古をしてからのことである。或は又、巻頭から読んでは面白くなかったり六カしかったりする本でも、中途から読みはじめて初めに帰れば解かるようになったり面白味のでてくるような本もある。巻頭から読むよりか寧ろ中央から読む、そして巻頭に帰って巻尾まで通読するのがよい。しかし中味だけですましてよいものはそれだけでもよい。要するに、幾ら頭から尻尾まで呑み込んだからといっても、その本の真の中味（それは結論にあるとも限らず中程にあるとも限らぬところのその本の真髄である）を消化して自らの中味とし自らのものとすることを知らないでは真に読んだとはいえない。

それ故に、『念を入れて読め、しかし大ざっぱに読め』と私はいう。

念を入れて読め、というにも、今いったようにその本の全体を隅から隅まで残さず読めという意味と、更に部分的にその一字一句もゆるがせにしないという意味とがある。一字一句に念を入れながら隅から隅まで読み通してしかもこれによってその本の真の中味を身にするなら、

これに越したことはない。ただ、さきにいった通り、下手に隅から隅までいじくるだけで中味を読み落しては仕方がない。そのように、一字一句に念を入れ過ぎて全体がわからないで終るのもこまる。終るならよいが一字一句論議していて遂に一頁も進まない学生があった。彼はその読もうとする本の巻頭の第一句「総ての人は生まれつき知るを欲する」にぶつかって、そのさきが読めなくなった。果して総ての人が知るを欲するのであろうか、嬰児や白痴は知るを欲しないではないか、知るとは何か、何を知るのか……といった調子で、独りで幾ら考えてもこの第一句が納得できない。こうしてその日も次の日も一行も進まない。これは神経衰弱者の極端な例であるが、一字一句念を入れてという注意をはきちがえたものである。とにかく念を入れるにも程合いがある。書物というものは多かれ少なかれ一つの纏った全体として意義を有する一種の有機的生物である。それを心得ないで一部分だけに拘泥していては全体もわからねば又この部分も理解されない。幸にして書物は、あとで何が語られるか解らないところの講演などとはちがって、総てが既に記されているから、初めのところが解らねばさきの方をめくってみればいい。或は講演を聴くときのように、初めに解らない句があってもあとで解ってくるだろうと暫く疑問のままに残して読んでゆけばよい。そして若しあとになっても解らないなら再びもとにかえって読み直せばいいのである。一字一句念を入れすぎて全体を見落すような人には、それ故に、寧ろ大ざっぱに読めとすすめるのである。それは単に大ざっぱに読み流し読み散らせというのではない。勿論一字一句が大切であるが、その一字一句を常に全体の生きた部

うのである。

分と理解し味読し、一字一句をも殺さないで、全体を生きた全体として自らのものにせよとい

『深く読み広く読むこと、精読し多読すること。』

一つの本についても或る箇所に特に念を入れて深く書むことと、万遍なく広くその本を読み通すこととがある。急所を衝けば全体が倒れるように、本でもその急所を摑むことによって単に満遍なく読むより以上に全体を見通し得ることがあり、或は又、満遍なく読むうちに急所に迫り急所を摑むの道もある。全体からその重要部分にゆくも逆に部分から全体にゆくも共にうまくゆけばいいが、悪くすると或る一箇所だけ急所のつもりで精読して実はそこが何らの急所でもなかったり或は全体を満遍なく読んで急所も何も取逃したりする。要するに或る箇所には特に深く立ち入って精読し味読すると共に広く全体の大意に通ずるように読むのが良い。そのように一つの本についていわれることは多くの本についてもいえる。或る幾つかの本は特に深く精しく味わい読むが、それと共にその他の本もできるだけ広く渉って多読することが必要である。一つに偏すれば狭くなり、多くに失すれば散漫になる。精読すると共に多読を要する。精読によって自己を深め多読によって自己の世界を広くする。勿論、精しく読むに価しないものに深入りし乍らしかも駆足で読んでは解ろう筈のないものを漫然と走り読みしたのでは、いくら精読したりといい多読したというも意味をなさない。それは身につけて読まないからであり自らのものにしていないからである。既に高等教育を受けた程の人であり乍ら、多くの本を読み

散らしたが本らしいどっしりした本は碌に何一つ読み終せた覚えがないというような人には、どことなく深みがなく、逆に専門方面の本は幾冊か暗記するほど精しく読んだが他の本には見向きもしなかったというような人は、その人に幅がなくその世界が狭苦しい。これらは共に書物を自らのものとしないで他のものとして読んでいたからである。

『自らを他に読み、他を自らに読むこと。』

書物は、それが読まれるまでは全くの他人であろう。これから読もうとして繙かれたときには将に知己となり自己となろうと対座している初対面の客である。それは黙っているくせに雄弁に答える話相手である。そして、繙いてこれと交わりこれと親しんでゆくうちにこの他人は他人ならぬ知己となり自己となってくる。読んで自らのものにするというのは、単によそよそしい他人事として知るとか記憶するとかいうのではなくて、読者自らの血となって流れだすことであり自らがそこまで拡がってゆくことである。『古事記』を読んで我々は、或る大和民族なるものの歴史を知るのではなくて、そこに我々自らに外ならない自民族の昔に帰って自ら感じ自ら生活する。或は『万葉集』に自らの血の波打つを聞く。我々は『種の起源』を読んで著者ダーウィンとその学説をしるだけでなく更に自らの内なる博物学者ダーウィンに接し自らなる彼と共に我々人類の遠い起源にまで自らを帰らせる。人は『ファゥスト』のうちに自らの美醜様々な面を一層明瞭な一層深刻な形で見出すであろう。遠い過去の自らに出会い、埋れていた自己を掘り出し、黙せる自己を語らせ、未来の自己に接し、未知の自己を知る。ここに読書

の喜びがあり賜物がある。このように読書は、自己の再発見であり、強化され拡大されたる自己の発見である。しかし自己を他に、書物の中に見出そうとする者は、まず自己を棄てねばならない。他に自己を投ずることによって他は自己となる。

『それ故に真に読む者は興味と熱情をもって読書する筈である。しかし、冷静に批判的に愛読する。』

赤の他人でないのみか自らに最も近親な真の自己に会うのだとすれば、それに興味と熱情の湧くのは当然である。熱心に打込んで読まねば真の自己はでてこない。他者として冷淡に傍観的に読むことは、物識りを作りはしても人間を作らない。鍛えられて真の自らになろうとするものは熾熱されねばならない。それは尊敬と愛情をもって熱心に読むことである。愛読することである。愛読はしかし、盲目的狂信的溺愛をもって読むことではない。それは冷静が冷淡と異るがごときである。書物への盲信的耽溺は真の愛読ではなくて自己を失うことに外ならない。まず自己を棄て自己を空しうして読むべきであるが、それは書物を他者として冷淡にこれに対立する自己をである。真に愛するものは他者により大きな自己を見出す。同時にしかし真に自らを愛する者は自らに輛うつことを忘れない。書物のすべてが自己ではない。そこから自己をとり出すには批判を必要とする。悉く書を信ずれば書なきにしかずと謂われるように、愛読する者は、愛すれば愛するだけ、同時に益々冷静に批判的な態度を保っている。それは冷淡に他者として読み或は何かけちをつけようとする態度ではなくて、愛すればこその批判心であり、

そこに客観的に展開されているところの自己に対する自己批判の冷静である。

『それ故に又、自らのものにしようなど思わないで、ただひたすらに読むべきである。』

自らのものにすることが真に読むことであるようにいったが、しかし、自らのものにしようと思ってものになるわけのものではない。自己を見出そう見出そうと探し廻っても自己は外にはない。自ら読むもののみが自ら見出す。ただ熱心に、ただひたすらに読み度くて読むときに、知らず識らず自らは深まり拡大している。だから私はいう。「いかに読書すべきか」に苦労する前に、もっと大きな本にぶつかってゆけ。「何のために読書するか」を問う前に、まず読書すべきである。最上の読書法は、読み度くなることであり、実際に読むことである。諸君のひたすら読書されんことを希望する。

いかに書を読むべきか

倉田百三

一、書とは何か

書物は他人の労作であり、贈物である。他人の精神生活の、或は物的の研究の報告である。高くは聖書のように、自分の体験した人間のたましいの深部をあまねく人類に宣伝的に感染させようとしたものから、哲学的の思索、科学的の研究、芸文的の制作、厚生実施上の試験から、近くは旅行記や、現地報告の類に到るまで、悉く他人の心身の労作にならぬものはない。そしてそのような他人の労作の背後には人間共存の意識が横たわっているのであり、著者たちはその共生の意識から書を共存者へと贈ったものである。

従って書を読むとはかような共存感からの他人の贈り物を受けることを意味する。人間共存のシンパシィと、先人の遺産ならびに同時代者の寄与とに対する敬意と感謝の心とをもって書物は読まるべきである。たとい孤独や、呪咀や、非難的の文字の書に対する時にも、これらの著者がこれを公にした以上は、共存者への「訴えの心」が潜在していることを洞察し

て、ゼネラスな態度で、その意を汲みとろうと努むべきである。
人間は宿命的であると説くショウペンハウァーや、万人が万人に対して敵対的であるというホッブスの論の背後には、やはり人間関係のより美しい状態への希求と、そして諷刺の形をとった「訴え」とがあるのである。
その意味において書物とは、人間と人間との心の橋梁であり、人間共働の記念塔である。読書の根本態度が敬虔でなくてはならぬのはこのためである。

二、生、労作そして自他

書物は他人の生、労作の記録、贈り物である。それは共存者のものではあっても、自分のものではない。自分の生、労作は厳として他になければならぬ。書物にあまり依頼し、書物が何ものでも与えてくれ、書物からすべてを学び得ると考えるような没我主義があってはならない。実際研究することは読書することであると考えてるかのように見える思想家や、学者や学生は今日少くないのである。明治以来今日に到るまで、一般的にいって、この傾向は支配的である。ようやく昨今この傾向からの脱却が獲得され初めた位のものである。
これは明治維新以来の欧化趨勢の一般的な時潮の中にあったものであり、自覚的には、思想的・文化的水準の低かった日本の学者や、思想家としては止むを得ない状態でもあったのである。

けれどもいつまでもそうあるべきではなく、人生、思想、文芸、学問というものの本質がそれを許さない。ヨーロッパの誰某はかくいっているという引用の豊富が学や、思想を権威付ける第一のものである習慣は改正されなければならぬのである。

この習慣の背後には、一般に、書物至上主義でない迄も、過度の書物依頼主義が横たわっている。この習慣は信じられぬ程安易への誘惑を導くものであり、もはや独立して思索したり、研究したりする労作と勇猛心と野望とに堪えがたくするものである。他人の書物についてナハデンケンする習慣に蝕ばまれていない独立的な、生気潑剌とした学者や、思想家を見出すことはそう容易ではない。

これは学生時代から書物に対する態度をあまり依属的たらしめず、自己の生と、目と、要請とを抱きつつ、書を読む習慣を養わなければならないのである。

他人の生と労作との成果をただ受容して済まそうとするのは怠惰な態度である。というのは生は労作に危険を賭し、血肉を削ってしかなされないものであって、一冊の傑れた著書を世に贈り得ることは容易ではないからである。

過度の書物依頼主義に蝕ばまれる時は創造的本能を鈍くし、判断力や批判力がラディカルでなくなり、すべての事態にイニシアチブをとって反応する主我的指導性が萎えてゆく傾向がある。

知識の真の源泉は生そのものの直接の体験と観察から生まれるものであることを忘れてはな

らない。「直接にそしてラディカルに」このモットーを青年時代から胸間に掲げていなくてはならぬ。

けれどもいう迄もなく個人がすべてを実地に体験し得るものでもなく、前にいった人間共生と共働の原理により、他人の体験と研究の遺産と寄与とを受けて、自らを富ますことは賢明であり、必要であり、謙遜でもある。

この意味に於ては、書物とは、見ざるを見、味わわざるを味わい、研めざるを知得するためにあるものである。それどころではない、思わざるを思うためにさえもあるものである。すなわち、自己独りでは到底想像できなかったような高い、美しいイデーや、夢が他の天才の書を読むことにより、自分の精神の視野に目ざめてくるのである。

聖書を読むまでと、読後では、人間の霊的道徳性は確かに水準を異にする。プラトンとダンテとを読むと読まないとではその人の理念の世界の登攀の標高が屹度非常に相違するであろう。

高さと美とは一目見たことが致命的である。より高く、美しいものの一触はそれより低く一通りのものでは満足せしめなくなるものである。それ故に青年時代に高く、美しい書物を読まずに逸することは恐るべく、惜しむべきことである。何をおいても、人間性の霊的・美的教養の書物は逸することを恐れて、より高く、より美しきものをと求めて読んで置かなければならないのである。

学術的、社会・経済的、乃至職業専門的の読書にあっても、努めて勤勉にして読むことは、非常に必要である。現実の心得としては、恐らく先に述べたような私の高等的忠言よりも、「読むべし、読むべし」と鞭達すべきかも知れない。読み過ぎることをおもんぱかるのは現代学生の勤勉性を少しく買い被っているかも知れない。

生と観察との独自性を失わない限りは、寸陰を惜しんで読書すべきである。過ぎた多読も読まないより遥かにまさっている。

学生時代に於ては読書しないとは怠惰の別名であるのが普通である。「勉強の虫」といわれることは名誉である場合が多い。我々も学生時代に課業の外、寄宿舎の消燈後にも蠟燭を点して読書したものである。深い、一生涯を支配するような感激的印銘も多くそうした読書から得たのである。西田博士の「善の研究」などもそうして読んだ。とぼとぼと瞬く灯の下で活字を追っていると、窓の外を夜遊びして帰った寮生の連中が、「ローベン（蠟燭の灯で勉強すること）は止せ」、「糞勉強はやめろ」などと怒鳴りながら通ってゆく。その声を聞きつつ何か勝利感に似たものをハッキリと覚えている。

読書は自信感を与えるものである。読書しないでいると内部が空虚になってゆく。読書しない青年には有望な者はいない。天才はたとい課業の読書は几帳面でないまでも、図書館には籠って勉強するものである。

読書に囚われる、囚われないというのはそれ以上の高い立場からの要請であって、勉強して

読書することだけにできないものにとっては、そんな懸念は贅沢の沙汰である。

読書に励む青年は見るからにたのもしそうである。生を愛し、人類を思う青年は読書せずにいられるものではない。孜々として読書している青年を見ると、あの中から世を驚かす未来の天才がでてくるのであろうかと心強い気がする。

「予を秀才というは中らず、よく刻苦すというはあたれり」といった頼山陽の言は彼の素直な告白であったに相違ない。

勉めて書を読み、しかもそれが他人の生と労作からの所産であって、自分のそれは別になければならぬことを自覚し、他人の生にあずかり、その寄与を素直に受けつつ、しかも自らの目をもって人生を眺め、事象を考察することのできるもの、これが理想的の読書青年である。

三、教養の読書と専門職能の読書

読書には人間教養のためのものと、社会に於て分担すべき職能のためのものとある。後者に関してはその種類が多様であるのと、技術智の習得に関するので、特に挙げて争うことができない。ただこの場合に於て一、二の注意を述べるなら、職能に関する読書はその部門の全般にわたる鳥目瞰が欠くべからざるものであるが、その間にも自ずと自分の特に関心し、選ぶ種目への集注的傾向が必要である。何事かを好み、傾くということがそのことへの愛と練達との基礎だからである。「この一技につながる」という決意は人間的にも肝要なものである。又それ

と共に、職能というものは真摯にラディカルに従事してゆけば、必ず人生哲学的な根本問題に接触してくるものである。医者は生と、精神の課題に、弁護士は倫理と社会制度の問題に、軍人は民族と国際協同の問題に接触せずにはいられない。その最も適切の例証は、最近に結成られた「産業技術聯盟」の声明書である。それは純粋に専門的な技術家のみの結社であるが、技術は社会的・政治的問題と関聯することなしには、その技術の任務と成果とを就げることができないと宣言しているのである。

かような事情である故、職能の習得のための読書もまた一般人生哲学的な課題のための読書と結び付かずにはいられないのである。

がここでは特に人間教養のための読書に重点を置いて説述したい。それは職能の何たるを問わず、何人もその人格完成を願い精進しなければならないからである。

私は青年学生が人生の重要問題に関する自らの「問い」をもって読書することを勧めたい。人生に真摯であれば「問い」がない筈はない。そして「問い」こそ自発的に読書への欲求を促すものである。法然はその「問い」の故に比叡山で一切経を三度も閲読したのである。

書物は星の数ほどある。しかしかような問いをもって立ち向う時、これに適切に答え得る書物はそれ程多いものではないのである。寧ろその甚だ小ないのに意外の感を持つであろう。

かくて「問い」は自ずと書物を選ばしめる。自らの「問い」なくして手当り次第に読書することは、その割合いに効果に乏しく、又批判の基準というものが立ち難い。

自ら問いを持ち、その問が真摯にして切実なものであるならば、その問いに対する解答の態度が同様なものである書物を好むものであろう。まず問いを同じくする書物こそ読者にとって良書なのである。かような良書の中で、自分の問いに、深く、強く、又ゆきわたって精細に応えてくれる書物があるならば、それは愛読書となり指導書となるであろう。かような愛読書乃至指導書は一生涯中数える程しかないものである。

たとえば私にとっては、テオドル・リップスの「倫理学の根本問題」はかような指導書の一つであった。かような指導書を見出した時には、これを繰り返し、何度となく熟読し、玩味し、その解答を検討すべきである。手垢に汚れ、ページがほどける程首引きするのこそ指導書である。

広く読書することも必要であるが、指導書を精読することは一層大切である。それは問題の所在と、その難点とを突き止め、これが解決の方法を示唆するものだからである。たとい満足な解決が与えられなくとも、解決の方法を尽し、その難点と及び限界とを良心的に示してくれるならば、我々は深き感謝の念を持たねばならぬ。徹頭徹尾会心の書というものはあるものではない。

私の場合でいえば、リップスの倫理学も私に充全な満足を与えてはくれなかった。却って倫理学というものの限界と、失望とを私に与えた。私はこの書を反復熟読し、それを指導原理として私の実践生活を規範しようとさえもしたが、しかし結局それも破綻して、私は倫理学以上

の、「善悪を横に截る道」を求めて、宗教的方法の探究へと向ったものであった。かような指導書を発見するには、自分の生の問いを抱いて、その問いを同じくし、解決を与えんと擬する書物を探せばいいのである。

下宿を探すにも実際にかような仕方で、要求の条件に適するものを、数多くの中から選んだわけである。

同一人にとっても、問いの所在ならびに解決方途の異るに従って、かような指導書もまた推移してゆく。私にとってはそれはカルル・ヒルティの「眠られぬ夜のため」であった時期もあった。「歎異鈔」であった時期もあった。禅宗の普覚大師書であった時もあった。中村きみ子の「みかぐら歌」であった時さえあるのである。

かような時期においては反復熟読して暗記するばかりに読み味わうべきものである。

一度通読しては二度と手にとらぬ書物のみ書庫に充つることは寂寞である。

自分の職能の専門のための読書以外においては、「物識り」にならんがために濫読することは無用のことである。識見は博きに越したことはないが、そのために汲々と心して読まぬのでは得るところが少ない。浅き「物識り」を私はとらない。

「物識り」と「深き人」とは同一人であることはまれである。

特に実践の問題においては、「知る」とは「行う」ことと不可分である故に、猶更物識りに

はなり難い事情があるのである。

読書とは単なる知性の領域にある事柄ではない。それは情意と、実践との世界に関聯しているのである。特に東洋においては、それはむしろ実践のためにあるものなのである。

しかしながら前にも述べたごとく、良書とは自分の抱く生の問いに応え得る書物のみではなく、生の問いそのものをも提起してくれるものは更に良書ではある。「いかに問うか」ということは素質に属する。天才は常人よりももっと深く、高く、鋭く問い得る人間である。常人が問わずして観過することを天才は問い得るのである。林檎はなぜ地に落ちるか？　これはかつてニュートンが問うまで常人のものではなかった。姦淫したる女を石にて打つに堪うる無垢の人ありや？　イエスがこの問いを提出するまでば誰も自分の良心に対してかく問いえなかった。財の私的所有ならびに商業は倫理的に正しきものなりや？　マルクスが問うてみせるまで、常人はそれ程にも自分らの禍福の根因であるこの問いを問うことができなかった。

天才の書によってわれわれは自分の力では開きえない宇宙と人間性との奥深き扉を覗きうるのである。それは最も深き意味での人間教育である。真と美とモラルの高みへとわれわれを引きあげてくれるのである。かような人間教育をなしうる書物こそ最良の書であり、青年がたましいを傾けて愛読すべきものである。

われわれが読書に意を注がぬことの最も恐ろしいのは、かような人間教育の書に触れる機会を失うからである。仏教の開教偈に、

微妙甚深無上の法は、百千万劫にも遇い難し。われ今見聞して受持するをえたり。願わくは如来の真実義を解かん。

とあるのはこの心である。「遇い難き法」「遇い難き師」という敬虔の心をもっと現代の読書青年は持たねばならぬのである。

街頭狗肉を売るところの知的商人、偽わりの説教師たちを輩出せしめる現代ジャーナリズムに毒されたる青年諸君が、かような敬虔な期待を持つことができないのは同情に価する。しかしながらジャーナリズムは又需要に応えるものでもある。読書子の読書への期待が深く、高いならば、そのような書物に終には遇うことができるであろう。

四、書物無き世界

人間教養の最後は、しかしながら、書物によるものではない。人は知性と、一般に思想とを究竟のものと思ってはならないのである。人間の宇宙との一致、人間存在の最後の立命は知性と思想とを越えた境地である。いと高く美しき思想もそれが思想である限りは、「無くてならぬ究竟唯一」のものではない。書物は究竟者そのものを与ええない。それを仏教では「絶学無為の真道人」と呼ぶのである。学を絶って馳求するところ無き境地である。「マルタよ、マルタよ、汝思い煩いて疲れたり。されど無くてならぬものは唯一つなり」とキリストがいったように、思想そのものは実は「思い煩い」であり、袋路である。果てしなき迷路である。知識階

級とは、この意味においては、永遠の懐疑の階級なのである。立命のためには知性そのものを超克しなくてはならぬ。知性を否定して端的に啓示そのものを受け容れねばならぬ。それは書物ではできない。その意味においては、弁証法的神学者がいうように、聖書でさえも啓示を語った書ではあるが、啓示そのものではないのである。

かように書物と知性から離れて端的に神の啓示につくまでの人間超克の道程に読書があるのである。読書は無意義ではない。啓示を指さす指である。解脱への通路である。書を読んで終に書を離れるのが知識階級の真理探究の順路である。

現代青年学生は盛んに、しかしながら賢明に書を読まねばならぬ。しかしながら最後には、人間教養の仕上げとしての人間完成のためには、一切の書物と思想とを否定せねばならぬものであることを牢記しておくべきものである。

キリストのいうように「嬰児」のごとくになり、法然の説くごとくに、「一文不知の尼入道」となり、趙州のごとくに「無」となる時にのみ、われわれは宇宙と一つに帰し、立命することができるのである。

五、知性か啓示か

今日この国の知識階級の前には知性か啓示かの問題がおかれている。知性主義は主として現在の文化指導者達によって唱えられているものである。そして今のところ青年学生はこの知性

主義を支持し、それが読書の方向を支配しているかにみえる。

われわれはインテリゼンスの階層である読書青年が今その旺盛な知識欲をもって、その知的胃腑を充たし、又思考力を操練しなければならない時、知性の拡充よりもその揚棄をさきに説かんと欲するものではない。しかしながら知性そのものにその階層がある。真理を把握するオルガンとしての知性は、直観となり、啓示となるのでなければ全くはない。今日この国の知的指導者たちの主張するのは主として合理的知性である。「合理的なるもの」を認識するための知性である。しかし生の真理の重要な部分はむしろ非合理的の構造をもち、それを把握するためにはそれに対応する直観的叡智によらねばならぬ。さらに生の真理の最深部は啓示によるのではないからとらえることができぬ。否それはわれわれがとらえるのではなく、とらえられるのである。

ブルンナーやバルムらの主張するごとくに、啓示なくして、理性知のみによって、生の真理をとらえうるという考え方そのものが、すでに生への要請を平浅ならしめているものである。

最近にはこの国の知性主義者たちも、その非を認めて知性の改造をいうようになった。それは悦ぶべき転向である。しかしながらまだ、彼等が知性の否定や、啓示の肯定をいうようになる時機は恐らく遠いであろう。

われわれは生の探求に発足した青年に、永遠の真理の把握と人間完成とを志向せしめようと祈願する時、彼等がいずれはその理性知を揚棄せねばならぬことを注意せざるをえず、又その

読書の選択を合理的知性に対応する方向のみに向けしむることは衷心からの不安を感ずる。

彼等に祖国への愛を植えつけるためには、非合理的なるものへの直観を要し、更に神への帰依を眼ひらかしむるためには、啓示への需要を説かなければならないからである。

人間教育者としてのわれわれの任務を思う時、われわれは彼等純真の若き生命に対し、生と人間性とを最高の可能性において、その存在の神秘性において、提起しておかねばならない命令を感じる。

たとい彼等にとって当面には、そして現実身辺には、合理的知性の操練と、科学知の蓄積とが適当で、かつユースフルであろうとも、彼等の宇宙的存在と、霊的の身分に関しては、彼らが本来合理的平民の子ではなくして、神秘的の神の胤であることを耳に吹込んでおきないのである。なぜならいつかは彼等はその霊的の身分に目ざめねばならないから、そして聖なる国と神の衔との建設に向わねばならないからである。

如何に読書すべきか

三　木　清

一

まず大切なことは読書の習慣を作るということである。他の場合と同じようにここでも習慣が必要である。ひとは単に義務からのみ、或は単に興味からのみ、読書しうるものではない、習慣が実に多くのことをなすのである。そして他のことについてと同じように、読書の習慣も早くから養わねばならぬ。学生の時代に読書の習慣を作らなかった者は恐らく生涯読書の面白さを理解しないで終るであろう。

読書の習慣を養うには閑暇を見出すことに努めなければならぬ。そして人生において閑暇は見出そうとすればどこにでもあるものだ。朝出掛ける前の半時間、夜眠る前の一時間、読書のための時間を作ろうと思えばいつでもできる。現代の生活は確かに忙しくなっている。終日妨げられないで読書した昔の人は羨望に値するであろう。しかしいかに忙しい人も自分の好きなことのためには閑暇を作ることを知っている。読書の時間がないというのは読書しないための

口実に過ぎない。まして学生は世の中へでたものに比して遙かに多くの閑暇をもっている筈だ。そのうえ読書は他の娯楽のように相手を要しないのである。ひとりはひとりで読書の楽しみを味うことができる。いな、東西古今のあらゆるすぐれた人に接することができるというのは読書における大きな悦びでなければならぬ。読書の時間を作るために、無駄に忙しくなっている生活を整理することができたならば、人生はそれだけ豊富になるであろう。読書は心に落着きを与える。そのことだけから考えても、落着きを失っている現代の生活にとって読書の有する意義は大きいであろう。

読書を欲する者は閑暇を見出すことに賢明でなければならないと共に、規則的に読書するということを忘れてはならない。毎日例外なしに、一定の時間に、たとい三十分にしても、読書する習慣を養うことが大切である。かようにして二十年も継続することができれば、そのうちにひとは立派な学者になっているであろう。

読書の習慣は読書のための閑暇を作りだす。読書の時間がないという者は読書の習慣を有しないことを示している。読書の習慣を得た者は読書のうちの全く特別の楽しみが彼を読書から離さないであろう。

他の場合においてと同様、読書にも勇気が必要である。ひとは先ず始めなければならぬ。われわれはつねに読書に好都合な状態にあるのではない。読書に好都合な状態ができてから読書しようと考えるならば、遂に読書しないで終るであろう。ひとたび読書し始めるならば、落着

かない心も落着き、憂いも忘れられ、不運も心にかかることなく、すべて読書に好都合な状態が生ずるであろう。いやいやながら始めて、やがて面白くなってやめられなくなる場合が多い。先ず読書することから読書に適した気分が出てくる。ひとたび読書の習慣を得れば、習慣があらゆる情念を鎮めてくれる。落着いた大学生といわれる者はたいてい読書の習慣を有するものである。

二

読書は一種の技術である。すべての技術には一般的規則があり、これを知っていることが肝要である。読書法についても古来いろいろ書かれてきた。しかし技術は一般的理論の単なる応用に過ぎぬものではない。技術においては一般的理論が主体化されねばならず、主体化されるということは個別化されるということである。これがその技術を身につけることであって、身についていない技術ということができぬ。読書にとって習慣が重要であるというのも、読書が技術であることを意味している。技術は習慣的になることによって身につくのであり、習慣的になっていない技術は技術の意義を有しないであろう。そのことは固より読書にとって一般的規則が存在しないことを意味するのではない、もし何等の一般的規則も存在しないとすれば、それが技術であることもできぬ筈である。

一般的規則の主体化を要求する点において、すでに手工業的生産の技術よりも遥かに大きい

ものがあるであろう。まして読書の如き精神的技術にあっては、一般的規則が各人の気質に従って個別化されることが愈々必要になってくる。めいめいの気質を離れて読書の技術はないといっても好いほどである。読書法は各人において性格的なものである。それ故に各人にとって自分に適した読書法を発明することが最も大切である。読書の技術においてひとはめいめい発明的でなければならぬ。もちろんこの場合においても発明の基礎には一般的規則がある。しかし自分の気質に適した読書法を自分で発明することに成功しない者は、永く、楽しく、また有益に読書することはできないであろう。

ところでかように自分自身の読書法を見出すためには先ず多く読まなければならぬ。多読は濫読と同じでないが、濫読は明かに多読の一つであり、そして多読か濫読から始まるのが普通である。古来読書の法について書いた人は殆どすべて濫読を戒めている。多くの本を濫りに読むことをしないで、一冊の本を繰返して読むようにしなければならぬと教えている。それは、疑いもなく真理がある。けれどもそれは、ちょうど老人が自分の過去のあやまちを振返りながら後に来る者が再び同じあやまちをしないようにと青年に対して与える教訓に似ている。かような教訓には善い意志と正しい智慧とが含まれているであろう。しかしながら老人の教訓を忠実に守るに止まるような青年は、進歩的な、独歩的なところの乏しい青年である。昔から同じ教訓が絶えず繰返されてきたにも拘らず、人類は絶えず同じ誤謬を繰返しているのである。例えば、恋愛の危険については古来幾度となく諭されている。けれども青年はつねにかように危

険な恋愛に身を委ねることをやめないのであって、そのために身を滅す者も絶えないではないか。あやまちを為すことを恐れている者は何も摑むことができぬ。人生は冒険である。恥ずべきことは、誤謬を犯すということよりも寧ろ自分の犯した誤謬から何物をも学び取ることができないということである。努力する限りひとはあやまつ。誤謬は人生にとって飛躍的な発展の契機ともなることができる。それ故に神もしくは自然は、老人の経験に基く多くの確かに有益な教訓が存するにも拘らず、青年が自分自身でつねに再び新たに始めるように仕組んでいるのである。だからといって、もちろん、先に行く者の与える教訓が後に来る者にとって決して無意味であるというのではない。そこに人生の不思議と面白さとがあるのである。読書における濫読も同様の関係にある。濫読を戒めるのは大切なことである。しかしひとは濫読の危険を通じて自分の気質に適した読書法に達することができる。一冊の本を精読せよといわれても、特に自分に必要な一冊が果して何であるかは、多く読んでみなくては分らないではないか。古典を読めといわれても、すでにその古典が東西古今に亙って数多く存在し、しかも新しいものを知っていなくては古典の新しい意味を発見することも不可能であろう。読書は先ず濫読から始まるのが普通である。しかしいつまでも濫読のうちに止まっていることは好くない。真の読書家は殆どみな濫読から始めている。しかし濫読から抜け出すことのできない者は真の読書家になることができぬ。濫読はそれから脱却するための濫読であることによって意味を有するのである。

濫読に止まるなということは多読してはならぬということではない。多読家でないような読書家があるであろうか。寧ろ読書家とは多読家の別名である。諺に、賢者はただ一冊の本の人間を恐れる、という。ひとは多く読まなければならぬ。読書の必要はただ一冊の本の人間にならないために、いい換えれば、一面的な人間にならないために、存在するのである。単に自分自身の時代のみでなく、また過ぎ去った時代について、単に、自分自身の国のみでなく、また世界について、全体の生活と思想について正しい見通しを得るために、多く読まなければならぬ。即ち読書において一般的教養を心掛けることが大切である。読書家とは一般教養のために読書する人のことである。単に自分の専門に関してのみ読書する人は読書家とはいわれぬ。教養とは或る専門の知識を所有することをいうのでなく、却って、教養とはつねに一般的教養を意味している。専門家になるために読書の必要のあることはいうまでもないが、ひとは特に一般的教養のために読書しなければならぬ。そして専門家も一般的教養を有することによって自分の専門が学問の全体の世界において、また社会及び人生にとって、如何なる地位を占め、如何なる意義を有するかに就いて正しい認識を得ることができるのである。専門家も人間としての教養を具え専門家の一面性の弊に陥らないように読書は勧められるのである。そのうえ自分の専門以外の書物から専門家が自己の専門に有益な種々の示唆を与えられる場合も少くないであろう。かくして多読は濫読の意味においては避くべきことであるとしても博読の意味においては必要であるといわねばならぬ。

しかるに濫讀と博讀とが区別されるようになる一つの大切な基準は、その人が專門を有するか否かということである。何等の方向もなく何等の目的もない博讀は濫讀にほかならぬ。一般的な讀書に際してもひとはなお何等か專門というべきものを有しなければならぬ。一般的教養も專門によって生きてくるのであって、專門のない一般的教養はディレッタンティズムにほかならない。一般的教養と專門とは排斥し合うものでなく、むしろ相補わねばならぬものである。ひとは固よりつねに一定の目的をもって讀書するものではない。何か目的がなければ讀書しないというのは讀書における功利主義であって、かような功利主義は讀書にとって有害である。目的のない讀書、いわば讀書の為の讀書というものも大切である。これによってひとは一般的教養に達することができる。一般的教養を得るという目的で一定の計画に従って讀書することは勿論善いことではあるが、しかしかような計画は実行されないのが普通であって、むしろ若い時代から手当り次第に讀んだものの結果が一般的教養になるという場合が多い。一般的教養は目的のない讀書の結果である。けれども当てなしに讀んだものが身に附いて真の教養となるというには他方專門的な讀書が必要である。專門のない讀書は中心のない讀書であって、如何に多く讀んでも何も讀まなかったに等しいことになる。いわゆる讀書家の陥り易い弊はディレッタンティズムである。

三

如何に読むべきかという問題は何を読むべきかという問題と関聯している。ひとは凡ての書物を同じ仕方で読むことはできないし、また同じ仕方で読んではならぬ。博く読むためには書物の種類に従って読み方を変えなければならない。そこに読書の技術があるのである。

何を読むべきかに就いては、もちろん、善いものを読まねばならず、悪いものを読んではならぬということは明らかである。悪い本を読むことはそのこと自身無益であるばかりでなく、悪い本を読んでいるうちには善いものと悪いものとを区別することができなくなってしまうという危険がある。ひとはただ善いものを読むことによって善いものと悪いものとを見分ける眼を養うことができるのであって、その逆ではない。善い本は必ずしも読み易い本ではない。大きな、分厚な、難しい本であるからといって避くべきではなく、その方面で最も善い本を読むように努めなければならぬ。読書においても努力が大切であり、そして努力はつねに報いられるのである。やさしい本、読者に媚びる本ばかりを読んでいては、真の知識も教養も得ることができぬ。一度でその本が全部理解されなくても好い、ともかく善いものにぶつかってゆくことが肝要である。もし一度で理解することができなければ、暫らく間をおいて再び読むようにするが好い。努力して読書する習慣を作ることが大切である。尤も、難しい本、大きな本がつねに善い本であるという風に誤解してはならぬ。それはペダンチクな人の陥る誤解である。善い本は本質的にいってすべて最も理解し易い本であるというのみでなく、初めから困難なしに読める本にも善い本は多いのである。そして読書においてぶつかる困難を克服するためには、

系統的に読むことが大切である。読書も無秩序であっては益がなく順序を追うて読むようにしなければならぬ。先輩の意見を聞くことが有益であるのは何よりもこの点についてである。

一般に何が善い本かといえば、もちろん古典といわれるような書物である。古典は歴史の試練を経て生き残ってきたものであり、すでに価値の定まった本である。古典は決して旧くなることがなく、つねに新しく、つねに若々しいところを有している。古典を読むことによってひとは書物の良否に対する鑑識眼を養うことができるのである。古典を愛しないような真の読書家はなく、古典についての教養を有しないような真の教養人はない。古典はつねに安心して読むことができ、幾度繰り返して読んでもつねに新たな利益を得ることのできるものである。かように価値の定まった本を読むように心掛けねばならぬところから、人々は屢々、古典というほどでなくても既にいくらかの年数を経てなお読まれているような本を読むことにして新刊書をすぐ手に取ることはやめねばならぬという風に忠告している。これは確かに有益な忠告であろ。ただ新刊書ばかり漁るのは好くないことに相違ない。しかしながら読書における尙古主義にもまた限界がある。アカデミズムに対してジャーナリズムには独自の意義があるように新刊書を読むということにもそれ自身の意義があるのである。時代の感覚に触れるために、ただ今日の問題が何処にあるかを知るために、ひとは新刊書に接しなければならぬ。新しい感覚をもち新しい問題をもって対するのでなければ古典も生きてこないであろう。すべて過去が活かされ、伝統が甦ってくるのは現在からである。古典を顧みないというのは固より悪いことである

が、新刊書を恐れるというのも正しくないことである。古典は安心して読むことができる本であるのに対して、新刊書を読むことは一種の冒険である。しかし読書においても冒険するのでなければ得ることがないであろう。古典を偏愛して新刊書を嫌悪する者において読書は単に趣味的になる傾向があり、一種のディレッタンティズムに陥り易い。しかしまた新刊書ばかり漁って古典を顧みない者も他の種類のディレッタンティズムに陥る危険がある。読書にも年齢があり、老人は古典的なものを好み、青年は新しいものを求めるというのが普通である。青年が新刊書を喜ぶということはその知識慾の旺盛を示すものであって排斥すべきことではないが、しかしそこにはまた単なる好奇心の虜になる危険もあるのである。古典のために新刊書を軽蔑することなく、新刊書のために古典を忘却することのないようにするのが肝要である。古典を読むことが大切である如く、ひとはまたつねに原典を読むように心掛けねばならぬ。

解説書とか参考書とかを読むことは固より必要ではあるが、本質的には原典を中心としてこれに頼らねばならぬ。原典はつねに最も信頼し得る書物である。例えばプラトンとかカントとかについて千の文献を読むにしても、原典を読むこと、これを繰り返して読むことをしないならば、深く根本的に学ぶことができぬ。第三者の書いた解説書よりも原典は本質的な意味においては一層理解し易いものである。多数の参考書を読むよりも一冊の原典を繰り返して読むことがそのものを掴むのに結局近道である。そのうえ原典は屢々解説書よりも短いという利益を有している。原典を読むことは読書を単純化するに必要な方法である。それは何よりも読書の

経済化、簡易化を意味している。前に述べた規則的に読むという必要は原典の場合において特に大きいであろう。本はひとに読んで貰うのでなくて自分自身で読まねばならぬとすれば、この自分自身で読むという必要は原典の場合においては絶対的である。しかるに世の中には文学上の作品についてさえ、それを自分で読まないで、他人の書いた解説や批評ばかりを読んでいる人が少くないのである。ひとはつねに源泉に汲まねばならぬ。源泉はつねに新しく、豊富である。原典を読むことによって最も多く自分自身の考えを得ることもできるのである。

原典を読むことが必要であるように、できるだけ原書を読むようにすることが好い。どのような飜訳よりも原書がすぐれていることは確かである。原書の有する微妙な味、繊細な感覚は飜訳によって伝えられることが不可能である。そのうえ飜訳はすでに解釈であるということを知らねばならぬ。ひとは原典で読む困難を避けてはならない。飜訳で読むのが原書で読むのよりも速いということはあるにしても、ゆっくり読むことはそれだけ自分で考えながら読む余裕を与えることにもなるのであり、そしてこれは大切なことである。原書を読むには語学の力がなければならないが、その語学というものも決して手段に過ぎないようなものではなく、却って語学そのものが一つの重要な教養である。一つの国語はその民族の精神の現われであり、その思想の蓄積であるということができる。勿論あらゆるものを原語で読むということは不可能であり、またあらゆる場合に原語で読まねばならぬというわけではない。原語で読むことができないという理由でそれを読まないというのは悪い口実である。また飜訳で間に合わせて十分

な書物も多い。しかし重要な本はできるだけ原書で読むようにしなければならぬ。翻訳の方が簡単であるからというので原書で読むことを避けようとするのは読書における便宜主義であって、便宜主義は読書においても有害である。

善い本を読まねばならぬことは明かであるにしても、何が善い本であるかを見分けることは容易でない。古典といわれるものは善い本であるに相違ないが、その古典も多数であって選択が必要であり、殊に新刊書の場合においては選択は愈々困難である。自分ですべての本に当ってみることは不可能であるとすれば、読書の指針として他人の挙げた目録とか新刊紹介とかに頼らねばならず、すでに定評のあるものを読むようにしなければならぬ。しかしながら定評とか他人の意見とかにばかり頼るということは危険である。読書においてもひとは自主的でなければならず、発見的であることが大切である。各人は自分に適した読書法を見出さねばならぬように自分に適した本を見出すことに努めなければならぬ。単に自分に媚びるというのでなくて、自分に役立ち、自分を高めてくれるような本を読むようにしなければならぬ。各々の人間にに個性があるのであるから、一人の人間に適する本がすべて他の人間にも適するというわけではない。読書においても個性は尊重されねばならぬ。一般に善い本といわれるものの中でも自分に適したものとそうでないものとが自分の個性によって決ってくる。読書においてひとは何よりも特に古典の中から自分に適したものを発見するように努力しなければならぬ。それによって自分の思想というものをも作られてくるのであり、愛読書といわれるものも定まってく

るのである。愛読書を有しない人は思想的に信用のおけない人であるとさえいうことができるであろう。自分に適した善い本が決ってくれば読書もおのずから系統立ってくるのであって、即ちそれと同じ系統に属する書物を、或いは過去に遡り或いは現代に降って、読むようにすれば好い。固より他の系統のものを読まなくても好いというわけではなく、却つて偏狭にならないために博く読むことはつねに必要なことである。けれども無系統な博読は濫読に過ぎない。

四

善いものを読むということと共に正しく読むということが大切である。正しく読まなければ善いものの価値も分らないであろう。正しく読むということは何よりも自分自身で読むということである。マルクスアウレリウスは彼の師について感謝をもって書いている、「ルスティクスは私に、私の読むものを精密に読むこと、皮相な知識で満足しないこと、また軽薄な批判者がいうことに直ちに同意しないことを教えた」。正しく読むことは自分の見識に従って読むことである。

正しく読もうというには先ずその本を自分で所有するようにしなければならぬ。借りた本や図書館の本からひとは何等根本的なものを学ぶことができぬ。高価な大部の全集とか辞典のようなものは図書館によるのほかないにしても、図書館は普通はただ一寸見たいもの、その時の調べ物にだけ必要なもの、多数の専門文献のために利用されるのであって、一般的教養に欠

くことのできぬもの、専門書にしても基礎的なものはなるべく自分で所有するようにするが好い。しかしただ手当り次第に本を買うことは避けねばならず、本を買うにも研究が必要であり、自分の個性に基いた選択が必要である。その人の文庫を見れば、その人がどのような人であるかが分る。ただ沢山持っているというだけでは何にもならぬ。自分に役立つ本を揃えることが必要である。ただ善い本を揃えるというのでも足りない、すべての善い本が自分に適した本であるのではない。各人は自分に適した読書法を見出さねばならぬように、自分自身の個性のある文庫を備えるようにしなければならぬ。何を読むべきかについて、ひとは本に対するある感覚を養うことが大切である。古本屋は自分の立場からであるにしても自分の決して読まない本に対して特殊な価値の感覚を有している。一つの本を見たとき読書家にも何かそれに類似の感覚がなければならぬ、さもなければ彼は読書において真に発見的であることができぬ。しかも本に対するこの感覚は本に親しむことによって得られるのである。

正しく読むためには緩やかに読まねばならぬ。決して急いではならない。その本から学ぶためにも、その本を批評するためにも、その本を楽しむためにも、緩やかに読むことが大切である。しかるに緩やかに読むということは今日の人には次第に稀な習慣である。生活が忙しくなり、書物の出版が多くなった今日においては、新聞や雑誌、映画やラジオなどの影響が深くなった今日においては、その習慣を得ることは困難になっている。自分で写本して読んだ昔の人には緩やかに読むという善い習慣があった。しかし今日においてもこの習慣を養うことは必要

であり、時に学生の時代に努力されねばならぬ。勿論すべての本を緩やかに読まねばならぬというのではない。ある本はむしろ走り読みするのが好く、またある本はその序文だけ読めば済み、更にある本はその存在を知っているだけで十分である。そのような本が全く不必要な本であるというのでもない。すべての書物を同じ調子で読もうとすることは間違っている。しかしさまざまな本をただ走り読みしたり、拾い読みしたりするのでは根本的な知識も教養も得ることができぬ。自分の身につけようとする書物は緩やかに、どこまでも緩やかに、そして初めから終りまで読まなければならぬ。途中で気が変ることは好くない。最後まで読むことによって最初に書いてあったことの意味も真に理解することができるのである。他の仕事においてと同様、一冊の本にかじりついて読み通すということは読書の能率をあげる所以である。

緩やかに読むということはその真の意味においては繰り返して読むということである。ぜひ読まねばならぬ本は繰り返して読まなければならぬ。繰り返して読むということは老人の楽しみであるといわれるであろう。老人は新刊書を好まないで、昔読んだ本を繰り返して読むことを好むのが普通である。しかし繰り返して読むことは青年にとってもまた楽しみであり、有益でなければならない。繰り返して読むことは先ずよく理解するために必要である。左右を比較し、前後を関係づけることによってよく理解することができる。よく理解するためには精読しなければならないのであって、精読は古来つねに読書の規則とされている。よく理解するためには全体を知っていなければならず、すべての部分は全体に関係づけられ、全部から理解され

ることによって、初めて真に理解されるのであり、そのためには繰り返して読むことが必要である。ひとは初めから全体を予想しながら読んでゆくのであるが、全体は読み終ったとき初めて現実的になるのであって、かくして翻って再び読み返すことが要求されるのである。尤もわれわれは必ずしもつねに直ぐ繰り返して読まねばならぬわけではない。読んでみて結局分らなかったものはそのままにしておいて、暫らく時を経て自分の知識や思索が進んだ時に再び取り出して読むようにするのも好い。以前に読んだことのある本を繰り返して読んでみるということは楽しいものである。その当時の記憶が甦ってくるということもあろうし、また思わぬ誤解をしていたことを見出すということもあろうし、又新しい発見をするということもあるであろう。繰り返して読むということの楽しみは、その本と友達になるということの楽しみである。緩やかに読むことは大切であるが、最初から緩やかに読まねばならぬものは古典のように価値の定まった本であって、新しい一冊を手にした場合にはむしろ最初は一度速く読んでみてその内容の大体を摑み、それから再び繰り返して今度は緩やかに読むようにするのも好い。緩やかに読むということは本質的には繰り返して読むということである。

繰り返して読むことは細部を味うために必要である。一冊の本の全体の意味を摑むだけならば緩やかに読む必要もないのであって、繰り返して緩やかに読むことは寧ろその部分部分を味って読むために要求されることである。とりわけ古典的な書物には一見無駄に思われるようなところのあるものである。全く無駄のないような書物はない。一見無駄に思われるような部分

から、ひとは思い掛けぬ真理を発見するに至ることがある。今日の多くの著述家とは違って昔の人は彼自身極めて緩やかに、自然に書いたということを考えねばならぬ。彼等の書物を味うためにわれわれもまた緩やかに読まねばならず、繰り返して細部に互って吟味しつつ読まねばならぬ。著者がさほど重要性をおかなかったところに読者が自分自身にとって重要な意味を発見するということは可能である。繰り返して読むことは読書において発見的であるために特に要求されている。

かように発見的であるということは読書において何よりも大切である。もちろん著者の真意を理解するということはあらゆる場合に必要なことであり、それにはできるだけ客観的に読まなければならず、そしてそれには繰り返して読むということが必要な方法である。自分の考えで勝手に読むのは読まないのと同じである。ひとはそれから何物かを学ぼうという態度で書物に対しなければならぬ。理解は批評の前提として必要である。かようにして客観的に読むということは大切であるが、しかし書物に対しては単に受動的であることは好くない。発見的に読むということが最も重要なことである。発見的に読むには自分自身に何か問題をもって書物に対しなければならぬ。そして読書に際しても自分で絶えず考えながら読むようにしなければならぬ。読書はその場合著者と自分との間の対話になる。この対話のうちに読書の真の楽しみが見出されねばならぬ。自分で考えることをしないで著者に代って考えて貰うために読書するというのは好くない。もとより自分自身だけで何でも考えることができるものであるならば、読

のものでなければならず、むしろ読書そのものに思索が結び附かなければならない。悉く書を信ずれば書なきに如かずと古人もいった。批評的に読むということは自分で思索しながら読むということであり、自分で思索しながら読むということは単に批判的に読むということにのみ止まらないで、発見的に読むということでなければならぬ。しかも発見的に読むためには既にいったように自分自身の読書法を身につけることが必要である。そしてこの読書法そのものも自分が要求をもって読書することによっておのずから発見されるものである。

如何に読書すべきか

木村健康

知的活動をその生命とする学生生活、一般に知識階級の生活において、読書が最も中心的な地位を占むる活動であることは、何人も即座に承認するところであろう。知的活動はもとより読書に限られるものではなく、本質的には創造を意味する思索活動や、その成果を表現しようとする文章言論の活動をも含み、そうしてある意味においては、これら諸活動こそ読書よりもはるかに重要である。しかし多くの場合思索の機縁を与え内容を供するものが読書であり、文章や言論は思索の結晶たる思想の表現にほかならぬことを思えば、読書こそわれわれ知識人の生活の核心をなすといっても敢えて過言ではないのである。知識人にとっては、読書は事実上彼の生活の本質として感ぜられ、一切の知識に信頼を失っている懐疑主義者でさえも、書籍に対する信頼はこれを捨てようとしない。永久に書を手にしえないような生活は、これを想像するだに、われわれを竦然たらしめるに足るであろう。「哲学も法学も医学も、あらずもがなの神学も、底の底まで研究し」て、これらに全く望みを失ったファウスト博士が、この泥沼から這い上り、「広い世界へ出て行く」ための道案内として、「ノストラダムスが自筆で書いて深

秘を伝えた本」に頼らざるをえなかったのは、われわれにとってまことに興味ある事実である。
読書はこれほどにわれわれの生活に浸透しており、これと融合している。それ故、読書の目的を意識し、これを十分に有意義に生かしてゆこうとする努力は、すなわちわれわれの生活を正しく生きてゆくための欠くべからざる条件である。しかるに、われわれの洞察が自己自身に対して最も曇らされがちであると同じように、生活の中心的地位を占めながらしかも余りにわれわれに日常的な読書について、明確にその意義を把握し、適切にこれを営みつづけることは決して容易ではないのである。自己の読書生活に聊か反省の眼をめぐらすとき、多くの場合それが無目的に一時の興味に導かれそこはかとなく続けられているのを識って呆然たる人も、思うに少くはないであろう。しかし、正しいゆたかな生活を希求するひとである限り、このままの状態に自己を放置すべきではない。読書についての意識を欠くことは、われわれの生活についての自己反省の欠如を意味するからである。
読書に関する問題に思いがおよぶとき、われわれの前には一連の問題がつぎつぎに提出されて来る。根本的なのは、読書の意義が何であり、その目的は奈辺にあるかという問いであり、次いでいかにして、いかなる態度と方法とをもって読書すべきかが考察されねばならず、これと同時にいかなる書を読むべきかが明かにされねばならぬ。私がここに考えようとするのは、「いかに読書すべきか」という問題であるが、かかる問題はこれを一般的に提起することが許されるであろうか。読書の意義、読書の態度方法、書籍の選択、この三つの問題は、一応これ

を切離して考察することが許されるとしても、もともと本質的には同一の問題であるのである。読書の意義の何であるかを識らずして読書の態度を云々するのは無意味であり、読まるべき書の何であるかに従って読書の方法もおのずから異らざるをえないであろう。そうして読書の人生的意義に関しては、恐らく世に存在する相異る世界観の数だけの解答が提出されるかも知れぬ。しかし、事実上多数の世界観が相対立し相争っているにせよ、あるべき世界観は唯一つであるから、第一の問題たる読書の意義については一義的な解決が可能でなければならぬ。しかるにこれが解決されたとしても、何を読むべきかは読書を志す各個人の人間的生長段階の異るに従ってさまざまであるべきであり、いかに読書すべきかという当面の課題はまた、一方、読書の意義、読書の対象いかんの解答に制約されるばかりでなく、他方、個々人の立つ知的生長段階およびかれの社会的生理的条件を顧慮して決せらるべき問題であろう。かく考えるならば、いかに読書すべきかという問いは、一般的問題としては原理的に不可能である。これは個々人が自己の立つ知的生長の段階、自己に天与の精神的生理的諸能力、自己を囲繞する社会的環境等を、すなわち「自己自身」を反省しつつ、自ら身をもって解決を求むべき問題である。そこには苦しい失敗と摸索との連続が不可避ではあろう。しかし真に読書の意義読書の方法を見出すためには、この荊棘の道を自ら拓くのほかはないのである。

それにも拘わらず、私はここに「いかに読書すべきか」について語ろうとする。その際何人にも首肯しうべき規則や教訓を説きえないのは当然であって、この点は私の最もよく意識する

ところである。それ故、私の語りうるのは、私の拙い読書に関する経験——主として辛く苦しい経験であり、私が私自身に対して提起する要望であるのほかはない。そうしてこれらのものは私自身の人生的体験の稚さをそのまま反映しているはずであり、その意味においては練達の士の憫笑を買うにすぎぬものたることを、私は覚悟すべきであろう。かような事情に抗してもなお私が読書を論ずるのは、たとえ私の体験は未熟であり私の思索は幼稚であろうとも、なお自ら正しい読書のために苦闘しつつある若人のあるものにとって、私の語るところが何等かの示唆を与えるかも知れぬからである。それはある人に対しては少くとも私の犯したと同じ過誤を妨ぐに役立つであろう。もし何か積極的に読書の態度について示唆を得るひとがあったとすれば、私にとっては望外の喜びである。真剣に思索し読書していこうとする若人たち、それが私のこの一文を草するにあたってたよりとする唯一の人々である。

さて読書に関する一聯の問題すなわち、読書の意義、読書の態度方法、読書の対象のすべてについて詳細に私の考えを述べることは、現在の課題ではないが、しかし当面の問題たる「いかに読書すべきか」という問は、さきにも述べたように読書の意義を離れては成立しえないから、ここに端的に私が読書の意義をいかに考えるかを述べて、考察の出発点としたい。読書は、われわれの人格が益々強靱に益々豊かに生育し、そうして端麗な調和の美を実現するに至るための一つの道であり、真の意味における教養の過程である。読書を心の糧とよぶのは確かに事態の核心に触れてはいるが、この場合われわれは単に読書がひとの知的な内容を豊富にし情意

的なゆたかさを実現する点にのみ着目すべきではなく、むしろ知的能力の訓練、情意的感受性の陶冶に注意すべきであろう。しかしいうまでもなく読書は教養の唯一の道ではない。自然や美術のうちに沈潜すること、創作や作曲に専念することはもとより、交友、談話、その他日常の多くの出来事に至るまで一として教養に通ぜざるはない。就中暴虐な運命の征矢を心に堪え、あるいは海なす艱難に戦いを挑みこれを克服しつつ自己の生活を開拓するがごときは、最も高き意味における教養の過程でなければならぬ。これら多くのことがらのうちで読書はその本質上おのずから特質を具えている。そうしてこの特質は読書がただ一人「書物」に対座して営まれる活動であることに由来しているのである。それ故読書の真諦の洞察は、「書物」の意義を闡明したのちにはじめて可能となるであろう。

「書物」とは一体何であろうか。これに対しては殆どすべての人がそれぞれの立場から何等かの解答をあたえるであろう。たとえば「書物は文字・図書などに依って思想を貯蔵し供給するための要具である」というのは恒藤恭氏の答であるが、われわれも全くこれに同意することができよう。まことに書物は「王侯の宝庫」である。そこには知的な、情意的な、その他あらゆる精神的内容が奥深く秘蔵されており、読書はこの宝庫に立ち入ろうとする活動にほかならないのである。宝庫に秘められているものは、あるいは宇宙と人生とに関する悠久の真理であり、あるいは情意を深奥より揺り動かす詩歌であり、さらにまた有限者の頭を低く垂れしめる神の啓示である。人々は、そこに与えられたものをひたすら自己の宝となそうと努力する、真

理を蚕のように貪ろうとする真理愛、自然や人生の美しさ悲しさにわれを忘れて融合する三昧の境、これらが読書を通じて読書のうちに到達せられることは、多くのひとの体験するところであろう。この意味においては、読書とは何よりも先立って「享受」である。宝庫に見出される数々の神的内容を、ひたすら自己のものとする努力、自己自身を真理や芸術的興奮で充たそうとする貪欲、これが読書においてまず注意されねばならぬことがらである。極めて若い人たちの読書を眺めるとき、読書は享受であるという規定は甚だよく妥当する。彼等は「宝」が金銀であるか宝石であるか、貴い美術品であるか、それとも俗悪な金ぴかの工芸品であるかを顧慮せず、ただ享受そのことに熱心であるように見える。そうしてこの態度は必ずしも年少の読書家に限られるわけではなく、往々人生の経験を豊に積んでいるはずの人たちの間にも見出されるところである。

もとよりこのような「享受」は、教養の過程において極めて重要な意義を有する。「享受」なき思弁が独断にほかならず、自らの十全なる生長を図る所以でないことについて異論を唱うるひとは多くはない。しかし、読書はこのような「享受」に尽きるものであろうか。もしそれが「享受」以上でも以下でもないとすれば、読書はわれわれにとっていかなる意義を有し得るであろうか。「享受」という態度においては、われわれは全く消極的受動的であり、自我の活動は極小に限られる。われわれはそこに見出すものをそのまま受け容れるにすぎず、そこに見出されるものが何であろうと、またそれらのものの間に矛盾や不調和があろうと、毫も介意し

ない。カントのいわゆる「すべてについて何かを知ってはいるが、全体としては何も知らぬ」人たちとは、このように与えられたものを雑然と受け容れるのみで、それらの統一を考えない輩の、謂であろう。「受容」に終始する主体は、真の意味の主体ではなく、却って雑炊の容器であり、まさに客体にほかならぬ。フィヒテは「独逸国民に告ぐ」の中で所謂詰込み主義教育の弊が学生を主体としてではなく専ら客体として取扱う点にあると指摘したが、この非難は読書と享受とを同一視する人たちにそのままあて嵌まるであろう。ある一つの問題について自己の意見を問われたとき、A氏によればこうであり、B氏の意見に従えばこうである、としか答えることができないのは、決して名誉のことではない。

読書は単なる「受容」ではない。かりに「受容」であるとしても、全く消極的受動的な「受容」ではなく、むしろ理解的享受である。いま知的内容の書物を読む場合をとって考えれば、そこには多くの知識が統一ある体系においてあたえられている。これを真に理解し把握するためには、自我は決して受動的態度のみに止ってはならない。自我は書物の著者が体系的知識を生み出した思索の活動を、自己自ら著者とともに再経験しなければならぬ。著者の思索のあとを辿って、その体系的知識の内容を自らの活動により「再生産」しなければならぬ。このときはじめてわれわれは著者の思想を理解したといいうるのである。それ故理解された思想内容は、単に受け容れられたものではなく自ら生み出した思想である。それは著者の思想であるとともに、また読者自らの思想でもあるのである。それ故正しい読書にあたっては、自我は受動的ど

ころか、却って活動的であり生産的である。しかし、この活動によって著者の思想が何等の障碍なく、円滑に再生産されると考えるのは大いなる誤りであろう。思想の糸を辿るうち、ある場合にはいかにしても自我自身の中より著者と同じ内容を生み出しえない点に逢着するかも知れない。このような点はその書物の「疑問」となってわれわれのうちに残留する。そうして著者の思想的生長の段階と読者のそれとが相距ること甚しいほど、「疑問」の数は多い。さらに思想の再生産過程のある点では、読者は一つの内容を生み出すことは出来るが、それがいかにしても著者の内容と合致しないことがあるであろう。あらゆる方向より検討するも、なお著者読者の思想内容が合致しないとき、そこに著者に対する読者の「批判」が提起されることとなる。要するに、読書は単なる受容ではなく、むしろ生産の活動であって、思想内容の理解のほかに必ず疑問と批判とを伴う。読書が生産である限り、それは創造の喜びを与えるはずであり、またそれが活動として異常の緊張と努力とを要求するかぎり、ある種の苦痛は免れがたい。読書に際して喜びと苦しみとを感ずることなき人たちは、いまだ読書の真諦に達したということができない。

さてこのようにして読書は必ず後に疑問と批判とを残留せしめるが、読者にしてもし真に教養を希求するひとであるならば、彼はこれらの疑問や批判をそのまま放置するに堪えないはずである。彼は疑問を解決し、批判を確かめるために、一方彼自身の活潑な思索活動をはじめるとともに、同様の主題を取扱う他の書を探索してこのうちに自己の求むるものを見出そうとす

る。そこにもまた喜びと苦しみの生産活動がはじまり、一つの書物の読破は必然に他の書物の探求へと展開するであろう。しかるに読書がこの段階に達するならば、それは胎動的な享受の域を遙に脱して、読書は真理探究の努力そのものにほかならぬに至る。受容に比して活動が愈愈重要となる。自我の自発的な活動が極大に達するとき、われわれは読書からの受容に期待することが益々減少する。そこでは自我の活動は、自らのうちより自らの問題を自らに定立することから始まるのである。この自らの問題の解決のためには、あらゆる思索を凝らすことはいうまでもないが、恐らくは、問題は自己のみの力に頼るにはあまりにも困難であるであろう。このとき自我は示唆を求めて、書物に就き、そこに藏される宝を自己の手に収めて、自らの問題解決の資とするであろう。この段階に至るならば、読書は雑然たる内容の受容どころではなく、王侯の宝庫の秘める宝は、それ自体意義があるのではなくて、むしろ、自我の真理探究活動の質料となる。これらの質料はそのまま受け容れられず、自我の批判的眼光の中を濾過して摂取される。すなわち質料たる宝は統一される。そうしてこの統一の原理は自我そのものにほかならないのである。

かくいうならば、読書の価値を余りにも貶下するとの譏に逢着するかも知れない。何故なら書物はすでに高貴の宝を秘藏する宝庫ではなくして、たかだか自我活動の質料を供するにすぎぬからである。しかし事実はそうではない、書物に盛られた思想内容が一切の主体的活動と絶縁されてそこにあり、しかもそれ自体価値を有すると考えるのは、大きな誤解であると思う。

書物にもられた思想内容は、主体的活動に把握されそれぞれに担われることによって、はじめて真理たり得る。もとより理解され把握された内容は、原著者の思想そのままではない。主体の把握には必然に思想の批判と変容とが伴うからである。しかしかかる変容を受けつつそれはなお読者の思想のうちに保持せられる。たとえもとの思想が読書によって全面的に否定されたとしても、それはなお真理探究の道を開拓したものとして生きているのである。かくして原著者の思想は読者の思想のうちに止揚され、後者はまた次の読者の思想の契機となってゆく。真理の探究、文化の発展はかくのごとくにして世代より世代へと伝承されるのである。それ故、書物を自我活動の質料として見ることは、書物従って読書の価値を貶下するどころではなく、却ってそれを人類文化の発展、真理闡明の過程に即してみることである。この過程において書物が重要不可欠の契機をなすことに想到するとき、読書のわれわれに対する意義はいかに高く評価するもなお十分ではないであろう。

以上は読書の根本的態度が、単なる享受ではなく活潑な自我の生産活動でなければならぬ所以を論じたのであるが、読書はなお他の側面からしてわれわれの教養と不可離の関係に立っている。教養とは何か、この問題に十分な解答を与えることは至難であって、到底私のここでよくなしうるところではないが、少くとも次のような観方は教養の一つの側面を捉えていると思う。すなわち教養は、一つの心理的生長過程としてみるならば、自我の訓練である。われわれの知的情意的能力を訓練陶冶し、知的な判断力推理力を正確強靱に鍛え、情意的な力をあくま

で強く深く繊細に発達せしめること、これが教養である。そうであるとすれば、正しく理解された読書が、有力な教養の道たることは、何人にも明かであろう。学問的に読書はくりかえし述べたように単なる受容ではなく、自発的な生産であり、喜びと苦しみとを伴う修養であるとすれば、読書を真剣に営みつづけることは、すなわちわれわれの知的能力を練磨することにほかならぬ筈である。文芸的読書についても恐らくは同様のことが妥当するであろう。一つの詩、一つの小説も、われわれが読書を重ね、われわれの鑑賞力が無限に発達するに伴い、素朴な読者に対しては歌わぬ歌を謡い、語らざる物語を語るであろう。しかし読書を受容的にのみ解し、敢て自ら思索し情感しようとしない人々は、読書からしてかくのごとき訓練を期待することはできない。

さて読書の根本的態度をかくのごときものとして、次に具体的にいかに読書すべきかについて考えたい。まず読まるべき書は、いかなる分野に属するにせよ、古典として推称されるものでなければならぬ。ここに古典というのは必ずしも旧き書を指すのではなく、人類文化の発展に大いなる役割を演じ、しかも現在なお生きている書物をいうのである。いかなる書が自己の欲求を充すべき古典であるかを知ろうとする人々は、定評ある学説史の書を開くがよい。一層適切なのは、自分の信頼する師友先輩の意見に聴くことである。いまかりに学問の領域に属する一つの書、たとえばカントの『実践理性批判』の研究をはじめるとして考えを進めてゆこう。まずわれわれは適当の哲学史を繙いて、カントの哲学が歴史上いかなる地位を占めるか、カン

トに深い影響を与えた思想家たちは誰であるかについて一応の知識をもつことが望ましい。何故ならさきに述べたことから推知されるように、カントのような大哲人の思想であっても、突如としてカント自らの力のみで生み出されたものでなく、その中には——厳密にいえば——太古より集積された人類の思想が収約的に包含されているからである。そうしてこの学説史的知識の必要は、われわれが実際実践理性批判を開くや否や痛切に感ぜられるであろう。何故なら著者自らがこの書の中でルソーやライプニッツ、ウォルフなどに屢々関説しているから、これらについて若干の予備知識なくしては前進することが困難である。学説史のほかに必要なのは著者カントの伝記と解説書とである。伝記は自叙伝であれば一層よい——著者自らの育った思想的社会的環境、その性格、交友、彼の思索を指導したモティーフなどを、論理の形においてでなく物語りの形で知らしめるものであって、一方われわれ自身の人間的成長の資として一般に重要かつ興味あるばかりでなく、他方われわれの意味に解せられた読書のためには不可欠である。何故なら、われわれの考えたところによれば、読書とは著者の思索のあとを読書自らが辿りつつ、著者の思想を再生産することであったから、著者の「人」を知り親むことは読書の本質的事項に属する。また解説書は実践理性批判ばかりでなく、純粋理性批判、判断力批判等の重要文献を平易に説明していることが多いから、一方ではこれから自分の研究しようとする思想にあらかじめ親しさを加えるという意味があり、他方カントの全思想体系を統一的に展望しうるという効果がある。この思想の全体的展望は、一部分の思想の理解のために不可欠の重要

性を有する。ヘーゲルは「真理は全体である」といったが、まことにその言のように、ある人の思想は全体として有機的統一を有するものであって、その一部分を全体と切り離して考察するのは、ただにその部分を正しく理解する所以でないばかりでなく、著書に対する甚しい非礼である。世上往々にしてある書物に含まれる片言隻語を捉え来り、もって著書の思想全体に対して云々するものを見るが、本末顚倒の極みといわざるをえない。

思想史、伝記、解説書を一応読破してのち、われわれは愈々当面の書実践理性批判に入る。まず序文は、一般にその書の成立の由来、他の著書との関係、ときとして学説史的説明が述べられていることが多いから、丹念に読まれねばならぬ。さて本文に入る。一歩一歩注意を集中し、自ら思索しつつ頁を繰ってゆく。だが、解説書によって一応著者の思想を理解したと自負している読者は、全く期待に反して、前進が極めて困難なことを発見するであろう。過度の緊張から来る疲労と読書速度の緩慢に対する焦慮とからして、彼は著しい不快を感ずる。疑問は次々にあらわれ、山積する。しかもその疑問は読者の全能力を発揮しても解くよしもないものが多いために、そのまま疑問として残して前進するほかはないであろう。ところで前進すればするほど疑問はあらわれ、しかもそれが前に放置した疑問と関聯しているらしく思われる。これらの疑問を残しつつ前進するほかはないとは、いかにしても不快である。このようにして、全書の三分の一位まで読みつづけるとき、遂に不快と苦痛に堪えずして書物を放擲する読者も少くはないであろう。そうしてある者は自己の能力そのものに疑を抱いて失望の深淵に落ち、

他のものは極めて呑気に、いずれそのうちには分るようになると考えて自ら慰める。しかし、この点が重大なのである。いかに疑問が山積しようとも、そうしてそれを疑問として放置せざるをえないことがいかに不快であろうとも、われわれは忍耐せねばならぬ。そうして自己の応分の緊張をもってしてもなお解決しえない疑問は、これを心に留めつつ、ともかく全巻を通読し終ることが重要である。もとよりそれによって読者がその書物を理解したということは絶対にできないけれども、ともかく通読した後には、疑問の点、理解しえて会心の笑を漏らした個所、そうして数少くはあっても若干の批判が残るであろう。そればかりではない、その書物の思想全体の相貌——もとより朦朧たるものではあろう——が印象づけられることは疑いない。そうして思想全体の表象が各部分を理解する上にいかに不可欠であるかは、さきにも述べたとおりである。

かくして一応の通読を終えたのち、ここで満足したり、断念したりするひとがありとすれば愚かさの限りである。しかし疑問の山積にも拘わらず、不快に堪えて一応の通読を終るほどの読者は、恐らくここに停止せずして再びその書物を取上げるであろう。この度は前回にもまして注意深く、たとえば „und" や „oder" というような些末なことばをも忽かせにせず、自己の全知能を発揮して読まれねばならぬ。すでに一応思想全体を通観した今では、前回にのこされた疑問は次ぎ次ぎに氷解される。この際信頼すべき解説書を座右にそなえてつねにこれに聴くこと、重要な個所、感銘深い文字にアンダーラインを附すことなどは有効である。ノート

を具えて要項を書き残しつつ進むのは一層推賞さるべきである。それは読者が自己の力で再生産した著者の思想内容を文章にあらわすことであって、一般に文章言語による思想の言表は、思想内容の把握を一層正確確実にするからである。さらにこの際志を同じくする数人の友人と読書会を組織するならば、そこに見出される刺戟や示唆が相互の思惟を一層活潑に豊富にするであろう。かようにして再度の繙読はたとえ前回よりは進歩のあとがみえるとはいえ、依然として困難であり忍耐と努力とを要求する。しかし中道に挫折することの愚かさはいうをまたない。再度の努力が最後の一行まで十分の緊張をもって続けられても、疑問はなお多く残存するであろう。われわれはここで「真理の勇」を振って第三回目の繙読に着手するか、あるいは同じ著者の他の著作にむかうか、あるいはまた他の著者の著書に就くか、何れにしても努力を弛めるべきではない。これらのうち何れの道が選ばるべきかはその場合の事情が決定するが、師友先輩の助言が大いに役立つことはいうまでもない。かくのごとく読書は一つの書から他の書へ、一人の著者から他の著者へ、読者の内面的生長の必然性によって展開されねばならぬ。この間読者の知的情意的能力は不知不識のうちに訓練され、読者の人間的生長は見るべきものがあろう。その結果到達されるべき創造的思索の段階は、また人間教養の極点でなければならぬ。

以上は知的内容の書についていかに読書すべきかを考えたのであるが、歴史や文芸の書は多少事情を異にするとはいえ、大体において同様に考えてよかろうと思う。すなわち文芸の書で

は、われわれがそれを繰返し広く味わうに従って、われわれの情感は一層美しく繊細となるであろう。また歴史の書は、そこに単なる過去の事実の記録を見ず、その背後にある精神的物質的な歴史形成の力を見出そうとし、あるいはまた歴史的偉人の行為の奥底にまで眼光を徹しようとする読者には、深い世界観や人間知を供するに相違ない。しかし皮相にパスタイムとして文芸に親み、試験の成績に気兼ねしつつ歴史を暗記するものには、これは何事をも教えない。これらの読書についても、真摯と忍耐と努力とが必要なのは、哲学的科学的著作におけると毫も異らないのである。

「いかに読書すべきか」に関する私の考えの重点は以上のごときものであるが、それは未だ私の意を十分尽していないし、たとえ尽していたとしてもあくまで読書に関する私見であることをここに断っておかねばならぬ。読書についてはなお「何を読むべきか」という重要問題が残っている。哲学宗教科学文芸等のそれぞれの文化領域の書を、いかなる生長段階においてよむべきか、それぞれの部門ではいかなる書が推賞されるか、これらは読書を志す若人の最も緊急の問題であるが、浅学な私のよく尽しうるところではない。はじめにもいったように、これらのみならず、一般に読書の問題はもともと個々人の生長段階、素質、環境等にも制約される問題であるから、本質的に各人自ら苦悶し模索すべき性質のものである。自ら求めるところなきものには、読書の正しい道はついに開示されることがないであろう。

（附記）坊間読書を論ずる人は、寡読か多読か、精読か速読かという問題を読書論の重要な

一項となしているようにみえる。しかし読書の根本態度は、思うに理解と創造とにあるべきであり、この根本準則に背反しない限り、寡読よりも多読を、遅読よりも速読を選ぶべきである。またある種の書は速読、ある種の書は精読という風に区別することも一般的には不可能である。理解と思索とを目標としつつ読むとき、ある種の書は比較的容易に読破れるがゆえに結果として速読となり、他のものは理解が困難なため所謂「精読」とならざるを得ない。また同じ書であっても読者の生長の段階いかんに従ってあるいは速読が可能であり、あるいは精読を余儀なくせしめられることも考えねばならぬ。一般にたとえば哲学書は精読主義、文芸書は多読主義というがごとく、書物の部門によって準則を分つがごときは、私の理解しえないところである。いかなる書であれ、自己が選択したものである限り、一応は理解的読書をつとむべきであろう。しかるのち再読すべきかそのままに放置さるべきかは、おのずから決せられると思う。

第三部　読書の回顧

読書の回顧

阿部次郎

私は最も本が読めない種類の人間である。精読と多読とを並行的に調和させようといふ試みは、これまで幾十回となくやつて見たが、ついぞ一度も成功したことがなかつた。一時には一つの事しかできない私の性分が時間を分割して使用する努力を妨げて、一つの仕事に油が乗つて来ると、午前午後夜分ぐらいに大まかにわけてある時間割もいつの間にか破れてしまふ。それに気分の充実を必要とする仕事の仕振と、散り易く纒り悪い私の集中力とが更に邪魔物を添へて、私の読書量は自分ながら恥かしいほど寡少である。従つて多読博識の方にかけては、あらゆる謙遜をぬきにしても、私には何の誇るべきところもない。併しこれまでの長い生涯の間には、精読若くは愛読することによつて多くの恩恵を被つた若干の書物がある。若い諸君の御参考に、それ等の書について思ひ出すままの雑談を試みようと思ふ。

小学生の時分には私の読書慾は相応に旺盛だつた。併し本屋もない田舎に育つた私には提供される材料が甚だ乏しかつた。父に買つて与えられるものでは読み足りなかつた私は、留守勝な父の本箱を猟つて、大人の本を貪り読んだ。従つて当時の私が興味をもつて読んだ本は、甚

だ雑駁で奇怪である。落合直文、小中村（池辺）義象両先生の雅馴な擬古文で書かれた『歴史読本』の列冊は私に国文流の「物の哀れ」の伝統とともに、人倫に対する道義的情操を注入してくれた。さうして曽我兄弟や阿新丸の話で煽られた孝行の感情は、更に『少年少女』の列冊中、村井紘翁著『近江聖人』によつて薪を添へられた、当時から他人に涙を見られることの嫌ひな私は人のをらぬ土藏や離れの隅に隠れて泣きながら繰返しこれらの書を読んだ。その感化は一面私にセンチメンタルな弱さを植え付けたやうであるが、併し私が人倫のあらゆる誠実な関係に対して敬意を持ち、残忍酷薄な感情に汚染されずに今日に至つたのは、これらの読書の影響に負ふところ少くなかつたことを自覚する。以上は私が父に買つて貰つた本のうちにあるものである。私はこの感化に就いてこれらの著者と父に対して、今日も感謝の情を持続けてゐる。

併し父の本箱から取出して読んだものは、子供としては奇怪なものばかりである。その中には当時にしても既に両三年前の発行に属する国民之友があつた。私はそれを読んで社会や政治の評論に興味を持つた、当時の雑誌帳に「西園寺文相に与ふる書」といふやうなものを書いたことを、私は苦笑をもつて回想する。さうしてこの雑誌に載つた小説で不思議にも私の頭に深い印象を残し、幼い空想を刺戟したものは Wilkie Collins の Wowan in White? の飜訳である。これも、何が何処に痕跡を残すか予測し難いことの一例として書き留めて置くに価いするであらう。

同時に私は同じ本箱から漢籍を取出して読んだ。朱註を頼りに論語や孟子を読んだことは私の少年当時のやうに、旧藩時代の漢学の余響が猶漂ひ残つてゐた時代にとつては、必ずしも、異とするに足りないであらう。併し私は更に『補義荘子因』を取出して、返り点を便りに巻首の『逍遙遊』その他の三四篇を読んだ。さうして汪洋たる空想を喜んで、論語や孟子以上に愛読した。小学校時代の子供がこんな六かしいものを読んで何を理解したかは固より問題とするにも足りぬことであるが、私は今日においても時として、荘子の文章が私の文章に何かの影響を残してゐるやうな気がすることがある。さうして少年時代に受けた影響を恐ろしく思ふ。

併し以上の読書にも優つて私に持続的な感化を与へたものは、小学校の修身の時間に副読本のやうにして教へられた『西郷南洲翁遺訓』である。その中の三四節のごときは今猶依然として私の胸奥の記憶に厳存して私を策勵してゐる。特に政治や経世に従事する人に対しては、私は今日にあつても猶これを精読熟思すべきことを勧めて憚らないであらう。

中学校に入つてからも私は小学校時代の悪癖を持続して六かしいものばかりを読みたがつた。併し今日から回顧すれば、持続的な感化を与へて、私の人間の発達を助けてくれたものは主として文学の書である。就中島崎藤村先生の『若菜集』は私の感情生活の開花を促したものとして特筆しなければならぬ。蘆花翁の『不如帰』を涙をもつて読んだことは、私と同じ年頃の少年には共通の現象といつてよいが、私は寧ろ『思出の記』に積極的な生活意志を掻立てら

れることを感じた。鷗外先生の『水沫集』によつて西欧の文学を喜び始めたのもまた此頃のことである。就中『埋木』に少年の多涙な感情を刺戟されて、私はゲザやアンネッテの小曲を作つたりした。ゲーテの『エルテル』をカッセル叢書の英訳で読んでその一節を訳して見たのもまたこの時分のことである。あらゆる少年にとつて恐らくは同様の現象を見るであらうが、少年の心性とわれわれの育った時代の空気とが合致して、私は感情の開花期を、純潔な、敬虔な、放逸を恥とする夢の中で過すことができた。さうしてこの時期に当つて私の伴侶となつたものはこれらの諸書である。私は親愛と感謝とをこめてこれを回想する。さうしてこのやうな全体の態度の中に織込まれれば当時私の愛読した近松の浄瑠璃のごときもまた誠をもつて貫かれた恋愛の美しい夢以外のものではなかつたのである。

併し若しその一面に思想上の感化を与へる一連の人達がなかつたら、私の本来の傾向と少年時代の特殊な発達経路とが、一つになつて、私を止るところなき感情耽溺に駆り立てたであらう。この点において特に感謝を捧げなければならぬ人は内村鑑三先生である。私は先生が『聖書の研究』に立籠られる前、未だ半ばジャーナリストとして積極的に社会万般の事について立言していられる時代の先生の著作から親み出した。さうして『独立叢書』の中にある清新な思想の感化を受けた。

高等学校時代になつて、私の今日の「本が読めぬ」悪癖が始まり出したやうに思ふ。併しそ

れは今のやうに自分の仕事に追はれるためではなくて、青春の夢想が私の心を充して、自ら思ふことがあまりに多かつたためであつた。さうしてその頃には猶日課の読書に堪へることもできたのである。日課読みにおける最大の収穫は新旧約全書の通読である。先頃までの学生の間にあつて社会主義が最大の問題であつたやうに、われわれの時代には宗教が最大の問題であつた。さうして中学時代の内村先生崇拝がこの時期に持越されるとともに、トルストイの諸書が新しく私の読書慾を刺戟し出した。『我が生活』によつてこの人に喰いつき始めた私は『我が宗教』によつて多くの威嚇的な思想の前に戦慄した。さうして恐れながらも、高等学校、大学、新卒業の各時代を通じてこの人の足跡を追求した。私が読みかけた本を退屈のためではなくて末恐ろしさの為に一旦中絶して、更に勇気を奮つて漸く通読したことは三回に限られるやうに記憶するが、そのうちの二つはトルストイのものである。一度は『わが宗教』における絶対的死滅の教が私を縮み上らせた。二度目は『アンナ・カレニナ』のアンナがあまりに生々と美しく描かれてゐるために、私はこの女の運命を鉄道往生まで持つて行かうとする著者の描写について行くだけの勇気がなかつた。三度目はドストイェフスキーの『罪と罰』とである。この場合には逃げ廻つているラスコルニコフの神経の緊張がこちらにも響いて来て息苦しさがどうにも我慢がならなかつた。併しかういふ意味でついて行き兼ねる本に遭遇した経験もまた私にとつては有難いものであつたに違ひない。かういふやうな戦慄によつて、少くとも理解の上で私は新しい世界に踏込むことを余儀なくされたからである。

私の高等学校時代に就いて、更に二つのことを想起して置かなければならぬ。一つは清沢満之先生の最後に近く、消耗性の紅顔をして携帯用の痰壺に始終痰を吐きながら話して下さつた仏教講話を聴くとともに、また雑誌『精神主義』の論文を熱心に愛読したことである。私は内村先生やトルストイのやうな基督教のきびしさとはまた異れる静かに澄んだ世界を見た。さうしてその慈光に浴することを喜んだ。仏教徒の家に生れながら、仏教に対する本当の尊敬と関心とを持つやうになつたのはずっと後れて、それは全く清沢先生の御蔭であつた。それからもう一つは高等学校の二年から大学の始めにかけて桑木先生を中心とする読書会で諸書を読みながら、特にゲーテとの結縁を定めたことである。この会で『ファウスト』を論題としてから、今日に至るまで私はこの著およびこの著者と不断に接触しつつ猶飽くことを知らないのである。

大学時代に至っては、読書計画の古今東西に亙る拡大とともに、私の読書量は益々萎縮して来た。それは見廻しの広さが何処から手をつけていいかわからないやうな茫漠の感を誘起したためでもあるが、もつと内的な理由は私の「自ら思ふこと」が Grübelei の迷路に踏み込んだためであるといはなければならぬ。私は専門の学課が要求するものを読むだけにさへ堪へないやうな状態を持続して、新しく読み出したものといつては殆どなかつた。この時代における新しい読書と感化とは、ただイブセン一人を挙げ得るに止る。イブセンだけは熱心に興味をもつて読み、またその感化を受けた。その劇のうちで『ノラ』のやうなものよりも『ヘッダ・ガー

一言して置く必要があるであらう。

大学卒業後の二三年の昏睡時代を経て、今日の私に重要な影響を与へてゐるものの多くに、私の卒業後の無職時代に親み始めた聖フランシス、ダンテ、ニィチェ、ドストイェフスキー等は皆それである。ダンテの『神曲』はむづかしくて未だ愛読といふまでには到り兼ねるが、ニィチェの『ツァラツストラ』やドストイエフスキーの『カラマーゾフ兄弟』などは、今でも愛読書の中に数へて、他人にもそれを奨めることを憚らない。専門的領域においてリップスを読み出したのも卒業匆々のことである。ディルタイは更に後れるが、それ等のものは学術の書として若い諸君の一般的な読書慾に満足を与える性質のものではないであらう。私の生活および思想の根柢を造つてくれた恩人として、私は寧ろ前述のごとき文学や宗教の書をあげて置かうと思ふ。（現文のまま）

読書の回顧と読書法

斎藤　勇

一

どちらかといえば私は読み方の早い方ではないが、それでも、専攻である英文学について講義をするために繙き、またはひたすら感興にそそられて読み耽った書物の数は、二十幾年の間のこととて、決して少くはない。今書斎に備えてある数千巻を悉く読破したとはいえないけれども、その中にはたしかに自分の血となり肉となっているものが僅かではない。ほかに東大の研究室および図書館には私の蔵書の欠陥を補う英文学方面の書籍がある。それらに親しみながら、私も、凡人は凡人らしく、遅々としてではあるけれども、日ごとに研究を続けている。しかし私に課せられた問題は、現在の研究についてではなく、学生時代における読書の思出や、読書法などである。但し私が読んだ本を今そのまま推薦するのではない。唯幾分なりと参考になるかと思うまでである。

私の思出は中学生の頃から始まる。私は福島県の北端に生れたので、自然、福島中学を経て

二高に入った。中学時代にもよい英語の先生があったせいか、英語が好きであった。そして四年生になった春から、角田柳作先生、また同じ年の秋頃から吉井正一という先生に英語を習った。角田先生は早稲田出身の読書家であり、後、ニュー・ヨークのコロンビア大学内日本文化研究所長となりまた同大学講師として今日も活動しておられる。吉井先生は明治三十五年度東大哲学科卒業で、十数年前物故された。私はさまざまの意味において両先生から影響を受けた。東北の一中学生がわざわざ為替を組んで丸善から英書をとりよせたのも、吉井先生の影響であったかと思われる。

吉井先生は人生問題に悩みぬいたような人であった。蒼白な顔色、沈痛な表情、何か思いつめたような風であり、そして、真摯そのもののように見えた。この先生が一生懸命になると、時時耳が動いた。英語の教え方は独特であった。スィントンの万国史抄を習ったのであるが、うるさいほど頻りに出てくる年代を、アレクサンダ長逝の　323. B. C. であろうが、コンスタンタィン大帝東西両帝国併合の　A. D. 323　であろうが、唯「これこれビー・シー」「エイ・ディー・これこれ」という風に読みすてた。乱暴な教え方であったかも知れない。しかし、それにも拘わらず、私はこの先生の英語の時間を待ち遠い程に思った。教授法というような型にははまらないが、しかし型破りの面白さに惹きつけられたのであろう。先生は発音などにはやかましくなかった。ペンシルではいけない、ペンスルと読むのだというようにこだわることがなかった。そして至誠の尊むべきことや文化の重要なことなどをこの先生から、自然に学び得

たわれわれは、幸福であった。

私はある日の夕ぐれ、吉井先生をお宿にたずねた。英詩を読むならば、これを読めといって貸して下すったのが、ロングフェロウ詩集である。それは Chandos Classics という叢書の一つであったとおもう。そして当時雑誌「帝国文学」に屢々感想を洩らしていた島地雷夢から、先生に贈られたものであったので「帝文」の愛読者であった私は、ひとしおの感激をもって読み出した。この米国詩人は平易な書方で評判になった人だけに、彼の短い詩ならば中学四年生にも読みとることができた。読むのが面白くなった。それで私は自分で買いたくなった。丸善はラウトレジ（もっと正しい発音はラットレヂかも知れない）出版のロングフェロウ全集即ち *The Complete Poetical Works of H. W. Longfellow* (Cambridge Edition. Routledge.) をおくってくれた。何円であったか覚えていないが、英貨三志六片の本である。ラフ紙六八九頁もあるので、堂々たる大冊である。当時三省堂が複刻していたチェイムバーズ英語辞典（今日ならば（C. O. D. に当るもの）とならべて見ても、もっと大きく、もっと立派である。唯その表紙が真赤なクロースであるのは、当時の中学生にとって少々派手過ぎて恥かしいという憾みがないでもなかった。

ロングフェロウを私はしきりに読んだ。四年の冬休みには、彼の傑作「エヴンジェリン」(*Evangeline*) を訳了した。暮の三十日まで一週間ばかり、毎日朝から晩まで、読んでは訳し訳しては読んだのである。註訳もなし、先生もなしに中学生読みをやったのであるから今読みか

えして見たら、実に誤訳累々たるものであろう。――前の商工大臣吉野信次氏は一高在学中に令兄吉野作造博士所蔵のロングフェロウ詩集を全部通読したと聞いているが、怠け者の私は今日に至るまでロングフェロウを通読してはいない。また通読する気にもならない。

話はまた吉井先生にもどる。先生はカーライルを余程愛読していたらしい。教室でもカーライルに関する話がちよいちよいと出た。「カーライルの何を読めばいいんですか」という問に対して、私は「英雄論」という答を与えられた。そしてそれが読みたくてならなくなった。その頃、住谷天来訳「英雄崇拜論」を本屋で見つけ読んでいたが、「白雲去って悠々……」というような漢文調で、少々雲をつかむような気がした。生意気にも、いっそ原文で、と思ったのである。そしてロングフェロウ詩集と一緒に「英雄論」を丸善に注文した。到着した *On Heroes, Hero-Worship and the Heroic in History* は Chapman and Hall 出版、薄青い紙表紙の小冊子である。前記の詩集とこの講演集とを手にして、中学生である私はいかに得意であったろう。いや、得意というよりも、うれしくてたまらなかったのであろう。

しかしカーライルの原文は中学生には歯が立たない。けれども所々は何とかかんとかしてわかった。冒頭にある歴史の定義、

Universal History, the history of what man has accomplished in this World, is at bottom the History of the Great Men who have worked here.

は、その頃高山樗牛などが紹介したニーチェの超人主義を生噛りしていた者には、なるほどと

情の火を燃やした。私は、

I should say sincerity a deep, great, genuine sincerity, is the first characteristic of all men in any way heroic.

という一節を吾妻山にうすづく夕日が西の空を赤く染める頃、ひとり信夫山麓の校庭に立って幾度誦んじたか知れない。今、目の前にあるその時の本を見ると、その一節とそれに続く一節とは細くまたは太く滅茶苦茶に底線が引いてある。それは少年時代の単純な感激の迸りである。

五年の夏休みに「マクベス」を教えてやろうという人があったので、ダイトンの註釈版を、やはり丸善から買ったが、これは習わずじまいであった。よし教えられたとしても、その時は理解することができなかったであろう。

中学四年の晩春、日光への修学旅行があった時、外人向きの書物を売っている神橋附近の店で、(それは大きな骨董屋であったように思う) 記念のためテニソンの傑作 *In Memoriam* のきれいな袖珍版を買った。その当時はむつかし過ぎたが高等学校二年の時に毎晩それを読んだ、註釈書として頼りにしたのは前記角田先生が中学卒業記念として下すった A.C. Bradley の名著である。後来私が英文学研究上多くの点において大いなる指導者として私淑するように

なったこの大批評家の著に初めて接したのは、かように今から三十年も昔だったのである。ワーズワスの詩も私をどれほど感激させたか知れない。中学三年生の頃私は彼の選集を買ったが、それは今ならば岩波文庫とでもいうような Cassell's National Library「キャッセル国民文庫」という三ペンス叢書の薄青い紙表紙本であった。私は

Books! 'tis a dull and endless strife.

と叫びながら、しきりにワーズワスやその他の詩を（今から思えば一知半解ではあるが）ひたむきになって読んだ。そして終に四年生の時

Come forth into the light of things,

Let Nature be your Teacher.

というワーズワスの絶叫をそのまま文字通りに実行しようとして、冬のある朝、退学の意を校長に述べたまま、寄宿舎から漂然として両親の許に帰った。父は私が神経系統の病気にでもかかったものと思ったのであろう。医者を頼んだほど心配した。けれども本人は極めて冷静に合理的に自己教養の最善の道を選んだつもりであった。しかしまた学校教育を受けることになり世間なみの平凡な学歴を経過するようになった。もし全く大自然をしてわが師たらしめたならば、私は恐らく農村の一良民としてあるいは一自然詩人として暮していたであろう。

中学五年の夏、松島から東海岸を伝って平泉の中尊寺まで行った途中、仙台で求めたトルストイ「わが懺悔」の英訳（その頃はまだ邦訳がなかった）も、私に新しい世界を見せてくれた

本である。二高入学の後同じ文豪の「わが宗教」英訳を読みかけたが、あまり興が乗らず、中途でやめた。

ポーランドの文豪 Sinekiewicz（シェンキーキッチ）の小説 *Quo Vadis?*（「何処に行く。これも邦訳はまだなかった）の中に描かれたキリスト教徒迫害は、私をキリスト教に導く一助となった。私は高等学校一年の時と翌年と二度この本を通読した。

中学の終りに読んだものには、ほかに S. A. Brooke の英文学小史がある。それはもはや時勢おくれとなったけれども、実に要領のよい名著である。英文学を全般にわたって勉強しようとする私の小さい志を固めてくれたのは、この本である。高等学校三年の頃に通読した H. S. Pancoast の英文学史はもっとくわしくまたわかり易い親切な書方であるけれども、ブルックのように面白くはなかった。

以上、私は全く英語の本だけについて思出を述べたが、更に多く読んだのは、もちろん日本の本である。

十六七才の頃から「帝国文学」や「明星」などを買っていた私は、当時所謂「新体詩」が好きであった。藤村や晩翠はもとより、有名無名に拘わらず、むさぼり読んだ。その中に高山樗牛にかぶれるようになったが、その反動は綱島梁川に対する敬慕となった。「平家物語」に親しんだのは、樗牛の影響にもよることであったろう。その他、和漢書については、すべて省略することとする。

高等学校においては、中等学校の反動か、ばかに静けさが好きになり、例えば、スピノーザの「倫理学」を私はボウンズ・ライブラリ版で二度も通読した。けれども一般哲学に関する素養の乏しい高等学校生にそれが十分理解されなかったことは、改めていうまでもない。しかしこの大哲学者が極めて落ちついている表面の衷に燃える熱誠を湛えていたことに心惹かれ、そして「祝福は徳の報いではない、徳そのものである」云々という思想に引きつけられたのである。「しかしすべて気高いものは、稀であるとともに、むつかしい」（「倫理学」最後の一文）。

大学生としては勿論専攻方面の書物に親しんだけれども、P. Sabatier 原著「アッシジのフランシス」（英訳）は私を感激せしめ、Rudolf Sohm の *Kirchengeschichte im Grundriss*（教会略史）はヨーロッパ文化の重要な一面について教える所が多かった。また、H. Martensen の *Christliche Ethik* 第一巻総論を私は通読しなかったけれども、その中のゲーテ論やバイロン観からは、R. H. Hutton の論文などからとともに、文学と人生との交渉について学ぶところが多かった。

二

次に、環境と読書とについて一言する。

学生の時から専門の事に没頭してしまうことはよくない。できるだけ広い範囲の事に興味をもつような心がけがほしい。文科系統の人ならば自然科学書を、また理科系統の人ならば文化

に関する本に注意することは、その人を真に大学教育を受けた人とするであろう。
　殊に夏休みには何かまとまった問題について読むことが適当である。私の尊敬する先輩で私と同じく英文科を出た土居教授は、十九年前の夏戸隠山にひきこもって、カントの「純粋理性批判」を（勿論ドイツ文で）通読したと私は記憶している。ひと夏に「源氏物語」か「万葉集」かの通読もできないわけであるまい。英文科の学生ならば、シェイクスピア劇を五、六篇あるいは「失楽園」全部ぐらいは読める人もあるだろう。
　そういう大物にぶつかっていると、かなりつかれる。そのひまびまには、田舎にいるならば散歩の間に草木のさまざまなすがたを見るとか、鳥や虫を聞いたり見たりするとか、できるだけ自然にしたしむことが望ましい。一体私なども決して自慢はできないが、学生のうちには草木に対して驚くべき無智ぶりを発揮（?）する人がすくなくない。赤門と正門との間にしげってあの鋪道に涼しいかげを投じている楠を、私の聞いた大抵の学生は知らない。（ここで大学の当局者に御願いするのはおかど違いであるが、学内の代表的な植物に札を立ててもらいたい。）鳥を室内に飼ってペットにしていることは別問題として（ある人にはそれがどうも一種のわざとらしさまたは少くとも偏愛と見えるだろう。）野辺や森かげの鳥に興味をもつことは、その人をどれほど幸福にするか知れない。そういう点から見て W. H. Hudson の著作などはよい読みものである。
　夏休みにも実験でいそがしい学生は、まとまった時間をきめて読書をするひまがないかも知

れない。しかし実験のあいまあいまに、お茶をのみながらでも、本は読める。義理で読むのではなく、面白くてたまらずに読める。何かスティーヴンソンの海賊小説とか、ハーディの農民小説とか、そういうものを読んで見てはどうだろう。私が、シェンキーヰッチの長篇「何処に行く」の英訳を非常な興味をもって読み通したのは、中学を卒業したばかりの頃家事手伝いの間にであった。同様に、高等学校生の時夏休み帰省の間に農家の手伝い（農村での手伝はわれわれが学校では学び得ないことをいろいろと教えてくれる）をしながら、ベルリン大学教授 Reinhold Seeberg 著 *Grundwahrheiten der Christlichen Religion*「キリスト教の根本真理」を読んで、それは割合大きくなかったけれども、とにかく愉快に感じたこともある。「山の征服」というような言葉がはやるけれども、「大著名作を征服する楽み」というような句が用いられないのは、世に読書人の多くないためであろうか。但し、こんな句は用いない方が望ましい。「山の征服」の代りに「お山まいり」といった昔の人の心根こそゆかしいものである。「大著名作から学ぶ楽み」という謙虚な心がまえがなければ、読書もまた一種のひまつぶしに終るかも知れない。すべて小なるわれを立てて争う時には、得るところもまた小なるものであろう。

汽車の中では何を読んだらいいだろうか。新聞雑誌のほかは車中で読めないものときめているのが普通らしいけれども、そういう人はふだんでもあまり読書をしない人であろう。汽車の中では専門外のかるい読みものを見たら、退屈することもあるまい。暑さをも忘れられよう。

私の知っているある学者は、車中でよくラテン文法の復習をしたということだが、その人は古典学にあまり関係のない哲学を研究した人である。外国文学を研究している人ならば、和歌や漢詩の選集を読むこともよかろう。和歌、俳句は勿論、漢詩も大体短いものが多いから、景色を眺めたり、車中の人々のすることを見たり、その間に読んでも、注意が散漫になることによって困ることがない。袖珍本で適当な和歌選集がほしいものだ。英文学の選集としては、相当英文学に親しんでいる人ならば、前の桂冠詩人 R. Bridges が編んだ *The Spirit of Man* を面白く思うだろう。それには作者の名が巻末に一括してあるだけだから、こういう書きかたをするのは誰だったかと、自問自答しながら味わうことができる。

三

最後に、本の読み方について一言しておこう。

第一、良く選んだ本を精読することはいうまでもない。食物について気むずかしい人でも、魂の糧については案外不注意なうつけ者が少くない。そういう浅慮は避けたい。第二に、良書と限らず、たとい愚作であっても、何かの理由で読みかえす必要がある、自分の本を読む時には、要所々々にしるしをすることが、後になってどれほど手数を省くことになるか知れない。但しその底線も傍線も目立ち過ぎては邪魔になる。底線をごく重要な数語にだけ附けておけば、その前後は傍線で事足りる。事足るどころか、そうすることが印刷の美わしさを害わない良法

である。半頁も一頁も続けざまに底線を引くような人は、いかにも小学生らしい幼稚な読書子か。さもなくば再びその本を読むために見覚えをつけるのではなく、底線を引くために本を閲く人かと思われる。いずれにせよ馬鹿々々しい。

見覚えの線は黒、青、赤の三色を用いることが便利である。何か批評を加えるか註を附けるか、いわゆる傍註（マージネイリア）には黒鉛筆がよい。赤鉛筆は要点、佳句、同意を表する言葉などに用いる。青鉛筆は不意のしるしとして用いる。但し書中に取り扱われている固有名詞（主として人名）には赤の代り特に青を用いれば、たちどころに見分けがつく。以上は、私が学生時代かまたは卒業後間もない頃から今日に至るまでやっている色の使い分けであるが、他のやり方もあろう。とにかく人々それぞれに工夫して見れば、どれだけ時間を省き得るか知れない。

見覚えをつける方法に、もう一つ重要なことがある。それは索引をつくることである。研究書などには巻末は大抵索引があるけれども、それでも読む人にとっては不備を免れない場合が少くない。故に篤学な人がある本を入念に研究するならば、彼は印刷してある索引に多少の補いをつけるであろう。索引のない本には、自分に必要な項目だけでもよいから、巻末の白紙に（あるいは別に書翰箋にでも）簡単ながら索引を作っておくならば、数年の後再びその本を繙く時、大いなる助けとなる。

こういう方法をとりながら読むならば、自分で別にシノプシスを作らなくとも、大抵は間に合う。但しこれは自分の本についてのみ適用すべきことで、個人からでも図書館からでも借りた本には絶対になすべきことではない。図書館備付の書籍にカナをふったり愚にもつかない漫語を書きつけたりすることは、あさましくも当人の愚劣や虚栄心を暴露するだけであるのみならず、天下の公共物を害する罪悪を犯すことである。

読書とその思い出

長与善郎

――若い、学生時代に、もう少し本を読んでおけばよかった。もう今となっては仕事や、日日の俗務雑用に追われて、読みたくもなかなかその暇がない。――

とはよく耳にする述懐の嘆声である。まったくそのことは、かくいう自分自ら常に身につまされている所の感慨で、「俗務雑用に追われる」という職掌ではないにしろ、今よりは時間もたっぷりあり、頭もまだ柔かくて、人の説を受け入れるようにできていた時代に、一と通りとは行かないまでも、も少し博く、世界古典文学の代表的といわれるものでも読んでおいたら、余程強みであった。それを元来あまり読書好きではなかったとはいえ、スポーツなぞになまけて可惜いい時機を少なからず逸したことは惜しいことだったたといつも悔まれるのである。

事実、自然の理からいって、ものを受け入れるのには、まだ主観の固定していない青少年時代が最もいいので、年少のうちに読んだもの程印象的に頭に残り、青少年の頭は、肉体の食物におけるごとく、それで育つのである。同時に有害なものを読んだ時にはその反対に毒されることも多いわけであるが、それがだんだん此方の頭が固まり、ものに批判力や趣味が発達して

定まってくると、若い時のようにそう何にでも自分の主観を順応させて、うけ入れるというわけには行かなくなる。老ゲーテが、四十才も年下のショーペンハウエルから大なる賞讃の辞を期待しながらその「色彩論」を贈られた時、――それはゲーテ自身の「色彩論」にぶつかっていたという理由にも因ったのであるが、――「自分は他人の意見に同意するのには、既に年をとりすぎて了った」と答えたことがある。

即ち、――いくら若い時といっても、――あるものに感心するということは、ものによって感心せず、否定するという一面がなければ、読んで読まないも同様である。世の中の多くのこと、多くのものに、感心できず、不服に感ずるだけの見識の芽生えがあってこそ、偶々真に同感して「これなる哉」と思う思想感情に出遇った時に救われたごとく有難みを感じ、所謂る千載に知己を見出すという悦びにも接するのである。それが啓発である。自己啓発、啓蒙の意味において、何といってもさし当り読書ほど便利なものはない。

ところで、その読書においては、何といっても先ずその方法、読み方というものが問題で、何を、どれ程読んだといっても、それは恰度何という題目で何百枚の原稿を書いたといって威張るのと同様で、そんな広告にならないものを広告になっていると感心してとるのは、よくよく無学無知な者か、然らざれば自分もまた単なる法螺吹きの広告屋に限る。昔、まだ少年の頃、自分はある男が「金色夜叉を読まない奴は馬鹿だ」と人にいうのを聞いたことがあった。そうかと驚いて、早速「金色夜叉」を買って来て、あの読みずらい名文の厚い奴を一生懸命に読ん

でみたが、さて、読まなければ「馬鹿だ」という程のものとはどうしても思えなかった。ところが後で、そう人を馬鹿呼ばわりをする当の本人が、実はまだその「金色夜叉」を本当には読破していない馬鹿の仲間だということが判り、何だ、と思ったものであった。そんな風に、謂わば衒学癖のある人が只話の調子の法螺で「吹く」のを真にうけて、此方は正直に読み、冗談から駒が出たといった形で、結局お蔭で大いに得をしたと心に感謝し、自分が成長するためには傍に衒学者や法螺吹きがいてくれるのも悪くないと思ったようなわけであった。

なにも自分が読書家でない負け惜しみの弁疏にいうわけではないが、何によらず、ものは動機を見ることが肝腎である。動機とは必ずしも事の原因の意志を指すのではない。それは「人」によるということであり、また一人の人にしても、その時のコンディションを指す意味である。それはたとえば美術についての盲人がルーヴル美術館や、ヴァチカンの壁画を観たといっても、それは音痴の者がトスカニーニの指揮するベートオヴェンの交響楽を聴いたというのと同じく、われわれの誰もその説に耳を傾ける者はない。しかし真に鑑識ある活眼の士が文展を見て来て評をすれば、たとえ評される絵は凡作であろうとも、われわれの耳はおのずからその人の発見ある説に傾聴する。読書の場合も同じことなのはいうまでもない。

世の中には只何ということなし、一つの道楽のように生来読書を好む習癖の人がある。およそ人は何にでも淫し得るもので、喩えば碁、将棋に淫するごとく、小説やその他の読書に淫するのである。而して淫すれば眼がくらみ、已れが主にして、書は客であるという大事な地位も

顛倒して了う。所謂る好きなあまりに溺れて、本に呑まれて了うというもので、道楽としては固より最も無難な、且つ結構な道楽である。自分の経済にさえ差し障りがなければ誰もそのために迷惑を蒙るわけではなし、またこれは他人に吹聴して、自慢にするとか、もしくはいい点を取ろうとかいう詰らぬ了見で読むわけでもない。あたかも釣を好きな人がただ糸を垂れていれば自から楽しみ、所謂鯨飲馬食の徒が何でもうまい、といって啖うのと同様で、何を読んで特に共鳴し、感憤するということもなければ、憤慨して抛つということもない。つまり、動機は純粋なのであるから、別にそれを咎める理由は毛頭ない。ただそれがいい閑つぶし以外に何の役にも立たぬという事実だけはいわれても仕方がない。厳密にいえば、それは矢張り人生の最も貴重なるものを弁えぬ一つの無知から来る時間の浪費というべきで、そういう類の読書を只熱心であるから感心だと一概にほめるわけにも行かないのである。

無論子供の時分に、わけも解らず只機械的のように素読をした論語とか聖書の文句とかいうようなものが、数十年の後に到って俄然成る程と思い当り、大いに処世上の心得に活きてくるということき例は決して少なくはない。しかし、それは無動機とはいえないのであって、只動機の種子が潜在意識のように地下に潜んでいた場合である。種子なくして芽は生じない。而して、その種子の有無は、全く先天的な運命というべきで、後天的の教養、勉強は、唯その有る種子をいかに、またどの程度に成長させるかの問題にすぎないのである。

その意味において、読書は全く食物の摂取に似ている。何を、どれ程食ったかではない。い

かに食うかである。いかに消化し、身に為すかである。故に、体のコンディションというもの、腹加減というものが何よりも重大な条件になる。恰かも過激な運動や労働をした後では、甘いものが食いたくなるということは、甘いものが最も体に需要されているからで、そういう時には一杯の汁粉も非常な栄養になり、体力を恢復するが、然らざる場合には甘いものは屢々有害になる。年をとり、家に蟄居して仕事をすることが多くなったような事情の下ではあまり重い肉類や、脂こいものは兎角胃腸をこわし、自然要求することも少なくなるが、新陳代謝の旺盛な発育盛りの時には何よりもそういう食物が要求され、また食いすぎさえしなければ、よく血や肉に化する。即ち、大事なことは常に、最も自然に体の要求する所のものを適宜に摂ることで、この要領をよく会得したる者は、たとえ区々たる雑誌の一文章や、一新聞の記事からすらも、他人には到底想像もおよばざる貴重な収獲物を得、自分の思想、精神を啓発増進せしめる重要な暗示（ヒント）を得るのである。反対にその要領を心得ざるものがいかに万巻の名著を読むとも、それは只一と流れの水が徒らに体中を通過するごときものにすぎないということは、いかに内に熟したる必然の動機というものが読書の根本要件であるかを物語るものである。一言にしていえば、読むべき人が、読むべき書を、読むべき時機に読むというのが理想的ということになる。

　また、若いうちには外部のものを受けつける場合の気分というものが、あまり問題にならないが、年をとり、自覚を積むにつれて、そういうことが一概に行かなくなり、所謂良いという

ものでさえあればいつでも、また何でもいいというわけには行かなくなる。自分が自分の主観によって自分の仕事をするということが急がしくなり、それに追われるからであって、急に読みたくなって本屋に注文したものが数日を経て届けられた頃にはもう気分が変っていて、それを読む興味が抜けて了っているというようなことが往々ある。自己の主観が顕著な人であればある程そういう気紛れや我儘が甚しく、音楽のような積極的に此方の気分に働きかけてくるものに対しては殊にそうである。そういうことからも、若いうちにできるだけ読んでおくのがいいということがいわれるわけで、第一、誰しも一つの仕事に集注する年輩に達すれば、一日の中の頭のいい大部分の時間は、自分の専門に属する生産的活動に向けられ、他から教わり、摂取するということはその他の余暇や、仕事の合間にするよりなくなる。従って直接専門以外の一般的教養にかけては纏った大部のものが次第に読んでいられなくなるのは当然で、その代りものの読み方は批判力の発達、要点の捉え方の熟練と相俟って、一定の方向に照準を向けられるから、ただ漫然、漠然とあてどもなく漁るよりは僅かな分量の読書でも、実質的には遥かに豊かな効果を挙げ得るというものである。即ち一般的に評判な、立派なものだといっても、それが現在の自分にとって何の役に立つという目安が立たない以上、限られたる僅かな寿命の中の時間をそういう読書に永く費すということは決して賢いことではない。いかなる栄養物も人人の体質に依るように、自分の精神的体質と、それに最も適合したる需要物をよく弁えた以上は、それに応じて実になるものだけを注意して、抜け目なく摂ることが肝要である。

かかる自覚の進歩は、おのずから読書の範囲を次第に限定し、狭める結果になるのは已むを得ない。例えば一つの本を択ぶに当っても始めから狙い処があり、その狙った所を探し、それを獲れば、即ちその本の用は足るのである。只全部を完読する（durchlesen）というようなことは無論目的ではない。一行でも「然り！」と大声で叫び得る箇所を見つけることが眼目である。全部を完読するということは思わず吊りこまれてするとか、またその完読が特に意義あるとか、あるいは何か頭の保養の意味になる場合に限られてくる。著者と、その題目の種類とを自分のその時々の要求や、気分に応じて択び、またその読み方も要点々々を拾うというような読書法は、決して骨惜しみのための狡い方法ではない。反対にそれ程に一々の行動や、ものの観察に注意深いということこそ、自己の生命への忠実の印しである。著者がいかなる動機、いかなる目的で、いかなる読者を目あてに何をいおうとしているかを直ちに洞察できないようなぼんやりした読み方では、読書はどうせ大して啓発の用とはならないのである。尤も若い無自覚なうちは恰度発育盛りの子供が何を食っても身になるように、そういう時代には何にでも感心することも無用ではない。早く小ましゃくれて、旨いまずいというよりは何でも沢山食って肥ることが第一という時代がある。いかなる物にも感心することのない者は、畢竟自分の内に何の善い芽もないというだけのことで、育ちようはない。

且つ本というものは人間と同じで、始めに一寸つき合ってみた所ではいかにも眼新しく気が利いていて、面白いが、だんだん深く接しているうちにもうその癖が鼻につき、底が見えて了

って、二度、三度とは読む気がしなくなるという類もあれば、またその反対に、最初は何となくとっつきが悪く、面白くも思えないものが、なお深くつき合えばつき合う程奥床しいよさが解ってくるという性のものもある。このことは「ルナールの日記」を読んだ後でモンテーヌの「随想録」を読み、特に感じた所であるが、逆にいえば本の読み方や、興味の持ち方でもその人物が大凡知れるというものである。

さて、前置きはこの位にしていよいよ自分の回顧に移ると、自分が一番先きに感激して読んだものは、中学三、四年頃に読んだ昇曙夢氏抄訳の「トルストイ伝」であった。面白いと思って読んだものはその前にも無論いくらもあり、黒岩涙香の飜案になる「噫無情」や、「巌窟王」「クオ・ヴァヂス」なぞいろいろあったが、心底から「世にはこんな人もいるものか」と驚き、生き甲斐を感じる思いがしたのは、この偉人の些々たる小伝が最初であった。それから、英語なぞで、幾種類のトルストイ伝を読んだか覚えない位であるが、就中最も深い感銘を与えられたものは、もう文学をやることになってから読んだロマン・ローランの「トルストイ伝」で、その感銘の強さは、むしろその作品自身にもまさる程であった。

一体自分は到って遅播きの性であった。ただ世間の人々のあまりにも嘘だらけの利口ぶった世渡りと、その無良心な、見栄坊の破廉恥さ加減には腹の底から寂しい憤慨を感じて、愛憎をつかしていた。で、そういう世俗的方面に兎角間抜けな自分が、真に気持よく生き得る世界は、何かしら真実――人の真心、というものの通用する精神界の仕事の他にないことを感じていた。

そういう時に、自分より百倍も強く深酷に世の中の虚偽に悩み、八十三年の生涯を通じてそれと闘っている一人の偉大な真人をトルストイに見出したのだから、救われた気がしたことは当然である。青年時代の武者小路はトルストイの名の「ト」の字を何かで見ただけで動悸がしたといっているが、僕のはそれ程ではなく、トルストイとともに、一方その正反対の思想のようなニイチエに牽かれたことも甚しく、そうかと思うとまた、まるで呑ん気なような夏目さんの低徊趣味や、ボードレールなぞの唯美主義にも引っ張られるといったように、甚だ混沌として、生一本にひたむきなものではなかったが、それも要するにそれらのものの中に一々自分を見出すからのことで、却って一つにのみ往くことが自分として不自然であった。実はそういう矛盾に充ちた自分に、一種素質の豊富、多方面を感じて、内心矜りにさえしていたことも事実で、そういう自分に "I am large; I contain multitude" といったホイットマンの言葉が実に嬉しかったことも思い出す。

何といっても長い間のことであるから、結局何のかのと読むには読み、その中で何に感銘したと一々挙げようもない。就中マーテルリンク、ドストエフスキー、ゲーテ、ストリンドベリー、ショーペンハウエルなぞは特筆大書しないわけに行かない大恩人で、それにつづいてはホイットマン、イブセン、ヘッベル、エマスン、日本人では内村鑑三、夏目さんなぞ忘れ得ない恩人である。

またこれといって殊に纒めて読んだわけでなくとも何となくその人柄がたまらなく懐しく、

好きであるという類の人もあるもので、そういう中にスピノザ、キエルケゴール、ジョナサン・スウィフトなぞがいる。畢竟思想として僕に最も深く影響している者はショーペンハウエルかも知れないが、古今の中で只「好き」という点で誰を最も好きかと聞かれれば、僕は「キエルケゴール」と答えるであろう。近ごろの人では矢張りジイドなぞ、――時に同感できない点もあるが――先ず最も信用する好きな作家である。

論語を通じての孔子の影響も僕には実に大きく深い。「十才のわれ六十の父につきて訓みし君子ならずやと水仙のころ」という歌のようなものを嘗て詠んだことがあるが、白髪の長く胸に垂れた父の前に端座して、論語の素読をさせられた思い出は、今日なお益々深く活きてくるばかりである。新約聖書も永久の「聖書」であるが、釈迦、老子、禅宗の諸祖も僕にとっては実に根本的な師で、どうも齢をとるに従い、自分が東洋人であり、また日本人である父の子であることが次第に沁々と思われる。さういう所に運命というものの動かし難き力を感ぜざるを得ない。

自分に影響を与えたという点からいって、友達の感化もまた実に大なるものである。余りに近いだけに、却って比較的意識されないが、あるいは近いだけに、最も大きいものというべきかも知れない。殊に武者小路の諸作の影響は三十才位までの僕には、尠なからず切実なものがあったと思う。良友に恵まれていた僕は、その他の諸友からもそれぞれに多大の啓発を受けたことを記しておかなければならない。

しかし、僕が文学創作をやる最も手近かな導火線になったものをいえば、今では余り人々の話題にも上らない物であるが、さし当りレオニイド・アンドレーフの「ディレンマ」（上田敏氏が「心」と訳したもの）であった。始めてその訳を読んだ時、「小説とはこんな面白いものか」と思った。その前に同著者の「血笑記」（赤い笑）を読んだ時にはまだそれ程に感心もしなかったが、この「心」を読み、文学というものの本領が矛盾に充ちた、わけの解らない人間の心——心理の変妙不思議な神秘を書く所にあるように思い、もしそういうものとすれば、およそこの位興味深い仕事は他にないと感じた。漱石の「それから」なぞにもその心理が相当に扱われており、その意味でも面白かったが、大学で元良博士の心理学の講座を聴くと、楽しみにしていただけに大いに失望し、矢張り本当の生きた心理学は学者には解らない。それは文学者に求むべきものと思った。だから「唯一の心理学者」とニイチエに折紙をつけられたドストエフスキーのものがその点だけでも驚歎すべき面白いものに思われたことは当然で、ドストエフスキーは少し重く大きすぎたが、チエホフ、ゴリキー始め、一体に露西亜の作家にはその内省的傾向があるので、トルストイはいわずもがな、クープリン、ソログープというような余り偉くもない人の作まで、それ相応に面白かった。

しかし、たんだん上には上を知るようになり、ドストエフスキーの「虐げられし人々」を読んだ時の感銘なぞは何といっていいか分らぬ涙のにじむものであった。

『それは恐ろしい物語であった。——それは病み疲れ、苦しみ抜いて、すべての人に見棄て

られ、望みをかけていた最後の人物――嘗ては彼女から辱しめをうけて、堪え難い苦痛と卑屈とのために発狂した父親からも突き放された女の物語である。それは絶望の淵に投げこまれ、まだ幼児のごとく考えていた娘をつれて、冷たい、ごみごみしたペテルブルグの町々を歩きながら物乞いをして廻り、果てはじめじめした地下室で死んだようにして幾月かを過ごした女の物語である。――それは重苦しいペテルブルグの空の下で、大都会の暗い、隠れた裏町で、愚かしい、沸き立ち返る生活、愚劣なエゴイズムや、衝突する利害や、性質の悪い放蕩や、秘密な犯罪などの中で、また無意義な、常規を逸した生活のあらゆる地獄の底で、しばしば人知れず、しかも秘密のうちに行われる暗い、苦痛な物語の一つである。』

その前篇の終りのこのドストエフスキー独得のごたごたしたような魅惑力のある文章を読んだ時の重苦しい、厳粛な感銘は今だに忘れ難いものである。更に後年「カラマゾーフの兄弟」を読んだ時のそれはまた一段で、こうなるともう心理なぞという部分的な問題ではない。自分の全人格が何だか引き揚げられて変ったような気がし、凡そ感激にもいろいろあるが、実に良書を読んだ時程露骨に栄養分を吸った身の発育を感じることはない。何か仏像の傑作にでも遭って、礼拝したいような心地である。

そうかと思うと、またからりと暗い地下室から浮び上って、広々とした青空をうち仰ぎ、伸びのびと思い切り四肢を伸ばして、人生を讃美しつつ朗かに濶歩したくなるような洋々たる壮大な文学もある。シェークスピアなぞを読むと、『なにもじめじめ、いじいじ燻すぶることは

ない。もっと快濶に翅を伸ばして思う存分あばれてみろ」と元気づけられるような気がする。そうかと思うと、またデルフォイの神殿といったように荘厳崇高で、堂々と立派な建築的な美しさ、例えばソフォクレスや、プラトンの対話のごときもあれば、ニイチエ、ストリンドベリーのごとく苦がく厳しい美しさもあり、かと思えばまたその反対に和気靄々として、人間的親しみがあり、天馬空を翔けるというような飛び離れた天才的趣きはないが、いかにも静かな平坦のうちに滋味津々として、何となくわが家に帰って親しき隣人と語るごとき懐しい心地のする悠々たる東洋的心境を歌った——陶淵明やわが芭蕉のごとき——素朴自然な境地もある。実に人心の世界たる、さまざまあればあるもので、星のごとく、それが(偉大な作家の場合には)一つ一つ本道と思えるところがまた妙である。

そうしていろいろの世界の美しさをあれやこれやと見物して遍歴した挙句、結局は己れの世界に戻って来て、「冬籠りまた寄り添はんこの柱　芭蕉」といったような感慨にひたるのである。冬籠りといったって、なにも、冬に限った意味ではあるまい。春も来れば、夏もあり、また秋も来るというわけで、人類の心のそれのごとく小さな一庵の中にも「花あり、月あり、楼台あり」である。

実に文学の世界は宏大無辺であり、われわれは自己の小さい鏡に映るその星辰の無虚無際限なることにおどろき、またそこに己れの生き得る余地を見つけて勇気を得、感謝の念もおこるのである。

読書の回顧

高橋健二

一

「二度読むに値しなかったものは、一度読むにも値しなかった。」と、ドイツの詩人フリードリヒ・リュッケルト(Fr. Rückert)は述懐している。彼は「愛の春」のような甘美な抒情詩集の作者である。と同時に、東洋語の泰斗としてベルリン大学教授をつとめたほどの学者であったから、右の言葉は、決して単に気の利いた警句というのではなく、豊富な体験に裏づけられたものである。

自分自身の読書を振返って見ても、いまだにもう一度読みたいと思う本こそ、ほんとうに価値あるものであるということができる。もう一度読みたいという気持の起こらない本は大抵忘れられてしまっている。それは一時のなぐさみにはなったかも知れないが、自分の心の糧にはなり得なかったもので、その意味では、一度読むにも値しなかったといえるであろう。しかし世の中には無駄も必要であり、無用の用ということもあるから、忘れられてしまう本もあって

悪くはないであろう。しかし、もし二度読みたいという気の起こらない本ばかり読んでいたら、その人の内生活はどんなに空虚であるか分らない。これに反し、二度三度読んでみたいと思う本が沢山あればあるほど、その人は幸福である。そういう所謂愛読書に取りまかれている人の生活は、親しい師友に取りまかれているように、あたたかい心強い雰囲気に包まれているであろう。結局、繰返し読みたいと思う本を沢山持つことが、読書の目的に最もかなっているといえる。万巻の書を読破しても、読み直したい本を一冊も持たなかったら、万人とつきあって一人の知己も持たないのに等しい。自分も学生時代、むやみと沢山読むことを誇りとして、読上げた冊数を数えて得意になったことがあったが、読書の価値は決して量にはないことを沁々と感ぜずにはいられない。そして高等学校時代から今日まで二十年間の読書によって得た「二度読みたい本」の余りに多くはないのを淋しく思うと同時に、しかもなおそのような本を幾冊か持つことを喜びとするのである。

社会の進歩とともにいろいろな娯楽がふえ、ことにスポーツと映画が流行普及することによって、読書の占める役割は狭められて来たかも知れない。近来の学生が昔ほど読書をしないというのも実情であるかも知れない。むしろ、それは自然の勢であるかも知れない。しかし読書が精神的な娯楽として首位を占めるであろうことは、いつの世にも変りはあるまいと思われる。「喜びによって力を」（Kraft durch Freude 略称 KdF）と称するドイツの厚生運動は、大衆に健全な娯楽を均霑せしめることによって、新鮮な労働力を養うことを目的とし、旅行、

演劇、音楽、映画等々、種々の大衆娯楽施設を活潑に行っているが、矢張り、書物に対する需要が最も大きいことを統計的に示している。こういう実証を俟つまでもなく、文化人の生活にとって読書の持つ意義が常に極めて高く大きいことを否定するものはあるまい。従って読書に対する反省はいつも欠かされてはならない緊要事であろう。

二

読書が娯楽として、教養の手段として最も有力な働きをし、且つ何人の伴侶にもなり得るのはそれが大きな自由を持っていることに基づく。読書はいつどこででも行われ得るし、また自分の好むものを選んで行うことができる。そこに非常に大きな自由と選択とが残されていることは、読書が、拘束されることを欲せぬ近代人の寵児となる所以である。しかし「選択は苦悩なり」という諺もある通り、すべてが自分の好みに委せられて見ると、何をいかに選ぶべきかという問題は大きな負担となって来る。何を読むべきかという問は学生によって最も頻繁に最も切実に提出されるところであり、それに対しては種々な助言が与えられている。また一般に読書法についても、古往今来多くの先哲や手近の先進によって種々に説かれて余すところがない程である。そうしたすぐれた人の卓説には固より遠くおよばないとしても、略々時代を同じうして唯ひと足さきんじているに過ぎない読書人の言葉にも、「選択の苦悩」を緩和する示唆なしとはしないであろう。

さて、しかし読書の回顧といっても、私の学生時代の読書は終始失敗であって、殆ど成果をあげなかったので、記すべき多くを持たない。せいぜい前車の覆轍の誡めとなる位であろう。顧みて中学時代から大学時代にかけて、徒に量的に多くを読んだだけで、有意義な摂取をなすことの甚だ乏しかったのを悲しまざるを得ない。多少とも実のある読書をしたのは大学の後半期以後であり、大学を出てから漸く充実した読書をするようになった。それは何といっても、自分の研究の目標がきまり、読書にも拠りどころができてきたからである。それまでの読書に効果が乏しかったのは、漫然と面白そうなものを漁って読むに過ぎず、養分を吸い取るための謂わば吸盤がなかったからである。この吸盤がなければ、百千の読書もただ素通りして行くに過ぎない。中学時代は止むを得ないとしても、高等学校時代にも、この吸盤ともいうべきものを持たなかったため、少なからざる読書がただ眼を傷める結果に終った。ここにいう吸盤とは、人生に食いこんで行く態度である。人生に食いこんで行く何らかの真剣な態度なくしては、すべての読書は、歯車がなくてから廻りをする車輪に異ならない。読書にも歯車がなければならない。読書における歯車は、人生あるいは学問に対する探求心である。私が大学後半期以後になって漸く多少とも実のある読書をするようになったといったのは、ドイツ文学に対する探求心をそそられるようになったからである。　もちろん高等学校時代には、人生を考えることを主要事とし、そのために西田哲学や阿部次郎氏の著作や倉田百三氏の作品を熱心に読みはしたが、余りに漠とした考え方であって、捉えどころがなく、従って読書に対しても歯車や吸盤の

働きをなすに到らなかった。

しかし探求心というようなものも読書や思索によって養われて行くものであるから、あてどのない摸索の時代があるのは止むを得ない。ただ私自身かえりみて漫然たる摸索の余りに長かったことを嘆かざるを得ない。

あてどのない摸索に何等かの方向を与えるようにするためのよい手段は、ある思想家乃至は作家と極力取組むようにすることである。自分の考え方や性情に適する書物にぶつかったならば、その著者のものをもっと進んで読んで見たいという気持が起こるのは自然であろう。その自然な気持こそできるだけ生かされ助長されて行かねばならない。そのためには、流行の著作を転々と追うて行こうとする欲望はある点まで犠牲にされなければならない。しかし先ず、傾倒し打ちこんで行くに適する思想家乃至は作家を見出すことが肝要である。それこそその人の読書の幸不幸を可成りの点まで決定するものである。かかるものを見出したならば、それに沈潜し、それを掘下げて行くことである。それは鉱脈の中に穿岩機を打ちこんで行くようなもので、隠れた宝を掘り起こすための有効な且つ必須な工作である。思想家から思想家へ、作家から作家へと、一冊ごとに移って行くのは、地表を流浪して行くようなもので、眺めは刻々に変わって面白いかも知れないが、潜んでいる宝を発見することはできない。ある著者に打ちこんで行くことによって、たとえその著者に不満を感じ離れて行くようなことがあっても、探求の精神は強く磨かれ、人格的な手応えを感ずるであろう。それが次の読書に対し非常に有力な菌

車となることは疑いを容れない。

学問的研究の場合には、ある問題なり思想なりを中心として進む方法と、ある思想家を中心にして行く方法とがあり得るが、一般的教養の場合には、人格的なものが重要な要素であるだけ、後者の方法こそふさわしいであろう。私も気紛れな読書を除いては、専らこの方法に従っている。それ故、自分の読書を振返って見ると、シラーを主として読んだ時代、ゲーテに没頭した時代――この二つは絶えず脈をひきつづけている――ヴィンデルバントに傾倒した時代、ヘルマン・ヘッセ時代、シュテファン・ツヴァイク時代、シュトルム時代、ハウプトマン時代、フランツ・ヴェンフェル時代、シュニッツラー時代、ハイネ時代、トーマス・マン時代、カロッサ時代などを可成りはっきりと区別することができる。もちろん飽きてしまってまで無理に一作家のものを続けて読もうとは思わなかったが―むしろ読んで行くほど興味が湧いて行くのが常である―これらの作家のものは大抵読み終えるようにした。それが自分にとって有効な読書法、研究法であったことは疑っていない。同時にそれは極めて楽しい方法でさえあった。その他、文学史や特殊研究の論文にも興味をもって読んだものが少くないが、また偉大な作家のものは好みに合わなくても常識として一通り読むように努めてはいるが、結局それらのものは、補助的な役割をするに止まっているようである。

序でながら、日本の本物では、芭蕉とその一門に傾倒した時代が最も長く、未だにそれは続いている。その他、自分の読書には、一茶時代、良寛時代、西田哲学時代、有島武郎時代、漱

石時代、鷗外時代、武者小路時代、芥川時代、山本有三時代、志賀直哉時代などが区別され、それぞれに懐しく思い出されるのである。やはりそういう風にして読まれたものの方が深い印象を刻んでいることはいうまでもないことである。

三

以上に述べたことを、以下少し具体的に補って見たいと思う。

私が読書に最初の興味と感激とを覚えたのは、平家物語であった、小学六年の頃か、扇の的のことを書いた読物の中に、平家物語の一節が引用されているのを読んで、その哀切胸を打つ美しい調子に魅せられた私は、中学生だった兄に頼んで大きな平家物語を買って貰い、熱中して読んだ。もちろん、話の筋を知らないところは、よく読みこなせなかったが、その時刻まれた印象は、いまだに鮮かに残っている。そのためか、中学の上級で高山樗牛の「滝口入道」を読んだ時も、平家物語の美しい模作のような感じしか受けなかった。現代の日本人は現代作家のものや飜訳物にくらべて、日本の古い傑作を読むことを億劫がるが、源氏物語のような難解なものならいざしらず、平家物語程度のものはもっと読まれて然るべきである。そういう私も日本の古典は学校で教わった以外に読んでいないものが多い。これは、例えばドイツの古典に対するドイツ人の態度などに比較して、自国の独自の文化に対する熱意の不足を示すもので、遺憾なことといわねばならない。私も万葉、芭蕉などを除いて日本の古典を知らな過ぎること

を告白せざるを得ない。高等学校時代に一ころ近松を読んだことがあった。こともあろうに修身の時間に、大教室の合併講義だったのを幸い、近松の心中物を読み耽っていて、監督の体操の先生に背中をつつかれて、はっとしたことがあった。しかし、そんなことのお蔭で、その後観た芝居なども手伝って近松物はいくらか頭に入っている。「天の網島」や「女殺油地獄」などは今もって大した傑作だと思っている。死を恐れぬ勇敢無比な日本人はその反面、平家物語や近松などに見られる詠嘆的感傷的無常観の持主であることを否定することができない。天命に逆らわぬ諦めのよい殉情が日本人の勇敢さの一つの前提になっていはしないかと思われる位である。

中学時代に読書の興味をそそったものは、蘆花の「思出の記」、藤村の「若菜集」、漱石などであった。多くの人にとってと同様、私にも藤村や漱石が今日なお愛読書であるのに反し、蘆花が全く遠のいてしまったのは時代の然らしめるところであろうが、彼が近頃再認識されようとしつつあるのを、私もまたうなずくことができる。彼はいわゆる美文家で「自然と人生」など、その当時盛んに愛誦されたものであるが、その描写は観念的で、繊細な芸術的感覚を示してはいない。しかしキリスト教的トルストイ流の新しい人間観、社会観をもって、まだ封建的な意識から脱しきれなかった明治時代に理想社会の建設を志した青年の物語として「思い出の記」は、何かしら新鮮な空気を当時の中学生にも吹きこんだのであった。この作品はゲーテの「ヴィルヘルム・マイスターの修業時代」のごとき一種の教養小説として注目に値する。ドイ

ツには教養小説（Bildungsroman）、あるいは成長小説（Entwicklungsroman）が非常に多く、顕著な小説は概ねこの性質のものであるといってもいい位であるが、かかる魂の発展を跡づけた小説は特に成長の途上にあるものにとっては、深い意義を持つであろう。英国の詩人ブラウニングが「私が重きをおいたのは魂の発展途上における出来事である。その他はほとんど研究に値いしない」と、いっているのは、教養小説の価値を裏づけるものである。ゲーテの二つのマイステルはその先蹤であるが、比較的新しいところでは、ズーデルマンの「憂愁夫人」、ヘッセの「ペーター・カーメンチント」、「車輪の下」、「デミアン」などが、ドイツでも日本でも広く親しまれている。「青い花」で知られているノヴァーリスの「ハインリヒ・オフターディンゲン」などもこの種のものに数えられる。日本では山本有三氏の長篇小説は「波」を始めとし「生きとし、生けるもの」、「女の一生」、「真実一路」、「路傍の石」などみな成長小説ということができるし、そういう性質が多くの真面目な読者を惹きつけているのである。私自身もそういう小説に興味を持つし、またそういう作品を勧めたいと思う。

四

同じ意味で、伝記を読むことを強調したい。特に伝記文学には古今東西にすぐれたものが非常に多いのであるから。私自身にも人格的に最も大きなものを与えてくれたのは伝記である。ことにゲーテの伝記は万人必読の書といってよい。高等学校時代に短いゲーテ伝をドイツ語の

教科書で習ってから、ゲーテの作品によってよりも先ずその生涯に魅惑されてしまった。事実その頃「若きヴェルテルの悩み」を読んだのであるが、訳の悪かったせいもあろうが、ナポレオンを始め無数の人々を悩殺したこの恋愛小説も私には何だかぴったりしなかった。その真価を味わい、自ら飜訳を試みるほど惹きつけられたのは、ずっと後のことである。それより先大学時代ビールショウスキー（Bielschowsky）の名著「ゲーテ」（鷗外のギョエテ伝はその抄訳）は全く私を酔わしてしまった。これこそ書物の中の書物だというのを憚らない。その後、ハイネマン、R・M・マイヤー、グンドルフ、ヴィトコウスキー、ヘルマン・グリム、ブランデス、バープ、エーミール・ルートヴィヒ等のすぐれたゲーテ伝を読み、その何れにもいかなる小説にもまさる面白さと学問的人格的魅力とを感じたのであるが、ビールショウスキーから受けた感銘は毫も減ぜられなかった。ゲーテの生涯こそ最もすぐれた芸術品だという言葉は、何らの誇張を含んでいない。実際私自身ゲーテの数多い作品中ほんとに面白いというものはそう多くなく、例えば抒情詩と諺詩のあるもの、「ヴェルテル」、「ファウスト」第一部、「詩と真実」、「修業時代」、「狐ライネケ」等であるが、上記のゲーテ伝やエッカーマンの「ゲーテとの対話」などには無条件にひきつけられるのである。

ゲーテにくらべると、シラーにはいい伝記が比較的少い。古くカーライルの、The Life of Schiller を始め、量的には必ずしも乏しくないが、前記のゲーテ伝に並び得るものは、ベルガー（Berger）の「シラー」位である。この書は、貧しきに身を起こし、流離艱苦のうちに、外

的な、そしてまた内的な自由のために戦い通したシラーの生涯を、あたたかい共感と学的な忠実さをもって描き、読者をしてシラーの不退転な崇高な人格に感激を抱かしめずには措かない。序でながら、私がシラーを多く研究し、伝記まで書くに到ったのは、彼の戯曲を通してではなかった。私は、一部の芸術至上派の人々のように、シラーの戯曲を無視するものではなく、近世における人間解放の歴史から見ても彼の戯曲を極めて高く評価するものであるが、私をシラーに深入りさしたのは彼の美学論文であった。特にヴィンデルバンドの「近世哲学史」に読み耽けっているうち、シラーの文化観、芸術観を述べたところに到って私は全くヴィンデルバントとシラーのとりこになってしまった。人間の二元性の調和こそ真の自由を意味する、そしてそれを可能ならしめるものは芸術であるというシラーの見解には今なお心から共鳴せざるを得ない。それから暫くヴィンデルバントに傾倒した時代があった。彼のプレルーディエン（序曲）にある諸論文は哲学的述作としては稀に見る美しいものである。これほど学的精神と美しき魂とを融合さしているのは稀有のことといわなければならない。

なお伝記で特に感銘をうけたものを少しあげれば、ロマン・ローランの「トルストイ」、「ミケランジェロ」、「ベートホーヴェン」がある。ロマン・ローランの「ジャン・クリストフ」はわれわれの高等学校時代を風靡した小説であるが、以上の三つの伝記は、ずっと後にドイツ留学中の私をして一時フランス語に熱中させたほどであった。

伝記とはいえないし、性質も違うが、倉田百三氏の「出家とその弟子」の親鸞上人や、波多

野精一博士の名著「基督教の起源」に描かれたキリストやパウロなどの宗教家も私を強く動かした。この三人の素朴で誠実で愛に満ちた人格には、思い出すごとに心を打たれずにはいられない。「善人なおもて成仏す、いかにいわんや悪人をや」といった、やさしく広い愛に溶けた親鸞上人の「歎異抄」は、人生に迷っていた二十一、二の頃の私にどの位光明を与えてくれたか分からない。同様に、クリスチアンでない私にとっても、聖書は離し難い書物である。その中には確にいくら汲んでも汲みつくせない深い愛の心が流れている。近頃ドイツの戦歿大学生の手紙を訳しているうちに、度々聖書の句が引用されているのに出くわしたが、特に「なんじ死に到るまで忠実なれ、然らば我なんじに生命の冠を与えん」（ヨハネ黙示録二ノ十）という言葉が幾度も引かれているのを見て、感動を新たにした。これは全聖書中私の最も好きな言葉である。

まことをもって貫かれたものこそ真に尊いことは、人生のすべてにわたっていわれることであるが、書物についてもこの平凡な真理は常に最高の真理である。どんなに面白くても技巧にすぐれていても、作りものは結局いけない。全人格的に真実の力で迫って来るものこそ真に人を打つのである。「人間こそ人間にとって最も興味あるものである」というゲーテの言葉に私は心から共鳴するものであるが、どんな形で人間を描くにせよ、ホイットマンが歌っているように、「これは書物ではない。これに触れるものは人間に触れるのだ」と、いうほど、作りものでない真実な本であってこそ、真の読書に望ましいものであろう。

読書の回顧

高木八尺

一、背景

元来私程読書ということを語るに適しないものはないと思う。私はこれ迄、楽しみに読書をするという経験を余りもたない。一口にいえば私には読書は、つとめと感じてこれに対することが遥に多く、これを楽しみとして味わうことの経験が誠に乏しかったのである。

もっとも幼い頃の記憶に、父の書斎兼応接間であった「西洋館」の大広間で、天井まで届くような馬鹿に高い本箱（それは今は正則中学校の校長室にあるが）の中に "Children's Ever-green" とかいう題の綺麗な絵入の子供読物等があったこと、物心つく頃台に上り背のびしてそんな本を探したことなどが未だに思い浮ぶ。又中学の中頃から、親しく父からロングフェローの「村の鍛冶屋」の暗誦を教えられたことや、私に恵まれた師友の導きによってあるいはピルグリムス・プログレスの講読を聞き、その他の英文学の名作のいくつかに触れ、その思想の壮美を朦ろながら垣間みたことは、何といっても私の心に抜くべからざる種子を播いたといえ

ようその意味では知らず識らず私は本ずきにはなっていたのであろう。

中学上級の頃、私は多読であった。思えば指針もなく読みあさり、かつあせる状態であった。トルストイを読んでいた頃、父が "Cyrus the Great" という子供のための歴史書を買ってきてくれ「こういうものの方が今はよい」と一言いったことは未だに覚えている。――その本は書架に突込んだ儘読まなかったこと、私も世のすべての「子供」と異らない。しかしその本は今尚私の「読みたいと思う本」の一冊であるので、今年こそは冬の休み、殊に父の命日にでも、暇を作って取り出して読みたいと思っている。

中学の終りから高等学校時代を通じ、私は内村鑑三先生の深い御恩顧を受けた。先生の御著書は精読したといえると思う。一つには先生の集会へ出席の許可を願ったところ、自分の著書を読み尽した後、再考三考熟慮の上決心が動かなければ許そうというのが先生の言葉であったことにもよろう。これらは皆過ぎし日の幽しい思い出である。いうまでもなく、一方で聖書はこれを、唯一の書という心持で読んでいた。殊に英語改訳版に最も親しんだ。

以上のような背景をもつ私が、それならばつとめとしての読書とはどんなことをやったか、実は取改めて述べる程のことのないのを恥じ入る次第であるが、失敗の記録もあるいは却って見らるる人のために役立つこともあろうか。

二、望洋の嘆

一高の英法を志して幸に入学しえた私は、今まで何となく心を引かれてきた英文学と、遂に袂を別つ時がきたように覚悟をきめた。一面その以後と雖、例えば Whittier, Cowper, Tennyson 等には殊に親しみを覚え、愛読を禁じえなかったことはあるが、甚だ主観的な読み方であり、表面的の触れ方であったことはお断りするまでもないことと思う。

その時代に、私は自分の敬う偉人の伝記を読んで益せられたことが多かったと思う。リンコーンとリヴィングストンとは殊に忘れ難い足跡を私の心に残した人達となった。セルヴァンテス（Cervantes）の生涯もまた強く私の胸に刻まれたのであった。

私はその頃から読書の方針についても漸く意識した努力をしたもののようである。生来非常に読書の速力のにぶい私は、人一倍良書の選択に意を用いなければ、生涯を費すとも世界の古典の中手を触れうるのは僅に九牛の一毛にしかずして終る他あるまいという考えが、私をして飽くまで愼重ならしめたと思う。そして書物は真に価値あるものだけを選んで読めという態度は、私が尊敬する師友の影響を受けつつ感得したところであったと思われる。

私は事物の判断、道理の識別に役立つ頭の訓練を心掛けて置きたいという漠然たる念頭から一高入学後選択しぬいた書物としてミルの功利論（Utilitarianism）をとりあげて、これを読まんとする懸命の努力を始めた。しかしそれは私には到底歯の立ちようもない難物であった。兎にも角にも一と通り目は通したが、一物も身についたものとしてはないように思う。それは完全な失敗といえよう。メンタル・ジムナスチックスもさることながら、これ程読むに苦しみ、

何物をも摑みえなかったという感のみ後に残った本はない。ただ一方では何やら遠泳をした後の悦びという風なものを僅かに懐きえた位の效があったとでもいうことをえようか。

一高時代の、つとめとしてする読書の苦経験はこれを筆頭とするが、難物ながら今に尊い資産と思うのは、ギボン、ローマ史の四巻である。私が蟷螂の斧を振って無謀にもこの大著の攻撃を企て初めたのは、たしか一高の初の夏休みであった。そして若い頃アルプスの登山にえたところどころの一瞬時の輝く記憶を今なお心に刻む宝とするように、ローマ興亡史のそこここの、雲間を洩れる日光にもまがう一節二節は、折にふれて蘇る貴い記憶である。――正直にいってこの企ては必ずしも順序の点からみて賢明な選択とはいえないのであり、むしろ無謀であったと評すべきであろう。想えば私のゆき方は読書の路は峻嶮であると、難業苦行を初めからきめてかかる態度であったのである。

かかる方法で私は今日までのことをいっても、実は殆ど隻手に数えうる程の書物をしか読みこなしていないのである。年々に「読みたいと思う本」の数は増すのみであって、志はあれども力伴わざる状態を続けている。

三、計画ある読書

一九一九年十二月八日、当時在米中であった眼を病める前英国外相グレー卿（Viscount Grey of Fallodon）が、ハーバード大学にきて演説をすることになった。丁度同大学に学ん

でいた私は、勿論非常な期待をもって堂に溢れる程の聴衆の一人となった。――グレーは世界大戦開戦当時の英国外交の担当者である。戦後の重大問題をひかえて、彼がもしその真意を吐露して米国与論に訴える機会を捉えんとしているならば、それはここハーバードでなされるのではあるまいか、というのがアメリカ流の考え方であった。そしてその米国の聴衆の一人となって、私も実は同じ期待をかけて彼をまったのである。

しかるにこの期待は痛烈に打ち破られた。彼は世上論議の題目であった「国際聯盟」についても、「大戦の責任」についても論じなかった。そして「人生の娯楽（リクリエーション）」について語ったものである。彼はスポーツを語り、釣を語り、読書を語り、自然を語り、淡々として哲人の静寂さをたたえてみえた。ことの意外に、私は禅僧の一撃を思わしめる動揺を受けたのであるが、やがて彼の胸底より湧きいずる娯楽論に魅了せられずにはいられなかった。

殊に彼が、かつて英国外相の劇務に服せし頃、政務の繁忙と政党政治の心労より超脱して、心を悠久の世界に翺翔せしめるため、静なる別墅の書斎に、「人類の過去の偉大なる業績と思想とを扱う」歴史の名著を繙くを慣わしとしたことを述べ、好んでギボンのローマ史を手に取ったことを語った時、私は心に今に離れえぬ感動を覚えた。彼はその時テニソンの言を引いて、"I like large still books," といい、更に、"And great books not only give pleasure and rest but better perspective of the events of our own time" と述べたのであった。

しかし私の、最も強く彼をして語らしめたいのは、彼の慫慂する良書選択乃至は「計画ある読書」の方法である。彼のひかえ目のいい方をもってすれば、「人生のすべての善きものにおけると同様に、読書の娯楽にもまた、多少の計画（planning）を必要とする」のである。

彼の勧告するところは要するに、平素各人は、例えばその道の人に尋ねる等心を用いて選択した歴史・文学・哲学等各方面を含む読書書目の表を予め作り置くにつとめ、更に一二の書物はこれを手近に備え置くこととし、機会がくれば持ち設けて、その計画に従う読書を実行すべきであるという人生の娯楽としての読書法である。

いかに多忙な人と雖も、暇の絶無な人はない。むしろ多くの場合は、暇無きに苦しまず唯だ無計画なる乱読が人々を真の良書から遠ざけている。閑暇をえれば直ちに手に取るべき良書を常時念慮して備え置け、機会は必ず到るのであり、又かくのごとく準備計画されることによって読書の楽しみは倍加する、というのがグレーの読書法であって、この単純な示唆も彼の口を通じてくれば実に千鈞の重きを加えるといえよう。

私としては唯これに附け加えて、娯楽の読書において尚かつ然り、況んや教養を志し、人格の成長を冀う読書の法においてをやといえば足りると思う。蓋し乱読の弊は単に良書を縮くの機会を奪うというのみに止まらない。その害は時に、成長途上にある各自の性格に償い難い損傷をすら負わしめるに至ることがあるのである。翻って又一歩を進めていうならば、グレーにおいては、実は人生の愉悦と人生の義務とは、渾然として融合して一体をなしていたことと少

しく彼を翫味する人は知りえたところであったのである。

世界大戦の労苦辛酸をその痩軀に刻み、黒眼鏡に泛わせた老政治家が、人生の娯楽を課題として読書を論じた姿に、私は強健な英国ステーツマンシップの片影を覗ったように思ったが、グレーに対する私の興味はその後も時と共に加わった。

四、グレー卿と小鳥

同じ前記の演説の中で、「計画する」ということに因んでグレーは、往年先の大統領ルーズヴェルトが、アフリカ猛獣狩の帰途凱旋将軍のごとき歓待を蒙りつつ欧洲を訪れた際、その二年前に計画した「英国の小鳥の歌を聞くための田舎への散歩」を忘れもせずグレーと共に唯二人で実現したことを述べ、旁々ルーズヴェルトの驚くべき小鳥に関する知識について語り——例えば、林野を跋渉してゆく間にルーズヴェルトが、ふと鷦鷯（golden-crested wren）の声に耳を留め、この歌は米国で聞くのと同じ鳴き方だといったこと、そして後日鳥類専門の研究家にただしたところ、正にこの最も小さい鳥の歌のみが、英米両国で全く同じ鳴き方と称すべき殆ど唯一の歌であると教えられて、今更のごとく数多き鳥の歌の中にこの事実を聞き別けたルーズヴェルトの耳の訓練に敬服したことを語って——ハーバードの誇りとするその一出身者へのトリビュートとした。私は当時、「自分達はかまわぬが、小鳥がインタヴィューは好まぬから」といって、新聞記者等を停車場に置きざりにして、小鳥の歌を求める人里遠く歩みいで

「約廿時間全く世界から喪失した」という前米大統領と英国外相との閑雅を、この上なくうれしいものとして聞いた。しかし今にして思えば、話しはそれに尽きなかったのである。

約五年前グレー卿はその多端なりし七十年の生涯を終った。その数年前彼は"The Charm of Birds"と呼ぶ著述を遺していることは、知る人も多いようである。恐らくは彼は晩年に、達人の冷徹をもって歴史に静なる慰安を求め、目前に展開する国際情勢の走馬燈を心を鎮めて眺めていたであろう。鳥類の世界の門外漢である私は、彼の新著についてその薀蓄を覗うこともせず、ついその儘に過ぎていた。

ただ彼の滞米四カ月の大使としての使命に至っては、益々世界の外交史家の関心をそそらずには措かないものがあった。漸く明かとなりきたった史実をたどるに、グレーの使命の主眼が国際聯盟の上院による承認問題についてウィルソン大統領に説いて、同規約に対する上院の決議によるいかなる留保条項も、聯合国側としてはこれを受諾する用意あることを、認識せしめるにあったというのが、ことの真理であったと信ぜられる。

しかるにも関らず、ウイルソンはその年（一九二〇）初秋全国勧説旅行の半途に力尽きて倒れて以来病臥の身なればというのを表面の理由として、かつ一面にはハウス大佐の誠意と叡知とを傾けた最後の忠心をも斥けつつ、遂にそのために、ワシントンにきたグレー卿との会談を拒んでしまった。――かくて聯盟の将来は永久に閉され、その運命の星は地に墜ちたのである。

かかる世界の一大事に関する深憂を心に抱きながら、よくもグレーは友邦の青年に読書と自

然とに見出す人生の楽しみを説く雅懐をもったものかなと、敬服の念を加えていた私は、今夏測らずも英国詩人ホジソンの口から、その帰国の前夜斉藤教授の催された惜別の宴の席上、グレー卿を談じた片言に、「彼の描くすべての小鳥の挙動を注視すれば、その一羽一羽の背後からグレー卿彼自身の姿が覗いているのを認めうる」と、いう詩人らしい警句を耳にした。

これを機縁として私は再び読み古した "Recreation" の小冊（前記演説が単行本として出版されたもの。後に Fallodon Papers に収められた）を取り出して、グレーの描く小鳥を眺め返した。果せるかな、そこに大使グレーの使命を離れては解し難かった切々の言辞が初めて幕を落したように私の眼に明かとなったのである。その一節にいう――

「しかしながら国の異なるに従って、物の見方もまた異る。大洋をさしはさみて相隔る相岸にあるとき、われわれは単に政治問題のみならず、自然科学の事象に対しても、それぞれ異る物の見方で眺めていることに気附こう。先日私はワシントンから程遠からぬところで、静に物を考えさせられた。私はこの〔米〕国がいかに広大であるか、その河がいかばかり巨大か、その距離の大きさ、総じてこの国の尨大さを、自分の心中に思い廻らしていた。そしてふとこの〔上述したルーズヴェルトの耳を留めた〕golden crested wren のできごとを思い浮べていた。しかして私は、英国のような蕞爾たる一島国が、――一時間五十哩の急行列車で東西にでも南北にでも十五時間も走れば海に落ちずには済まないというところで――一大陸をなすこの国のごとき大国と共通にもちうる唯一の歌は、最小の小鳥の歌となるのであ

ろうかと、考えたのである」と。

今にして思えばこれは大使グレーが、ワシントンにおいてその志を述べえず、しかも世を憂えて已み難き耿々の心から、小鳥の歌に託して述べた国際聯盟の留保受諾を諷する米国民への呼びかけであったのであろうか。

五

かく私は読書においても歩みが極めておそく、限られた僅少の書を遅々として読み、又牛のごとく反芻している状態である。そしていつの頃にか、カーライルの Sartor Resartus 幾節やエマソン、American Scholar や、タムソン (Francis Thompson) の The Hound of Heaven やの名編は、よく解らぬながらも、忘れられぬ心の糧となったといえよう。読みえたりし本の少なきを可とする心は毛頭もない。私にはこれよりできなかったというのが実情である。

しかし乏しい読書の回顧から推しても、読みたいと選んだ本の表を作り置くということは、何人にも勧めえる事柄と思う。若し叶うならば、一生を通じて読むべき主要の書物中少なくも数種はこれを早き頃選定して、適当の指導者の言を参酌しつつその繙読の順序迄熟慮し置くこととしたい。そして時と共にこの計画ある読書の書目表を完成してゆくことが望ましいのである。こうすることが、すべての人の読書の效果をより多くすることを疑わない。

読書の回顧

末川　博

ざっくばらんにぶちまけて語ることにしよう。そうでないと回顧だの思い出だのというようなことは、作りごとのたわけになってしまうか無意味な自慢話になってしまうのが落ちだから。つまり、ありのままに包まず飾らず自分の経験したところを語るところに、本当の回顧があるわけだから、恥をさらしても恥にならず自慢をしても自慢にならぬという前提で話をするのでなければ、うそだと思う。

それにしても、回顧談は私には苦手である。まだ過去をふりかえって昔ばなしをするほどの齢にもなっていないと――少くも主観的には――思うし、いつまでも書生の気分で「壮心未落風月長相守」といったような心持ちで展望に生きようとしているのだから、回顧談は余りありがたくない。とりわけ、読書の回顧ときては、全く柄にもないような気がする。これまでかなり書物を読んでいるものの、人にお話するような意味での読書はありえないし、いわんや若い諸君の参考にもなろうかというような重宝な読書方法などを持ち合わしている道理はない。しかも、この動きの激しい時代に学生生活を生きていられる諸君に向って、二十年前に学生生

活を終えたものが読書の回顧談を試みるごときは、時代錯誤か環境錯誤かないしは主体錯誤とでもいったような気がする。

だが、とにかく、勇を鼓して、過去をふりかえってみよう。

私は山口県の東部で岩国と徳山とのほぼ中間に位する山間の盆地の農村で育った。海というもの汽車というものをみたのが、高等一年生の時なのだから、蜘蛛のように電線が張ってあるという銀座の繁華な話を読本で読んでも、電話のことを理科で教わっても、そんなことは全く別の世界のことだと思っていた。ただ一度、少年世界という雑誌を買ってもらって、それを何遍もくり返して読んだことがあるのと、友人がどうして手に入れたのか、中学世界の古本を持っていたのを借りてわからぬなりに隅から隅まで読んだのと、それだけが私の記憶に残っている。

十四才の時に岩国の中学校に入った。そして下宿生活を始めた。月に十銭づつの小遣をやるから、好きなように費えといわれて、無性にうれしかったが、書物や雑誌を買うには足らなかった。そのせいか、煎餅や飴玉を買う方がよかったためか、とにかく、読書などということは、教科書以外には、しなかった。それに、中学校の規律が恐ろしく厳重で、音楽は一切まかりならぬ――もっとも後に尺八だけは許されたが――小説は読んではいかぬ芝居はみられぬというような調子だったから、四・五年生になってからでも精々英語研究といったような受験のための雑誌を読む位が関の山であった。そしてポケット論語とか孟子新註とかいったような書物を

珍重していたことがある。それにもともと数学の方が好きで工科志願だったので、文芸方面にはとんと無関心であったわけである。強いて中学時代に読んだものを考えだしてみれば、里見八犬伝とか蘆花の自然と人生・寄生木などといったようなものにすぎない。

中学時代には工科志望だったが、フトしたはずみから高等学校では当時独法科と呼んでいた一部内類を選んだ。明治四十三年京都にでてきたのである。一学期間デル・デス・デムなどドイツ語の片端を覚えたりしていたが、いったいこんなことをして学校にゆくのが何の意味があるか、というようなことを考えだした。その年配で陥り易い懐疑的なスランプへ落ちた。人生の意義とか目的とかを究明しようと焦りだしたのである。そしてとうとう先生や友人の諫止するのもきかないで、敢然郷里に引きあげた。百姓になる決心をしたのである。牛の尻をたたき山に木を伐り田の草をとった。しかし、心の底には空虚なものがあって落ちつかなかった。端坐して夜を徹する、宗教殊に真宗に関する書物を読む、色々と苦しみ色々と工夫した。その当時の心境を語ることは、読書に無関係だから、ここには省くが、心機一転して再び新学年に京都にでるまでには、私自身としては随分悩みつづけた。それは私にとっては一生涯を通じての人生観ないし社会観の基盤をなしているかのように思う。

再び高等学校の一年生になった。濶達たる気持ちで快馬一鞭、学問をしたいという希望に燃えていた。そして無茶苦茶に書物を読み始めた。全くの濫読である。読む心構えに一定の方針もなければ、また読む書物の範囲について別段の選択もないという有様であった。学校の日課

が済むと、図書館に入って読む、友達や貸本屋から借りては下宿で読む。何のために読むか、理窟はなかったように思うが、中学時代に小説を読むことさえ禁圧せられていたことの反動がきたのであったろう。だから、文芸物を読むにしても、それを鑑賞するとかそこに思想的なものを汲みとるとかいうようなことはなく、ただ読むことが面白かったから読んだのだというほかはない。しかし、私自身の性格から何でも知ろうとする意志がはたらいて、広い意味での知識をえようという欲望に支配されていたことは否定できない。田舎からでてきた私には、各地から集った友達殊に都会で育った連中が色々の方面で知識を豊富に有していることが驚異であった。ある者はショウペンハウエルを語りニーチェを説き時にカントを口にする。ある者は文壇の傾向について浪漫主義を論じ自然主義を評する。そこへ歌舞伎を通がってまくしたてる者もあれば、当時劇壇を賑わしかけた社会劇や心理劇を喧しくはやしたてる者もいる。いずれも歯の浮いた浅薄な話であったにちがいないけれども、漱石や鷗外のものさえ碌に読んだことがなく、まして芝居らしい芝居など観たことのない私にとっては、驚異でもあり脅威でもあった。そしてとり敢えずこれらの連中の仲間入りをして話ができるだけの知識をえなければならぬという意識が潜在していた。広い意味での知識をえようという欲望が、私の濫読雑読に拍車をかけたというゆえんである。

　こんな調子で無方針無定見に読書したのであるが、他方には日曜日にはテクテク大津まで歩いてボートを漕ぎにでかけるといったようなこともしていたのだから、分量の上からいえばむ

ろん大したことはなかった。それにしても大たいどんなものを読んだであろうか。一々の記憶はないが、次のようなことが思いだされる。

文壇ではまだ自然主義の旺盛な時代であったから、そしてこの傾向の作物は若い者にとっては最も入り易いものでもあったから、独歩・花袋・秋声・白鳥・泡鳴などのものをわけもなく耽読した。それと同時に徳川時代の軟いものにも触れてみたことがある。殊に当時義太夫を聞くことが一部の者の間に流行していたので、私もその仲間入りをして――もっとも郷里の田舎では浄瑠璃がはやったことがあって幼少の頃から父がうなる浄瑠璃をきかされていたからその点については一応の知識をもっていたが――、従ってまた近松物や出雲の物を読み西鶴の物に及ぶという風に、一時はそんなことに熱心になったこともある。しかし、浪漫主義の思潮にも興味を持ち、青年らしい情熱をもって樗牛の小説や論文を好んで読んだ。乏しい財布をはたいて須らく現代を超越せざるべからずと刻み込んである樗牛全集の古本を買ってきたときのうれしさは今でも忘れない。

外国の物は語学の貧弱さから読もうにも読めなかったが、ベーコンの論文集やエマーソンの英雄論などの袖珍本を買ってきて辞書と首っぴきで読んでみたことはある。マコーレーの演説集は学校の教科書であったけれど、わからぬままにとにかく学校で習わぬ部分まで読んでしまった。そしてどういう積りであったか、一時ナポレオンに関する興味を湧かして、高等学校の図書室にあった何冊かの英書を読んで、抜き書きをしたノートを作ったこともある。しかし、

飜訳物はどうも面白くないように感じたのか、シェークスピアの劇を逍遙の訳によって二・三読んだことにとどまる。

その頃、文芸協会が組織を改めてイプセンの人形の家を上演するようなことになった。私たちが英語を習っていた厨川白村先生の近代文学十講がでて（明治四十五年、私が二年生の頃）学生層にも大きな話題を提供した。自然主義の行詰りから分解作用が起って、ネオ・ローマンティシズムといったような傾向が擡頭し、当時京都大学の文科の教授だった上田敏先生から新しい文学傾向についての話などきいた。谷崎潤一郎という名が学生の間で恐ろしい魅力をもって伝えられてきた。鈴木三重吉・森田草平、そんな人の書いた物を読んでいないと、話の仲間に入れてもらえぬように思うこともあった。漱石の彼岸過ぎまでが刊行せられたのもその頃である。

そこへ、思想界の指針を与えるものとして、オイケン・ベルクソンの新哲学がもち込まれ、茅原華山・大住嘯風などが、われわれ学生にも判るようにこれを紹介して呉れた。全く生半可であったけれども、とにかく、新人生の創造とか新生命の展開とかいうようなことを、演説会でもしゃべらねば一人前でないかのように取扱われた。大正二年頃にオイケン・ベルグソンの哲学が最も喧しく論ぜられたかと思う。そこへ、タゴールの紹介が一時多忙を極め、何かよく判らぬことをわれわれも読まされた。タゴールがノーベル賞金を受けたというので急に珍重されだしたのであったかと思う。

ドイツ語は成瀬無極先生や茅野蕭々先生などに教わった。英語は厨川白村先生の皮肉を浴びながら三年間教を受けた。島華水先生や安藤勝一郎先生などからも英書の講読を授けられた。ドイツ語は一週十四・五時間もあったのだから、二年生の半ば頃からは多少自分でも読めるようになったので、レクラムの安い叢書を買ってきては読む癖がついた。それもドイツ固有のものはなかなか読めぬので、他国語からドイツ語に飜訳せられているものをよく読んだ。ドイツ語に飜訳せられているものは、原文ほどに味はでないにちがいないが、そんな味はどうせわれわれに判りっこないのだから一向に差支えなく、しかも読むには何といってもドイツ固有のものより平易なのがありがたかった。そこで、そういうものを読んだわけであるが、それは外国の名著を知りうると同時に、ドイツ語の勉強にもなるので、一挙両得といったような勘定であった。とにかく当時喧しくもてはやされていたイブセンのものやトルストイのものなどは、大抵レクラムで読んだ。イブセンの人形の家の上演に次いで暫くしてトルストイの復活が芸術座によって上演せられた頃、カチューシャの歌を教場で合唱して叱られたこともあった。イブセンやトルストイのものに限らず、ツルゲネーフ・ゴールキー・シェンキーヴィッチなどのものからシェークスピアやアーヴィングなど英語のものに至るまで、ドイツの飜訳物を読んだ。勿論そう沢山読めるわけではないが、とにかく世界の名著と呼ばれるもののなにがしかをこうしてドイツの飜訳物で読むことができたのは、大たいレクラムのお蔭であった。

こんなことで高等学校の三年——実は私には四年であったが初の一年は百姓で暮したから正

味やはり三年――は済んだ。今から顧みてもまことにありがたい時代であったと思う。就職のことを考えるでなし、入学試験のことを心配するでなし、それに学校ではドイツ語と英語とが大半で試験といっても別段苦労はいらぬし、それに学生というので世の中からは万事大目にみてもらえるし、全くありがたい境涯におかれていたのである。むやみやたらに読んだことが、よかったか悪かったかまたどれだけ役に立ったか、そんなことは今でも判らぬけれど、とにかくそういうことが許されたのは、何といっても仕合せであったにちがいない。殊に田舎で育った私にとっては、中学時代に文芸とか思想とかいうものから絶縁せられていた私にとっては、この上もない仕合せであったと思う。

それに、私はその頃毎年わが国に派遣せられていたドイツの将校に日本語を教えること――それは、私にとってはドイツ語を習得することであるが――を毎夏休暇に引受けていたのでドイツ語にしたしむ機会に特に恵まれていた。というのは、高等学校の一年の終り頃にある関係から「ドイツの将校が日本語を教えてくれる学生を探しているが、君ゆかんか」という話があったのを、「よろしい、僕の程度のドイツ語でもやれるものなら引受けましょう」といって、それからライスという少佐と一緒に箱根にでかけたのが縁になったのである。今から考えると、ドイツ語の初歩をかじったただけで語学の交換をしようというのだから、随分大担でもあり横着でもあったわけである。ドイツの将校は二年間わが国に留学することになっていて、一年間はわが国の言葉や生活様式などを覚えることに費しあとの一年間は聯隊附になる都合であったが、

毎年二名ずつ派遣されてきていた。そしてかれらの間では京都の三高に末川という学生がいるということがいい伝えられていたものとみえて、その翌年もその翌年も夏休暇には新しくきた将校に私が日本語を教えることになった。大正三年すなわち高等学校を卒業した年の夏にはウイーセナーという大尉であったが、この人はベルリンの東洋語学校で相当よく日本語を勉強していたから、漢字なども一通りは読めたので、専ら日本の軍事関係の文献を飜訳することになり、私もそれに協力したのである。神戸で一緒に仕事をしている最中にあの大戦が勃発した。大尉は青島にでかけることになったので別れた。こんなことは読書には別に関係がないけれども、私としては一の思い出であり、また比較的にドイツの書物が楽に読めるようになった大きな原因をなしていると、今も感謝している。

大正三年の秋京都大学の法科へ入学。ここで初めて専門の学問をするようになったわけであるが、実をいうと、法律学を勉強するということについては余り興味をもつことはできなかった。もっと青春の血をたぎらせて感激的に勉強することができたら愉快だろう、というような気持ちが常に脳裡から去らなかった。毎日講義をきいてノートをとってきては、少しずつ手入れをしておくけれども、それはただ一の仕事のように思われて、しかも試験を受けるための、――また少しでもよい成績をとるための――準備工作として義務づけられた仕事のように思われて、心から歓喜に充ちて勉強することはできなかった。そこで、おのずから法律以外のものを読むことが多くて、高等学校時代からの惰勢でやはりドイツのレクラムのうちの文芸物を渉

ったり、武者小路実篤・有島武郎・志賀直哉などの新理想主義といった傾向のものを読んだりしていた。また経済学には比較的に興味をもちえたので、英独の専門書も二・三拾い読みをしたことがある。社会政策学会の大会が京都で開かれてその講演会を聞き、心を動かされてその方面のものをのぞいてみたこともある。

世界大戦は、私共が大学生である間続いた。未曾有の好景気がもたらされた。そして労働運動がだんだん盛んになった。友愛会の活動が学生間の問題となり、デモクラシー論が喧しくなり、マルクシズムが問題となりだした。しかし、大正六年の夏大学を卒業する頃までには、そういった社会問題もそれほど切実ではなく、殊に平静な京都にいたために、その方面について特別の書物を読むというようなこともなかった。そして毎日おなじようなことを繰り返して二年間をすごし、二年が済んだ時にある先生からすすめられて急に高等試験の行政科を受験することにきめ、一夏信州の碓氷峠の上にこもって受験勉強をした。やがて農商務省に勤めることにきまって、卒業すると共に東京にでたのだが、辞令をもらうという日の前日やめた。それからまた京都に帰り大学院に入って民法の勉強を始めたようなわけで、全く平々凡々の途を進んだのである。もっとも、その頃から社会問題が喧しくなって、学生間にもそういう方面への関心がたかまり研究も始ったけれども、既に私の学生生活はともかくも一応終結を告げていた。

全く碌でもないおしゃべりをした。十年一昔といえば、二昔以上の昔ばなしであるから、今の学生諸君にとっては、およそ意味のない話だったと思う。しかも、この二十年余りの間にお

ける世の中の動きは実に激しい。それぞれの時代の空気を吸う者には、それに相応ずる意識があり、従ってまたそれに沿うての読書があるはずである。そして人には各々与えられた環境があるとともに自分自身だけにはいつわることのできぬ性格があるのだから、人はそれぞれ読書についても途を開いて行かねばなるまい。

どんな書物を読んだらよいかとか、学生諸君に推奨すべき書物は何かとかいうような質問を受けることがしばしばある。まことに結構な質問ではあるが、返事には困る。私は大抵の場合に次のような意味の答をする。

新しい時代の人々はそれ相応の読み物を自ら見つけられたらよいと思う。どんな書物を読もうかと迷ったり人にきいたりする暇に、図書館なり書店なりに行って自分で探した方がよいのではないか。殊に今日は和漢洋の名著といったようなものは何々文庫とか何々叢書とかいった手軽な形態で刊行されているのだから、自分で選択することは極めて簡易になっている。何も読むべき書物を探すのにそう苦労をする必要はないではないか。役に立つとか為めになるとかいうような功利的な考えだけで読書をするのは、本当の読書ではあるまい。殊に学生諸君においてはそうである。大たい、どんな書物を読んだらよいかというような質問をすること自体が余り読書をしたくない証拠ではなかろうか。本当に読書をしたいのなら、そんな悠長な質問をしておれるはずはない。

少々荒っぽいようだけれども、自分の為めの読書であるならば、自分で書物を選び自分で進

んで読まねばうそだと思う。少くとも高等学校や専門学校以上の学生たるほどの人々は、いつまでも他人に頼って読書すべきではあるまい。他人からすすめられて読むものも悪いとはいわぬ。だが、そんな読書が身につくかどうか怪しいものである。濫読雑読がよいとはいえぬけれども、何を読むべきかというようなことを尋ねまわっているよりはましだと考える。私は濫読雑読をやったのだが、それが悪かったとか損をしたとか考えたことは嘗てない。こういう私の経験からいえば、好きなように好きなものを読むべきだという結論が出て来る。学生諸君は大たい暇を有しているのだから、その間に大に読むがよいと思う。況んや名誉といわれるほどのものはどれを読んでも何ものかを教えられるにちがいないのだから、遠慮や躊躇は読書には禁物であると断ずる。

あとがき

故河合栄治郎教授が編纂した学生叢書の盛名を知る人は決して少くないであろう。「学生と教養」、「学生と読書」など一連のシリーズは文字通り洛陽の紙價を高からしめ、どれだけ学生へのよき導きとなつたか知れないのである。しかるに戦後この叢書の再刊は一部分にとどまり、その多くは多大の價値を藏しながら、空しく一般の目に触れることなくして、埋れていたのは遺憾である。ここにおいて本会はこれら戦後未刊の学生叢書のうちから、珠玉の如き諸篇を選び、これを新たに編纂して、若き人々の机上に贈ることにした。これが嘗ての如き輝しき役割を再び果すことを切に望むものである。

筆者紹介

（生年及び出生地、最終學校、現職、専攻、主要著譯書の順）

河合栄治郎　明治二四年東京都・東大政治学科・前東大教授（昭十九歿）・社会政策・「トマス・ヒル・グリーンの思想体系」「社会政策原理」「社会思想史研究」「学生に与う」

山田珠樹　昭和十八年歿、専攻仏文学・随筆・著書「ゾラの生涯と作品」「フランス文学覚書」「東門雑筆」

吹田順助　明治十六年東京都・東大独文・中大、千葉商大教授・独文学・「ドイツ近代思想史」「ヘッベル」「ドイツ精神史」

杉田直樹　明治二十年東京都・東大医学部・名大教授・精神病学

岸田日出刀　明治三十二年鳥取県・東大教授・建築意匠、設計・「日本の建築」「過古の構成」「日本建築特性」

出　隆　明治二十五年岡山県・東大哲学・前東大教授・古代ギリシャ哲学・「ギリシャの哲学と政治」「哲学以前」「西洋哲学史概説」

倉田百三　昭和十八年歿・専攻劇作、評論、小説・著書「出家とその弟子」「愛と認識との出発」「俊寛」

三木　清　昭和二十年九月歿・専攻、哲学・著書「構想力の論理」「哲学ノート」「続哲学ノ

ート」「パスカルに於ける人間の研究」

木村健康　明治四十二年福岡県・東大経済・東大教授・経済原論、社会思想史・「再建の前進」シュムペーター「理論経済学の本質と主要内容」

阿部次郎　明治十六年山形県・東大哲学・東北大名誉教授・哲学、美学・「三太郎の日記」「秋窓記」「人格主義」

斎藤　勇　明治二十四年宮城県・東大英文・東京女子大学長・英米文学・「英文学史」「シェイクスピア研究」「アメリカ文学史」

長与善郎　明治二十一年東京都・東大英文中退・専攻小説・「竹沢先生という人」「青銅の基督」

高橋健二　明治三十五年東京都・東大独文・独文学・著「ゲーテ」「ゲーテと女性」「ドイツ作家論」訳「若きヴェルテルの悩み」「ファウスト」

高木八尺　明治二十二年東京都・東大法・東大教授・米国政治史・「米国政治史の研究」「米国政治史序説」

末川　博　明治二十五年山口県・京大独法・立命館大総長・民法労働法「権利侵害論」「民法債権総論」「民法総則」

昭和二十七年九月二十日印刷
昭和二十八年十二月五日重版発行

定価九〇円

現代教養文庫
37

読書と人生

編者　社会思想研究会

発行者　東京都千代田区神田駿河台三ノ七
土屋実

印刷者　東京都千代田区神田三崎町二ノ十二
加藤保幸

発行所　東京都千代田区神田駿河台三ノ七（駿台ビル）
社会思想研究会出版部
電話神田（25）〇七八一番
振替口座東京七一八一二番

「現代教養文庫」刊行の言葉

戦後日本の混乱は祖国の復興に思いを致すものにとつて、深き憂いの種ならざるをえない。過去の歴史と伝統は蔑視され、新たに民主主義の声は高いが、その真精神の浸透は期すべくもなく、この間隙に乗じて過激なる共産主義の擡頭が脅威となりつつある。まことに思想の不安、権威の動揺、価値の顚倒、今日より甚だしきはない。現代に生きる人々がいずこに魂の安らいを見出し、教養の在り方を求めんとするかは、切実な悩みである。

われわれが現代教養文庫を刊行するのは、かかる悩みに応えるためである。個性の充実と人格の陶冶は深き教養によつてもたらされる。教養によつて裏打ちされた個人が社会生活を営むとき、そこに初めて民主主義が円滑に機能するであろう。教養は民主主義の基礎であり、また民主主義は現代人の教養の支柱でなければならない。混沌たる世相と反覆常なき人情の中にあつて、渝らざる信念と、新鮮な熱情を以つて、中正健全なる教養の大道を歩むことが本文庫の至願である。旧きに泥まず新しきに走らず、広く各般の教養文献を網羅して、現代人の要請に応じ、新しき日本建設の一助たり得れば、われわれの望みは足りるのである。

昭和二十六年四月

社会思想研究会

―― 新　刊 ――

ハーンシヨウ著　服部辨之助訳
政治思想史

政治思想史の書で本書ほど小さいものはない。歴史家として又政治学者として有名な著者がギリシヤ・ローマ時代から現代に至るまでの政治思想史を、初学者むきにまとめた入門である。従来簡潔な概観は抽象的で難解に陥りやすいが、本書は平易にして精彩に富み、一般人の教養書としても好適である。

¥80

デュモリン著
近代思想とキリスト教

近代思想への眞実の対決は、現代に生きる何人も避け得ぬ義務である。マルクス主義・資本主義・自然科学的世界観・実存主義等を検討し、さまざまな思想傾向のただ中に正しい方向づけと適確な評価力とを見出そうとする本書は、現代社会についての広い視野と若い世代への行動の指針を與える。

¥100

猪木正道著
戦争と革命

レーニンばかりでなくラスキやカーまでが現代を戦争と革命の時代と呼ぶ。過去においても幾多戦争と革命が繰返されたが、現代の特徴はそれがひどく大規模で底が深いところにある。本書は南阿戦争より朝鮮戦争に至る二十世紀前半の歴史を分析して現代の危機を解剖し、今日の世界を動かす原動力を究明せんとする。

¥80

水谷啓二著
草土記

本書は一額縁商「草土舎主人」が多岐多難なる人生を〈いかに生きたか〉を記録したものである。著者は本書を単なる立志伝に陥らすことなく、向上意慾の主体としての一市井人を浮き彫りにしている。平凡な一人の人間の生涯が賭けられた人生こそ〈いかに生きるべきか〉を眞実感にあふれて味わせるであろう。

¥90

古谷綱武著
女性の幸福について

女性が本当に人間としての幸福な生活をいとなむためには、女性自身が情熱をもって自分の生活の幸福を求めなければならない。新しい女性の目覚めについて数数の文章を書き綴って来た著者が、恋愛・職業・家庭等あらゆる面から現代に生きる女性の生活を解きあかし、生活の智慧と技術とをさぐるエッセイ集。

¥80

永井潜著
結婚読本

結婚に関する性科学への認識が表面的に浅薄に流行するのは危険である。本書はこれらの問題を最新の性科学知識によって全般的に詳解し、結婚生活に対する周到な注意を喚起する。男女の清純な愛の結合を讃美して正しい結婚観を明示する本書は若き世代にはもとより一般父兄にも必読の宝典である。

¥100

北川冬彦著
シナリオの魅力

シナリオが映画芸術の根幹としていかに重要であるかは今日たれ一人疑うもののない事実である。しかしシナリオに対する論考というものはほとんどなされていない。シナリオが広く一般に愛読されている現在、本書はシナリオ文学の理解に役立つとともにシナリオ文学運動の将来に多くの示唆を与えるであろう。

¥120

荻原井泉水著
芭蕉と一茶

俳句は人間生命の表現であると主張する著者が、おのれの人間性を俳句に打込み俳句から自分の人間を打出した人としての芭蕉と一茶との句境を考究し、人間生命の基本的ないのちを掘り下げようとする。事実の穿さくや考証というよりも平易に親切に書かれた本書は一般読者にも興味深い読物である。

¥100

書名	著者・訳者	価格
共産主義・ファシズム・民主主義	ハイマン著 土屋清・弘訳	130
社会思想史十講 上下	社会思想研究会編	上80 下100
自由主義思想十講 上下	社会思想研究会編	上90 下80
現代社会思想十講 上下	社会思想研究会編	上90 下80
平和の哲学	谷川徹三著	80
スターリン	猪木正道著	60
新しい農家	藤山一雄著	90

―哲学・宗教―

書名	著者・訳者	価格
西洋哲学史	ウェッブ著 瀬沼茂樹訳	100
哲学入門	ラッセル著 柿村峻訳	90
西田哲学への道	下村寅太郎著	70
弁証法	岩崎武雄編	90
二宮尊徳の哲学	服部辨之助著	90
国家哲学	三谷隆正著	60
アウグスチヌス	三谷隆正著	70
イエスの生涯 上下	ルウドウィヒ著 中岡宏夫訳	各70

―芸術・文学―

書名	著者・訳者	価格
李陵	中島敦選集Ⅰ 氷上英廣解説	80
光と風と夢	中島敦選集Ⅱ 氷上英廣解説	100
幸福	中島敦選集Ⅲ 氷上英廣解説	120
革命と文学	青野季吉選集Ⅰ 亀井勝一郎解説	100
現代作家論	青野季吉選集Ⅱ 亀井勝一郎解説	80
文学と人生	青野季吉選集Ⅲ 亀井勝一郎解説	80
明治文学入門	青野季吉著	70
人生読本	武者小路実篤著	110
人間ニーチェ	秋山英夫著	70
ハイネ恋愛詩集	番匠谷英一訳	90
短歌に入る道	窪田空穂著	80
俳句の道	荻原井泉水著	70
一粒の麦	賀川豊彦著	130
月明学校	三上慶子著	80
映画の本質	今村太平著	90